

沖縄島国頭村奥の伝統的地名

宮城邦昌・島田隆久・齋藤和彦

はじめに

沖縄島最北端の地、国頭村字奥においては、地域で育み継承された山、川、海などの名称が忘れ去られていく状況にある。このままでは、地域の財産とも言える伝統的な知識が確実に失われる。

そこで、地域で生まれ育ち地名と慣れ親しんだ先輩達が、失われかけている地名の現状に憂え後世に伝承しようと、1990 年代初頭から地名収集に当り、実に 414 点の地名を収集した。地名収集から 18 年余が経た 2008 年 4 月、宮城邦昌は島田隆久氏から地名リストを受け、清書と地図作成の依頼を受けた。それから、リストの整理とともに、多くの仲間たちの協力により、猪垣等の現地調査や米軍の航空写真の判読、地形解析を行い、2012 年 3 月に完成したのが、「奥の地名図」である。

しかし、その初版図は、まだ検証が必要だったため参考図として扱い、さらに 4 年余の現地調査・聞き取り調査を行って作成したのが、「奥の地名図第 2 版」である。現地調査では、GPS（全地球測位システム）なども利用して、図上での位置調整や、説明文の追加など充実した内容に仕上がることができた。

本稿は、「奥の地名図第 2 版」の位置情報を国土地理院の電子地図（タイル：2016 年 8 月 1 日取得）に地名リスト番号として追記し説明を加えたものである^[1]。「奥の地名図」が“奥学”の字引として奥部落住民や多くの研究者に活用されんことを期待し、ここに、協力された下記の関係者に謝辞を申し上げる。

地名の収集から清書まで協力賜った奥区の関係者：宮城親徳（明治 38 年生）、宮城正男（明治 44 年生）、宮城久勝（大正元年生）、平安基光（大正 8 年生）、崎原栄昌（大正 14 年生）、宮城親明（昭和 2 年生）、上原信夫（昭和 3 年生）、比嘉秀康（昭和 5 年生）、島田隆久（昭和 12 年生）

地名の現地確認調査協力者：座安賢一・上原賢次・親川栄など「沖縄県勤労者山の会」

凡 例

奥の地名 414 個について、その位置を図 1 に整理番号で付した^[2]。次に地名の説明を整理番号、通称、[ウクムニー^[3]]、分類、【地図座標】、説明の順に記載した。説明の最後に「親徳図」などあるのは参考にした原図を示す。また、人物名については敬称を省略し、屋号と生年（西暦年）を記した。

[1] 本稿は、大西・宮城編（2016）において作成され、印刷刊行までは至らなかったが web 上で公開された「奥の地名リスト」を改稿したものである。

[2] ①一般地名 103 個、②山の地名 88 個、③史跡名 74 個、④海の地名 60 個、⑤川の地名 54 個、⑥水田の地名 35 個に新たに大分類した。

[3] ウクムニーが無いのは、「-」で示した。

[4] 親徳図とは：宮城親徳が 1984 年頃に作成した手書き図（奥領域の東、西、海の三部作）、島田図とは：島田隆久が 1990 年頃から 2008 年まで使用していた 1/25000 地形図を張り合わせた図に、地名を記入した札を張り付けていた図。詳しくは大西・宮城編（2016）を参照。

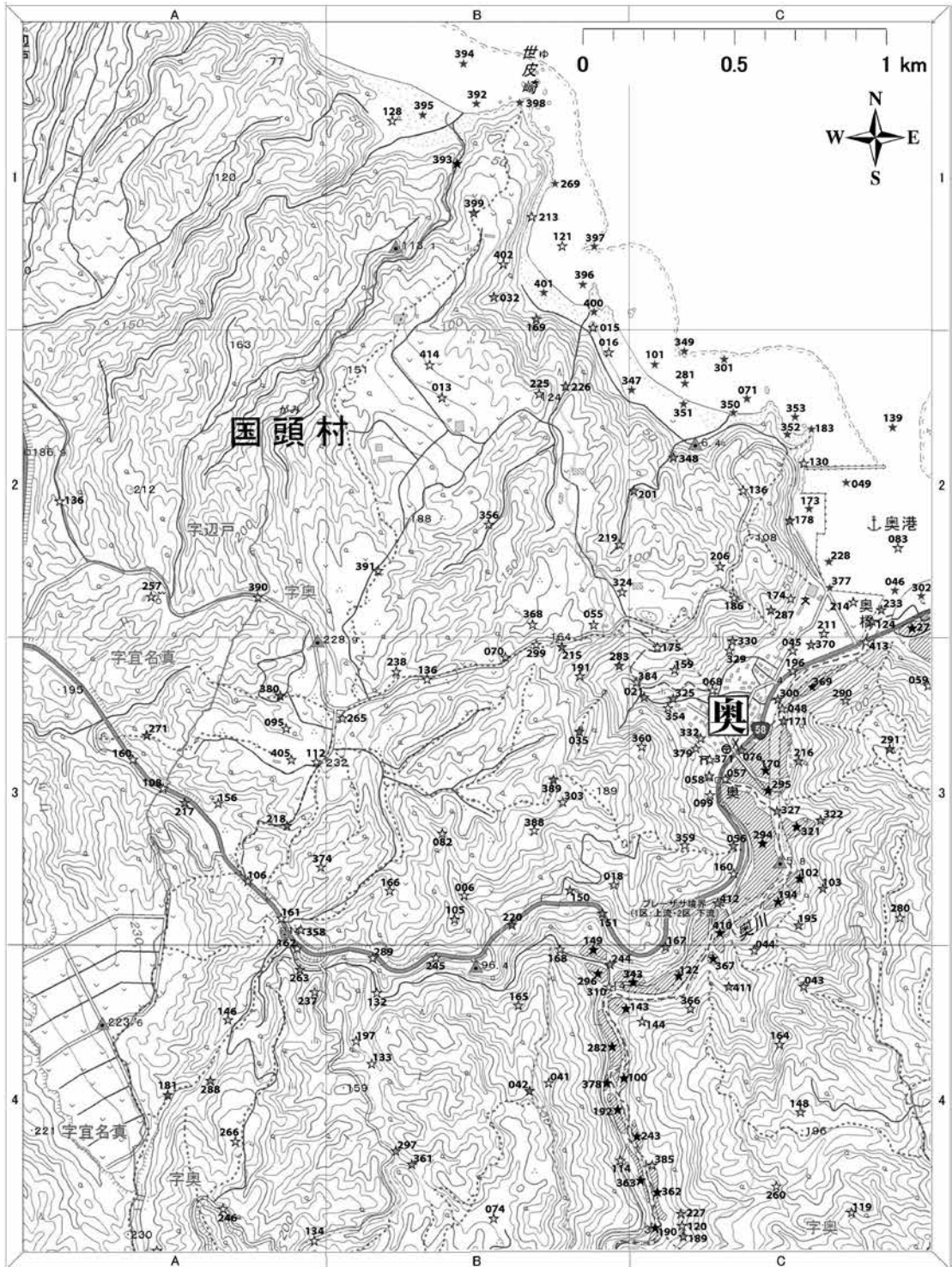


図1 奥および周辺の地名 (1) 1~4、A~C

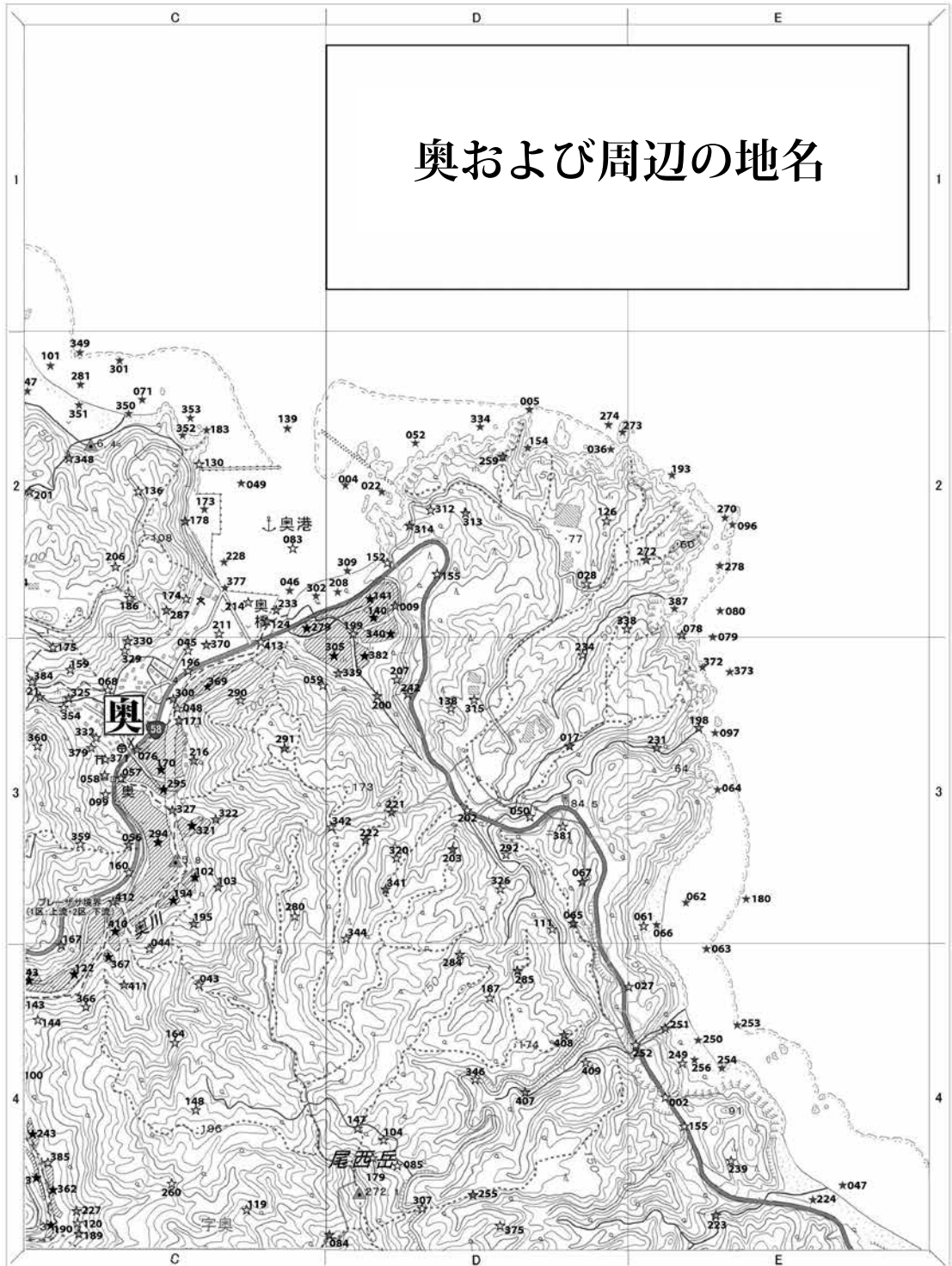


図1 奥および周辺の地名(2) 1~4、C~E

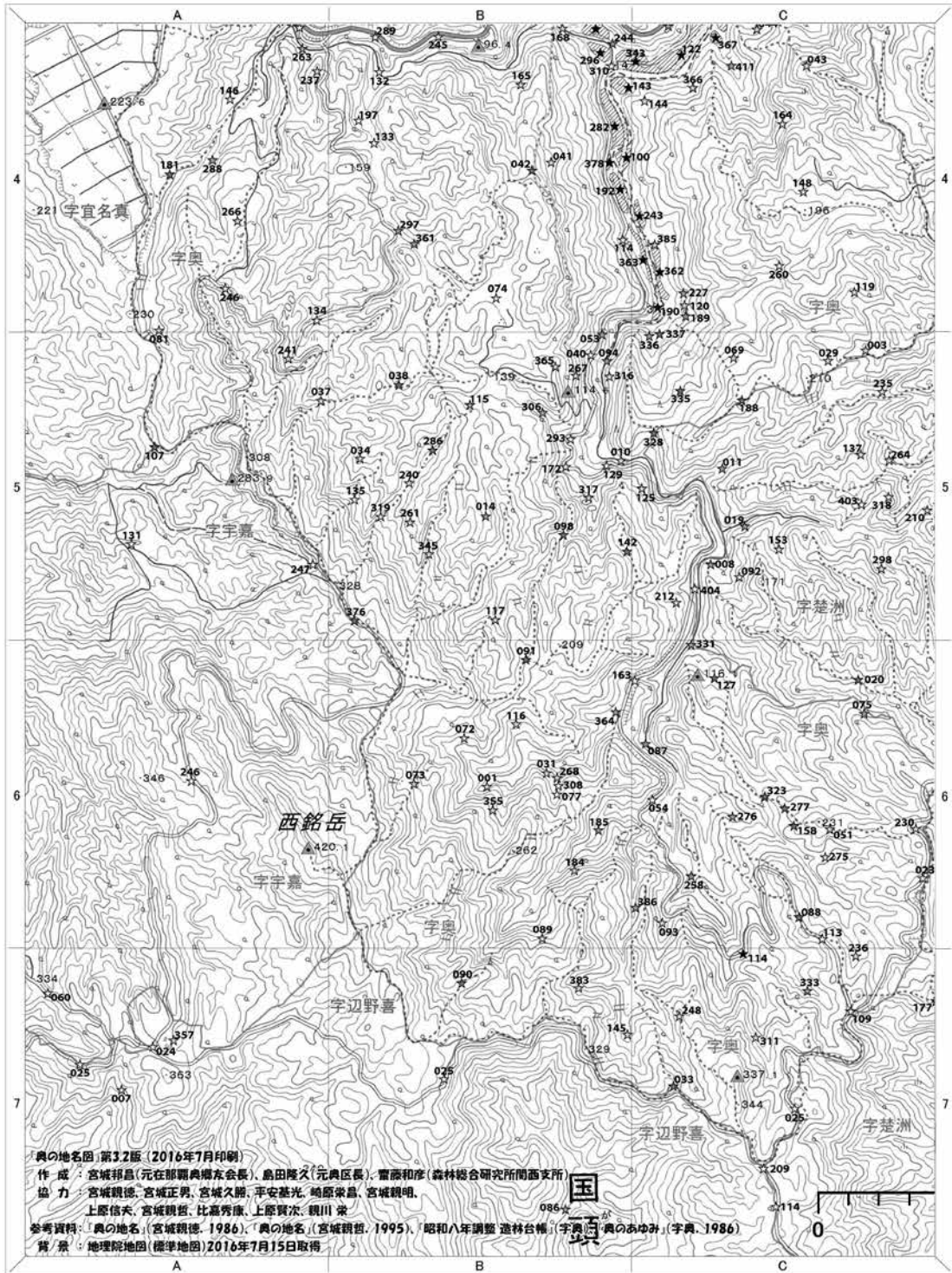


図1 奥および周辺の地名(3) 4~7、A~C

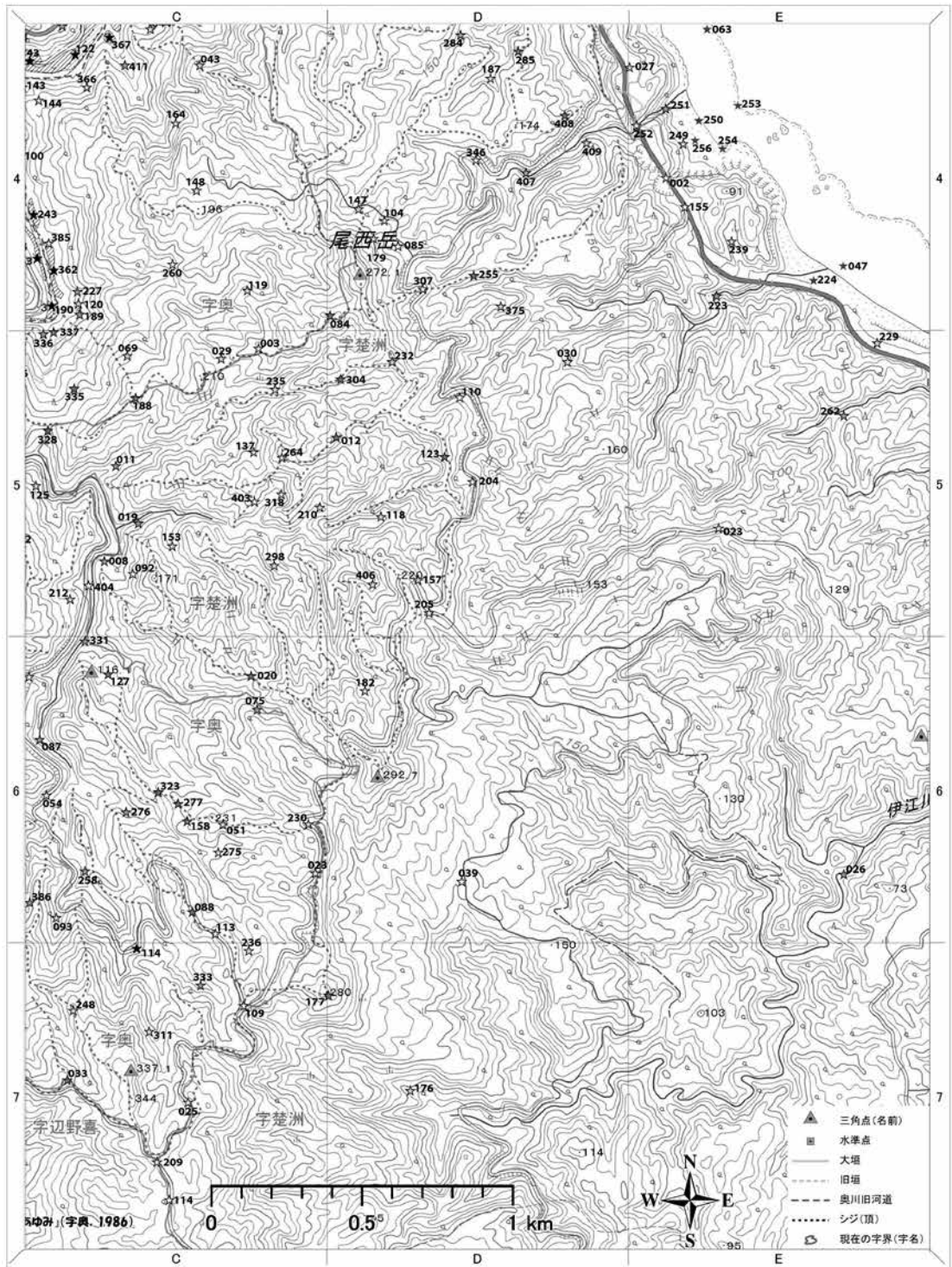


図1 奥および周辺の地名 (4) 4~7、C~E

001 アカギヤマ [アカギヤマ] 山名【6B中央】

奥の山名である「奥山」の南端部に位置する「58 林班」内にあり、奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を南下すると三角点（奥川、116.1m、6C 左上）の西側に奥川の支流に架けられた五号橋（6C 右上）がある。この五号橋（6C 右上）が架かったマチアラシガー（6B 右上）の中流域にアカギが造林されることが地名の由来である。現在もアカギの大樹が林立している。

002 アカザキ橋 [アカザキバシ] 史跡名【4E左中】

奥湾の北東側の「115 林班」小字名ハルーバル（加与原）の南端の奥と楚洲の境界付近に位置し、県道 70 号（2D 中下、4E 左中）のチルガー（4E 左上）に架かる橋で、チルガー橋（4E 左中）の東側の橋。この付近は戦後、金城秀一（徳門仲、1911 年生）が山羊を放し飼いでいた。

003 アカチチバー [アカチチバー] 一般地名【5C右上】

奥川の東側にある三角点（尾西岳、292.6m、4D 左下）の西側で、奥の山名「奥山、60 林班」の南側に楚洲の領域である「伊江原、県 53 林班」（奥ではコンヌヤマ（5C 右中）呼ぶ）との北側境界にある。その境界線が尾根を通る古道として残る。1940 年に楠木、イジュ、松が造林された場所の地名である。親徳図

004 アガリイノー [アガリイノー] 海名【2D左中】

奥湾の東側のイノー（礁池）名で、奥の小字名ハルーバル（加与原）である「115 林班」の西側に位置する海の地名で、奥湾のクチ（津口、2C 右上）の東側にあり北側に礁嶺が東側のアサチンサチ（2D 中上）から延びているが、クチに開けていて水深の深いイノーである。イノー公売（入札して漁業権を購入した）も行われるなど奥住民の食糧としての海産物を得る場であった。

005 アサチンサチ [アサチンサチ] 海名【2D中上】

奥湾の東側にある岬で、奥の小字名ハルーバル（加与原）である「115 林班」の北に突き出て、奥領域内の海岸では、この岬を境に東と西側の海の様相が異なり、西側は極めて穏やかであるが、東側は概要からの波が直接打ち寄せるので荒く、裾礁を形成しているが幅が狭く、が礁池としてはあまり発達していない。親徳図

006 アダギ [アダギ] 山名【3B中下】

奥の小字「113 林班、桑又原」の南側を国道 58 号線（3A 中央、3C 中下）が通り、三角点（桑又原、96.3m、4B 中上）の北側に位置する窪地の名称である。この窪地を流れる小川は、チヌプクガー（4B 右上）の支流で、上流にはウナガヌパッパーエーバテー（3B 中央）付近を源流としている。アダギには大戦中、翁長（奥の屋号）の避難小屋があり、家族で避難していた翁長ナベ（1915 年生）がパブ（ハブ）咬傷場所。「咬傷後、ユダイムシ（ナメクジ）で毒抜きが効して一命をとりとめ、その後米軍の捕虜となり、傷口の治療を軍衛生兵が行い完治した」との話を、長男の林廣（1937 年生）からうかがった。

007 アダンナカイクン [アダンナカイクン] 一般地名【7A中央】

辺野喜領域の「大川山、38 林班」内にあった開墾。イーⅡ号林道とチヌプク林道の合流点（7A 中上）の三叉路で、辺野喜山荘（7A 中上）の南側にある窪地に拓かれた開墾で、エー（リュウキュウアイ）を栽培していた。安谷屋の子供である宮城サチ（1917 年生）から、「今みたいに立派な道もなかったので、けもの道を通して奥の学校に通った。あまり遠いので、奥の親戚の家に泊まり込むのが多かった」とうかがったことがある。戦後、ミカン畑などとして使用されていたが放置されている。造林された杉やセンダンの大樹が往時をしのぼせるが、栽培されていたエー栽培の痕跡は確認されていない。

008 アッシマタ [アッシマタ] 川名【5C左下】

奥川を南下した中流域に境界をなす楚洲領域「伊江原、県 53 林班（奥ではユンヌヤマ（5C 中央）（5C 中央）と呼ぶ）」で奥川の支流アラマタガー（5C 中央）川尻から南側で奥川が大きく曲がるところ付近の地名で、四号橋（5C 左下）手前にある小川の合流点の川名。そこから尾根道が始まり、アラマタシジ（6C 右上）を経由して三角点（ゆうぐしく、292.6m、6D 左中）へと繋がる。

009 アニンダマーラ [アニンダマーラ] 水田名【2D左下】

奥湾の南東側に拓けた田畑の耕作地がある。「114 林班、楚意原」で、その北東側斜面に小さな湿田が棚田を成している。この湿田からカシギ（オキナワウラジロガシ）の大きな実が多く出土したことが名の由来。奥ではカシギの実をアニンと呼ぶが、食する習慣はない。子どもたちは季節になる山仕事の合間に拾い集めて、持ち帰り駒などを作り遊び道具としていた。

010 アハシマタ [アハシマタ] 一般地名【5B右中】

「113 林班」は北端を奥湾に接するメーバマ（2C 中下）付近に位置する小字名「辺野原」と「新田原」から始まり、奥川の西側を南下し、最南端が小字名「仲田原」となる。また「114 林班」も北端を奥湾に接した小字名「楚意原」から始まり奥川の東側を南下し、南端を小字名「菊連」とする。もう一つ奥の山名である「奥山、57 林班」の北端と「仲田原」と「菊連」がヒナフシ（5C 左中）付近で接するところを奥川が流れている。その小字「仲田原」・「菊厘」・「奥山、57 林班」の3つの領域が接合する所をアハシマタと呼んでいる。

奥川は河口からウブダーガーの手前のフィジガー（5C 左上、奥川の河川改修工事で大きな砂防ダムが造られている）まで落差のない穏やかな川である。そこからアハシマタまでは落差の大きい急流をなし、特にアハシマタの上流に設置された小さな砂防ダムの下は轟音を響かす滝となり、その滝壺をハンナイグムイ（雷鳴の淵、5B 右中）と呼んでいる。近くには戦前のウイバル林道工事で難渋した工事現場となったガンバ（5B 右中）の名が残る。アハシマタについての詳細は不明。親徳図

011 アハマタガー [アハマタガー] 川名【5C中央】

奥の山名「奥山、57 林班」と楚洲の領域である「伊江原、県 53 林班」（奥でユンヌヤマ（5C 右中）と伝承される）の境界線を南北に奥川が流れる。その最初の支流で、東側の山麓から奥川に注ぐのがアハマタガーである。上流にクインチャ（広葉杉）を植林したことに因むクインチャクブ（5B 右中）の名が残るが、クインチャは確認されてない。奥川との合流点にはクインチャが2本あり、造林跡としての名残を残す。戦後、奥川との合流点近くに製材所が設置された時期もあった。その跡地はスモモ畑になり、その後ミカン畑となったが現在放置されている。杉も造林されたようで杉が多く残る。

012 アハマタシジ [アハマタシジ] 山名【5D左中】

楚洲の領域である「伊江原、県 53 林班」（奥ではユンヌヤマ（5C 右中）と呼ぶ）は、西側の境界は奥川中流域である。東裾野を源流とする奥川の支流アハマタガー（5C 中央）の分岐点にあるクインチャ（広葉杉）から東側に三角点（ゆうぐしく、292.6m、6D 左中）から三角点（尾西岳、272.3m、4D 左下）に繋がる東脊梁山脈に繋がる尾根の名。親徳図

013 アブントー [アブントー] 一般地名【2B中上】

奥領域の北西端、「112 林班、世皮原」の西側に位置する。ユッピバマ（1B 右下）の南側にあるタチガミ（2B 中上）と呼ばれる標高 120 m 程の岩山がある。岩山は奥領域で、唯一隆起した琉球石灰岩で形成されている。タチガミの麓付近は標高 100m から 150m の北に傾いた緩やかな傾斜をなし周囲約 3km、面積にして約 28ha の平坦地である。石灰岩地帯の特徴であるドリーネも存在していたが、1972 年の沖縄復帰前後に牧場用地として整備され、ドリーネは埋められたがタチガミの円錐峰地形はそのまま残され、離水

ノッチには洞窟もある。離水ノッチはイノシシ垣（西大垣の第1区の一部）として利用されている。アブは穴（ドリーネ）のことで、アブントーはアブのある平坦地が名に因む。

014 アボーガー [アボーガー] 川名【5B中央】

奥の山名「奥山」領域の「57 林班」を流れる二号橋（5B 右中）に流れるハシッタヒガー（5B 中上）の中流域であるカーミーマタ（5B 中上）の旧取水場を、左側の支流を遡上しフシンパー（5B 中下）と呼ばれる尾根道の始まる所で、再び左右に分岐する。左側を遡上したところに落差 7m 程の滝があり、滝壺も素晴らしい所がある。その滝のある所の川名がアボーガーである。島田図

015 アマングスク [アマングスク] 一般地名【1B右下】

奥領域の北西端に位置する。「112 林班、世皮原」のフパダチバマ（2C 左上）とユッピバマ（1B 右下）の境をなすユッピヌタター（1B 右下）の南側に位置する小さな岩山の名称。頂上にはかつてウコール（香炉）があり、南側のタチガミ（2B 中上）にタンカー（遙拝）する場所であったと伝え聞かすが、現在はウコールなど痕跡は確認できない。奥集落では 1906 年の青年会創設当初から迷信打破に努めた結果、大正の初期には「御願不足」がないことを認識し、御願事や法事などが簡素化され、ユタを信じない生活習慣が継承されている。島田図

016 アマングスクダー [アマングスクダー] 水田名【2B右上】

奥領域の北西端に位置する。「112 林班、世皮原」のフパダチバマ（2C 左上）とユッピバマ（1B 右下）の境をなすアマングスク（1B 右下）の東斜面にあった小さな湿田の名称である。現在湿田跡は樹木に覆われその痕跡は失われている。島田図

017 アミサシジ [アミサシジ] 山名【3D右中】

奥湾の東領域「115 林班、加与原」の南側で、南から流れてきたダヒブガー（3E 左中）が北から東に向きを変える付近の西側にある尾根上にヌタバがあったと伝承される。奥ではイノシシが泥浴びするヌタバのことをアミサと呼ぶことに由来する。1928 年度と 1929 年度に松を造林。島田図

018 アラシクワー [アラシクワー] 一般地名【3B右下】

奥集落から隣の辺戸へ向かう途中、「113 林班、桑又原」で国道 58 号線（3A 中央、3C 中下）は、クワーギマタガー（3B 右下）の支流に架かるクワーギマタ橋（3B 右下）を通る。そのクワーギマタガーの上流域にある南向きの日当りのいい開拓地の名称がアラシクワーである。かつては奥集落の南側のメインパー（3C 左中）からホーグ（3C 左中～中央）を横切りヤマジー（3B 右中）へ繋がる山道の途中に位置していた。現在は奥集落から国道 58 号線（3A 中央、3C 中下）を西進し、クワーギマタ橋から約 150m 通過した所にあるヤマジー入口の農道と繋がっている。島田図

019 アラマタガー [アラマタガー] 川名【5C中央】

奥の山名「奥山、57 林班」と楚洲の領域である「伊江原、県 53 林班」（奥ではユンヌヤマ（5C 右中）と伝承される）の境界線を南北に奥川が流れる。その 2 番目の支流として、東側山麓から奥川に注ぐのがアラマタガーである。合流点付近には大きなヤマモモの木があり、川の南斜面では杉とクインチャ（広葉杉）が数本確認されている。奥川との合流点から支流を 200m 程遡上したところに落差 5m 程の滝がある。滝壺に落ちる水は白い筋をなし美しい。そこに南から支流が注ぐ窪地をクワイサクブ（5C 中央）と呼ぶ。滝を越え次に南から流れ込む支流にはハーブイガマ（コウモリが生息する洞窟、5C 右下）があるとされるが未確認。上流側の各支流にはゴエヌーヤカイクン（5D 中下）、カールメーカイクン（5D 左中）などの開墾跡がある。島田図

020 アラマタシジ [アラマタシジ] 山名【6C右上】

奥でユンヌヤマ (5C 右中) と伝承される「伊江原、県 53 林班」の西端が奥川に接する。奥川の 2 番目の支流アラマタガー (5C 中央) の合流点に、大きなヤマモモの樹がある所から尾根が立ちあがる。付近には往時に木を滑り落としたパンタの掘割跡が残る。その尾根は南のアッシマタ (5C 左下) から始まる尾根と途中で合流し、奥と楚洲の字境界線に沿って西から東にある三角点 (ゆうぐしく、292.6m6、D 左中) へと繋がる尾根をアラマタシジと呼ぶ。アラマタに因む名である。

021 アンガー [アンガー] 川名【3B右上】

奥の山名「奥山、55 林班」の北東部と小字名「113 林班、親田原」の西部を水源とし、奥集落のほぼ中央部を東に流れハーランチビ (3C 中上) で奥川と合流する小川の名称がアンガーである。集落を流れる部分は特にハーラ又はハーランクワー (小川) と呼ばれ、上之橋、中之橋、あづま橋、下之橋と四つの橋が架かり、ハーラは洗物をする生活の場でもあり、子供たちにとってはターイル (フナ) やタナガー (エビ)、ガニ (モクズガニ)、ウナジ (ウナギ) などの水生動物が豊富に取れる馴染み深い遊びの場でもあった。1937 年に集落の水源として製茶工場の西側に貯水タンクが設置され、水道が整備されたが上流部の農地開発で、1973 年に放棄された。また、時々氾濫したため、ハーランクワーは 1959 年頃 3 面をコンクリートで固められたため、生物が生息しない川となり、往時の生活の場としてのハーランクワーは消えた。昔、製茶工場近くにはサトウマー (砂糖屋) があって、ジートイグナ (砂糖を固める石灰調合係り) はウンブラウンマー (宮城親睦、1890 年生) と伝えられる。島田図

022 アンヌサーイノー [アンヌサーイノー] 海名【2D左中】

奥湾の東側イノー (礁池) で、「115 林班、加世原」の先端が奥湾に接する海岸一帯である。ハラミガー (2D 中央) の河口は浸食された大きな岩が多い海岸である。イノー公売も行われた。南端の岩場は奥区が管理したイノシシ垣である東大垣第一区の起点であった。島田図

023 イー I 号林道 [イーイチゴーリンドー] 史跡名【5E左中】

三角点 (尾西岳、272.3m、4D 左下) の南東側に位置する、楚洲領域で「伊江原、県 51 林班」と「県 50 林班」の境界線上を東西に通る林道で、県道 70 号 (2D 中下、4E 左中) やスイ林道と伊江林道の合流点 (5D 中央) を介して、奥や辺野喜、与那などに繋がる。島田図

024 イー II 号林道とチヌブク林道の合流点 [イーニゴウリンドートウ] 史跡名【7A中上】

宇嘉領域である「知意花山、県 56 林班」と辺野喜領域の「大川山、38 林班」の境界で、国道 58 号線 (3A 中央、3C 中下) とチヌブク林道の合流点 (4A 右上) を起点とし南に延びるチヌブク林道 (4A 中下、6A 中央) の終点である辺野喜山荘 (7A 中上) 南でイー II 号林道 (7B 中央、7A 左中) と交差する所。南側にアダンナカイクン (7A 中央) がある。島田図

025 イー II 号林道 [イーニゴーリンドー] 史跡名【7B中央、7A左中】

奥領域の「奥山」の南に境界をなす辺野喜領域「大川山」の境界線上を東西に通る林道で、奥領域南の三角点 (伊集湖北、337.0m、7C 中央) の南に位置するスシマタグチ (7C 中央) で、奥から南下してきた奥与那林道 (7C 中上、7C 中下) と交差する。南下すると与那へ、東に奥と伊江へ、また西に辺野喜と宇嘉へ繋がる。島田図

026 イーガー [イーガー] 川名【6E右下】

奥集落の南、三角点 (ゆうぐしく、292.6 m、6D 左中) の東側にある楚洲領域「伊江原」で、県 48 林班、49 林班、50 林班、57 林班と 61 林班の広域を水源とする川である。県 57 林班東部と 48 林班、49 林班が交差する付近のイーガー上流にはジーブグワーカイクン (宜保小 (屋号) が拓いた開墾、7D 中央)

跡がある。島田図

027 イーゲンバル [イーゲンバル] 一般地名【4E左上】

奥集落の北東側にある「115 林班、加与原」の南東部に付近に位置し、奥集落から県道 70 号（2D 中下、4E 左中）を東に行くとチルガー橋（4E 左中）の手前左に親亀小亀のモニュメントがある。この一帯を開拓した平良井元（屋号：井根）の名に因む地名である。芋畑と湿田があった。島田図

028 イードヤンクヌターンクブ [イードヤンクヌ(〜ン)ターンクブ] 山名【2D右下】

奥集落の北東側に位置する「115 林班、加世原」の中程にある南から北の海岸に延びる窪地がある。窪地は小川をなし、北側の海岸に流れ落ちる所がイシンミーイノー（2D 右上）である。その小川を南に遡上したところに、カマッチヤークブ（2D 右中）とイーゾグアタヌクブと2つのクブ（窪地）名がある。イーゾグア（奥の屋号：栄門小）が田を拓いた窪地に因む。親徳図、島田図

029 イーナガカイクン [イーナガカイクン] 一般地名【5C中上】

三角点（尾西岳、272.3m、4D 左下）の西「奥山、60 林班」と楚洲領域「伊江原、県 53 林班、ユンヌヤマ（5C 右中央）」が境界をなすヒナフシ（5C 左中）から尾西岳に繋がる中間付近の北側の奥領域にある。尾根の東側にアカチチパー（5C 右上）、西側にシバシジ（5C 中上）と繋がっている。栄口小（奥の屋号）の栄永が拓いた開墾。1942（昭和 17 年）度に松、イジュ、楠木を造林。島田図

030 イーバル林道 [イーバルリンドー] 史跡名【5D右上】

楚洲領域の「伊江原、県 51 林班」にあるタチガー（4E 左下）流域に造られた林道。西端は奥Ⅱ号林道（スイ林道）に繋がり、東端はダナ（本稿 237）の西側で県道 70 号（2D 中下、4E 左中）に合流する。法面が急峻高く、道幅が狭いため交互通行に困難をきたす林道である。2007 年頃竣工。島田図

031 イシシチ [イシシチ] 一般地名【6B右中】

奥の山名「奥山、57 林班」と「58 林班」の境界を流れる奥川の支流であるマチアラシガー（6B 右上）は奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）に架かる五号橋（6C 右上）下流で奥川と合流する。マチアラシガーを遡上するとナガエーバテー（6B 右中）入口とアカギヤマ（6B 中央）の間の浅い川で頁岩（千枚石）が川底を敷き詰めていることに由来する。親徳図、島田図

032 イシビガー [イシビガー] 川名【1B中下】

奥集落の西海岸、「112 林班、世皮原」にあるユツピバマ（1B 右下）に注ぐ 3 番目の川の名称である。急峻な小川で、戦前の県道跡（1B 中右）と山裾の間に拓いた田圃へ水を引くために石積みので（樋）を造り用水路としたことに由来する。島田図

033 イシプドゥチ [イシプドゥチ] 山名【7C左中】

奥集落領域の最南端にあるスシマタグチ（7C 中央）の西側で、「奥山、58 林班」と「59 林班」が、境界線を南北にしてイーⅡ号林道（7B 中央、7A 左中）と接するシジ（頂）がイシプドゥチ（石敷居）である。このシジの尾根は北側のヤナマタガー（6C 左下）へと下って行く。南側を通るイーⅡ号林道の拡幅整備が行われ、イシプドゥチをイメージする痕跡は確認できない。三角点（伊集湖北、337.0m、7C 中央）の西。島田図

034 イジーヤーヌウンメークブ [イジ(ー)ヤーヌ ウンメー'クブ] 山名【5B左中】

奥の山名「奥山、57 林班」の北西側に位置する。三角点（仲田原、114.6m、5B 右上）の西側で 2 号

橋に架かるハシッタイガー (5B 中上) の上流域で、カーミーマタ (5B 中上) の集水場の右支流の上流で、旧チヌフク林道終点 (戦後) (4A 右下) の北側にある窪地である。伊地屋 (奥の屋号) の祖父が開拓した事に由来する。親徳図、島田図

035 イシンチジ [イシンチジ] 山名【3B右中】

奥集落の西側で、「奥山、55 林班」と「113 林班、親田原」が接する付近から奥集落に流れる川をアンガー (3B 右上) と呼ぶ。アンガーに南から注ぎこむが支流の上流付近を、奥集落が管理したイノシシ垣で西大垣第三区がある。このイノシシ垣の北側に頁岩 (千枚岩) を基盤とした岩山がある。その岩山がイシンチジである。往時は奥から辺戸へ行き来したシーバーミチ (3C 左上) のヤツチェーイシ (3C 左上) 付近から南側を眺めると円錐峰の岩山が聳え立っていた。現在は樹木に覆われその姿は消えた。島田図

036 イシンミーヌイノー [イシンミーヌイノー] 海名【2D右上】

奥湾の東側「115 林班、加世原」の中程にある南から北の海岸に延びる窪地がある。窪地から流れる小川が、北側の海岸に流れ落ちる所の裾礁に小さな礁池がある。その礁池をイシンミーヌイノーと呼ぶ。沖側にはナガシンクワグチ (2D 右上) がある。親徳図、島田図

037 イズーガッブル [イズーガッブル] 一般地名【5A右上】

奥の山名「奥山、56 林班」と「57 林班」の境界線が、「113 林班、仲田原」の東側にある三角点 (仲田原、114.6m、5B 右上) から西に延びる尾根となっている。この尾根が林班境で通称イズーミチ (5B 左上) と呼ばれる古道である。このイズーミチが旧チヌフク林道終点 (戦後) (5B 左中) の途中を横切り南西側へとのびチヌフク林道 (4A 中下、6A 中央) と三角点 (奥山南、283.9m) とチヌフク林道と宜名真林道との合流点 (5A 右下) の中間付近の尾根に続いている。

そのイズーミチと旧チヌフク林道終点 (戦後) の途中で交差する部分がコブ (瘤) 状に盛り上っていたことに因む。直訳するとイズーのコブ (瘤) である。島田図

038 イズーミチ [イズーミチ] 山名【5B左上】

奥川中流域ウブダーガー (5B 右上) の西岸を通る奥与那林道 (旧ウイバル林道、4B 右中) の西上に、三角点 (仲田原、117.6m、5B 右上) がある。山名「奥山、57 林班」内に位置する。そこから西に繋がる尾根はチヌフク林道 (4A 中下、6A 中央) わきにある三角点 (奥山南、283.9m、6A 右中) の東まで続いている尾根道をイズーミチと呼び。旧チヌフク林道 (戦前、4A 右下) から旧チヌフク林道 (戦後、5B 左中) と繋がる所付近でイズーミチと交差するところがイジューガッブル (5A 右上) があり、尾根の古道は林班境界線上にあることから現在でも往時の山道として残る。また尾根の南側の谷は二号橋 (5B 右中) を経て奥川に流れるハシッタヒガー (5B 中上) が流れ。その中流域のクラガー (カーミーマタ付近の川名) 付近では、1982 年～1996 年までの間、簡易水道の集水場が設置されていた。島田図

039 イソ林道 [イソリンドー] 史跡名【6D中下】

奥集落の南、三角点 (ゆうぐしく、292.6m、6D 左中) の東側の楚洲領域「伊江原」をほぼ東西に延びる林道である。県 49 林班と 50 林班を南北に通る林道、北はイー I 号林道 (5E 左中) に、南は奥与那林道 (7C 中上、7C 中下) に繋がる。途中のイーガー (6E 右下) 上流付近にはジープグワーカイクン (7D 中央) の住居跡がある。島田図

040 一号橋 [イチゴーバシ] 史跡名【5B右上】

1933 年にウイバル林道終点 (戦前、6C 左中) の 1 期工事がハッテン橋 (部落から約 1km、4B 右上) からヒヤギマタ (部落から約 3.7km、6C 左上) までの全長 3km、幅員 3m が国の直営工事として実施された。ウイバル林道で最初に架かる橋名を一号としたことに因み、一号から五号橋までの命名された。奥

川と一号橋川の合流点付近では、奥集落が管理した西大垣と東大垣がウブダーガー（5B 右上）で合流する。
島田図

041 イチリンパナ [イチリンパナ] 一般地名【4B右中】

イチリンパナは、奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）が奥川沿いに南へ延び、ハッテン橋（部落から約 1km、4B 右上）から一号橋（5B 右上）、二号橋（5B 右中）、三号橋（5B 右中）と続き、ウブダーガー（5B 右上）の上流のガンバ（5B 右中）付近の西斜面の領域である。「113 林班、仲田原」にあり、三角点（仲田原、114.6m、5B 右上）は一号橋と二号橋との間の林道西斜面にある。その領域の標高約 80m の西斜面には西大垣第四区がチヌブクガー（4B 右上）を起点に一号橋まで続き、ウブダーガー（5B 右上）で東大垣第六区と連結する。小字名「仲田原」の東斜面をイチリンパナと呼んでいる。かつて斜面には段々畑が開かれ畑小屋や牛小屋もあった。イノシシ垣を越えた山への道であるウチバルカイクン（4B 中下）への道、サーンケー（4B 中上）への道がハッテン橋を起点に続いていた。島田図

042 イチリンパナシジ [イチリンパナシジ] 山名【4B中央】

イチリンパナ（4B 右中）付近で奥集落が管理した西大垣第四区の西上にある南北に延びる尾根である。山名「奥山、56 林班」に位置する。そこにある尾根道は南側でイズーミチ（5B 左上）に繋がり、途中の西への山道はウチバルカイクン（4B 中下）やサーンケー（4B 中上）へと繋がっていた。島田図

043 イチンマシ [イチンマシ] 一般地名【4C中上】

イチンマシは奥集落と南南東側にある尾西岳（272.3m、4C 左下）との間にある山名「奥山、60 林班」内にある。部落が管理したイノシシ垣である東大垣第三区と第四区の結合点の外にある。そこを通る尾根道はシルブクジ（3C 中下）から尾西岳へと繋がっている。島田図

044 イチンマシクワー [イチンマシクワー] 一般地名【4C中上】

奥集落の南側にある「114 林班、菊連」領域で、奥川の東にある窪地に拓けた湿田付近をイチンマシクワと呼ぶ。親徳図、島田図

045 イッシンドー [イッシンドー] 史跡名【3C中上】

奥集落内のテイコウヤーヌアジマー（定光屋の交差点）から奥小学校へ通学路名がイッシンドー（一心道）である。右に行くと墓地・県道 70 号（2D 中下、4E 左中）へ繋がり、直進すると奥小学校を左にメーバマ（2C 中下）に通じていたが、1967 年 10 月の運動場拡張工事で運動場が東側に拡幅されたためイッシンドーは奥学校正門へ繋がり、名実ともに通学路となった。かつてはメーバマまで一直線の道で、北風の吹き付ける冬場は風を避け民家の脇道を通り通学したものである。現在は道の右側に広がっていた田圃であるミーダー（3C 中上）は、畑に代わり往時の田園風景は消えた。島田図

046 イナトウ [イナトウ] 海名【2C右下】

イナトは港の古語である。奥では奥川河口付近のことをイナトチビまたはワナーと呼んでいた。そこに架かっていた橋をワナー橋（3C 右上）と呼んでいた。奥川河口のワナー橋から下流域のイナトウ付近は湿地帯（潟）は汽水域を構成し、マングローブやビー（イグサ）が生い茂っていた、そこにはガサミ（ノコギリガザミ）やトーンヤンメーガニ（オキナワアナジャコ）などが生息していた、また 1944 年 10 月 10 日の空襲で沈没・焼失した奥共同店所有の「伊福丸」45トンの残骸が泥に埋もれていた。島田図

047 イノーガマ [イノーガマ] 海名【4E中下】

県道 70 号（2D 中下、4E 左中）を東に行った楚洲領域内の「116 林班」にあるタチガー（4E 左下）の河口に開けたタチガーバマ（4E 中下）の裾礁にある窪地がある。イノー（礁池）のガマ（穴）が名に

因む。イノー公売。島田図

048 イビガナシ [イビガナシ] 史跡名【3C中上】

奥の拝所、奥集落の東側にあるナンチンムイ（標高173m、3C右中）と呼ばれる丘がある。「114林班、楚意原」南西側と「多和田」で構成する丘である。ナンチンムイから西に下る尾根が集落センター近くの奥川と接する付近に小丘がイビガナシである。

その下の川で淀んだ所を、イビガナシヌフムイ（淵）と呼び、淀みの反対側の砂場をイビガナシヌイブ（砂州）と呼んでいた。小丘のイビガナシには、イビサトヌシなる男神を祀るイビガナシヌカミンヤーと呼ばれる祠がある。1964年頃まで赤瓦葺の祠で、その屋根瓦にガジュマルが根を張り、また西端の奥川上の縁には祭温時代に植えられたと伝承される松の大木があり、その枝は奥川の西岸の田圃まで張延びていた。この松はカミンヤーヌマチと呼ばれ枝振りが美しいことから名勝として部落民から親しみ誇りとされていた。この松は1956年頃、松くい虫駆除を口実として、拝み倒された。イビガナシの岩肌には用水路（ピー、樋）が掘り込まれ、南にあるピドウムイ（3C中央）のウエーク（堰）から北にあるマンカー（3C中上）の田へ送水していた。また、イビガナシのイブとフムイは、子供達の水遊び場であった。往時の面影は消えたが、新たに造られたコンクリート祠の裏側に切り倒され、苔むした老松の株痕が威風を物語っている。島田図

049 イリイノー [イリイノー] 海名【2C中右】

奥湾の西側に位置するイノー（礁池）である。名称のイリは西の事で、奥湾の西側のイノーという位置的な名称である。1980年頃から始まった奥港の築港によりイノーは掘削され、埋めたられサンバシ（栈橋、2C中央）や防波堤が整備されたためイリイノーは姿を消した。かつて、このイリイノーにはハマサンゴが群生し、ペーイシ（石材）としてハマサンゴを切り取り、墓や畜舎の囲や住宅の塀の建材としていたが、築港時に多くのハマサンゴの残骸が出土したどうか。イノー公売、島田図

050 インヌクワバル [インヌクワバル] 一般地名【3D中央】

奥の共同イノシシ垣である大垣（東大垣約4.2km、西大垣約4.7km、全長約8.9km）が、奥区で維持管理されていた頃、その大垣を破り耕作地に侵入したヤマシ（イノシシ）の捕獲を奥区から委託された者をインビキ（犬引き）と呼ぶ。戦前はイノシシの捕獲数が多く、イノシシ垣の外でも捉える事が出来たので、部落からの手当てはなかった。しとめたイノシシの肉を自由に売りさばき収入源にして、生活が成り立っていたからである。戦後はイノシシの数が減り、イノシシ垣内への侵入が少なくなり、犬の餌代を部落から援助する事になったが、現金を支給するのではなく、犬の餌場としてウム（イモ）畑を与えたのである。そのイモ畑がインヌクワバルの名に因む。場所は現在の県道70号（2D中下、4E左中）を東に約2km行った所の西側の窪地にあった。そこはウグミチ（奥から楚洲へ通じる山道、3D右下）沿いで、東側の海岸、ウグ（3E左下）に注ぐダヒブガー（3E左中）の中流域である。ダヒブガーは県道70号（2D中下、4E左中）の南側から向きを南東に変えスイ林道沿いに遡上しナンヨーバル（3D中央）付近を通るナハマガー（4D中上）を源流とする川である。奥領域北東側の「115林班、加世原」と楚洲領域「伊江原、県52林班」が境界を接する楚洲領域の北側に位置する。島田図

051 ウイヌナンタルグチ [ウイヌナンタルグチ] 一般地名【6C中央】

奥集落からウイバル林道終点（戦前、6C左中）を約4.3km行った五号橋（6C右上）があり、そこから約200m南下した所にかつて木炭集積場があった。そこから奥川の支流の一つであるウフグシクガー（6C左中）におり、支流であるナグンペーガー（6C中央）を少し遡上した所から北側に登る尾根にあがる。尾根は三角点（ゆうぐしく、292.6m、6D左中）の南西側にあるタバクバテー（6C右中）へと繋がり、そこでスイ林道と合流する。この尾根をナグンペーシジ（6C中央）と呼び、ナグンペーガーから上がった所をヒサヌナンタルグチ（6C中央）で、ゴーミチ（6C中央）、ウイヌナンタルグチを経てタバクバテーでスイ林道に合流する。「ナンタル」についての意味合いについては不明である。親徳図、島田図

052 ウイノー [ウイノー] 海名【2D左上】

奥湾の東側、「115 林班、加世原」の北西端の礁嶺と奥湾の津口に囲まれた位置にあるイノー（礁池）である。1963 年頃まで夏場に、クサビ（ペラ）釣りに行った時イノー内を泳ぐ機会があったが、モー（ホンダワラ（褐藻類））が 2m ほど長くのび波に揺れているようすは、幻想的な風景であった。浜畑（奥の屋号）のおじいさんがイノー公売で高額で買ったイノーとして伝承されている。島田図

053 ウイバルインドウ [ウイバルインドウ] 史跡名【5B右上】

奥川の中流域に南に延びるアムトゥ（川の堤防）と奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）に挟まったナハダー（4B 右上）、ウルグチダー（4B 右中）、シムドグワダー（4B 右中）などに灌漑する水源として、ウイバル林道 1 番目に架かる一号橋（5B 右上）の川から灌漑水路として 1933 年に構築されたのが、ウイバル水路いわゆるウイバルインドウである。島田図

054 ウイバル林道終点（戦前） [ウイバルリンドー] 史跡名【6C左中】

奥集落から南に約 1.2km で奥川に合流するチヌブクガー（4B 右上）がある。1933 年に、ウイバル林道 1 期工事がチヌブクガー（4B 右上）からヒヤギマタ（6C 左上）までの約 3km が施行され、続いて 1937 年から 2 期工事がヒヤギマタからシナシジリガー（6B 右中）の手前までの約 700m が施行された。その位置がウイバル林道終点（戦前）である。チヌブクガー（4B 右上）に架設された橋のおかげで、ウイバル方面からの林産物や農作物の運搬が楽になり、部落の発展に大いに役立ったことに因みハッテン橋（4B 右上）の名が残る。1 期工事ではガンバ（5B 右中）の岩を掘削するのに難渋し、2 期工事ではマチアラシガー（6B 右上）に架かる五号橋（6C 右上）の架設予算が計上されてなく、奥の先人達の努力により奥共同店からの借り入れにより架設させ、完成後工事費用を全額予算化させたとする伝承もある。ウイバル林道はハッテン橋から始まり、一号橋（5B 右上）から五号橋（6C 右上）まで六つの橋が架設され、奥の林業発展に大きな役割を果たした。往時の川を利用したり、フイジ越えをせずに、直接林産物の搬出が可能になったのである。島田図

055 ウイントー [ウイントー] 一般地名【2B右下】

1951 年に完成した奥一辺戸間の旧道（2A 左中、2C 中央、3B 中上）と奥集落が管理したイノシシ垣である西大垣第二区が交差するシーバーヌチジンパー（シーバー頂の坂）の西側に位置する。「112 林班、世皮原」の南東端に位置する。ウイントーは上の平地地に因む。茶畑が開かれフパダチガー（2C 左中）の上流を横切りアブントー（2B 中上）へ通じる山道の入口であった。1970 年以降に、チジンパーの麓から西の方へイノシシ垣沿いに農道が整備され、イノシシ垣は消滅したが立派な道がアブントーまで続いている。島田図

056 ウエーダ [ウエーダ] 水田名【3C中央】

奥集落の南東側で奥川は南北方向から東西に大きく蛇行し、その流域の水田を南北に分けて東から西に流れウッカー（3C 中央）の淵の岩場に突き当たり北に向きを変えて流れる。南北に流れる奥川流域にある西側を「113 林班」が囲んでいる。その「113 林班」の北側から 2 番目の小字名が「親田原」で、三角点（親田原、5.8m、3C 中央）が設置されている付近の田園地帯をウエーダと呼ぶ。1969 年 10 月の大土砂災害で田園は埋まり田園の復興をえずに、日本復帰後の減反政策と重なり田園は消えた。島田図

057 ウエーダワタイグチ [ウエーダワタイグチ] 川名【3C中央】

奥集落の東側の「114 林班」の北から 2 番目の小字名「多和田原」の裾野に広がる田園地帯をサバンナー（3C 中央）と呼ぶ。現在の「奥ヤンバルの里」の関連施設が 2001 年 4 月に設置された。「奥ヤンバルの里」レストランの名称「サバンナー」はその名残である。かつてのウッカー（大川、3C 中央）は奥集落入口と「奥ヤンバルの里」近くを通る国道 58 号線（3A 中央、3C 中下）沿いに流れサバンナーと南側のウエーダ（3C

中央)の田園地帯の間を東から西に蛇行して流れていた、サバンナーからウッカーの東側上流の浅瀬を渡りウエーダと行き来する渡口のことをウエーダワタイグチ(親田渡口)と称していた。現在は無い。島田図

058 ウガミンフシ [ウガミンフシ] 一般地名【3C左中】

奥集落は「113林班、辺野原」の東麓に開けた位置にある。その南斜面が「113林班、親田原」で、小さな丘となりミヤゲムイ(3C左中)と呼ばれる氏神様を祀る崇高な場となっている。ミヤゲムイの南斜面を「御神の後、という事でウガミンフシと称している。その場所は、段々畑がイモ畑となり、湿田もあった、国道58号線(3A中央、3C中下)の拡幅工事のため湿田部の斜面を削った工事現場からアニン(ウラジロガシの実)が出土した。森に覆われ往時の段畑や棚田の風景はない。島田図

059 ウガンバー [ウガンバー] 山名【3C右上】

奥川の東側に位置する「114林班、楚意原」は、奥湾に面するスイ(2D左下)の平地がある。中央部を南東から北西に流れるスイガー(3D左上)の支流であるフガンチビ(3D左上)がある。その南側にナンチンムイ(標高173m、3C右中)があり、その北斜面の段々畑の坂道をウガンバーと称する。ウガンバーのイーチャーヤ(奥の屋号:栄口)の畑には奥で一番大きな椿の木があるとうかがっているが、未確認である。島田図

060 ウカ林道 [ウカリンドー] 史跡名【7A左上】

三角点(西銘岳、420.1m、6A右下)から南西約850m付近に、辺野喜山荘(7A中上)があり、その南側にイーⅡ号林道とチヌブク林道の合流点(7A中上)が東西にとおり、そこを西に行くとイーⅡ号林道(7B中央、7A左中)から北西方向に分岐する林道をウカ林道と呼ぶ。宇嘉や宜名真集落に繋がる。島田図

061 ウグ [ウグ] 一般地名【3E左下】

奥集落から県道70号(2D中下、4E左中)を東に約2.5km地点にリュウキュウヤマガメの大きなモニュメントが建立されている。その付近がウグである。奥領域「115林班、加世原」に位置し、楚洲と字境界をなすのがチルガー(4E左上)である。かつては奥区が管理したイノシシ垣の一つであるウグ垣が構築され、その領域内がウグと呼ばれた所である。県道の拡幅工事ではほとんどが失われた、現在のリュウキュウヤマガメのモニュメントがある法面の頂上付近がウグシジ(3D右下)と呼ばれる稜線を通り、字境界となっている。開墾跡としてのイーゲンバル(4E左上)、ウグイノー(3E左下)、ウググチ(4E左上)、ウグサチ(3E左中)、ウグバマ(3E左下)などの地名が残る。島田図

062 ウグイノー [ウグイノー] 海名【3E左下】

奥集落から県道70号(2D中下、4E左中)を東に約2.5km地点にリュウキュウヤマガメの大きなモニュメントが建立されている。その付近がウグ(3E左下)である。奥区と楚洲区の境界をなす地で、ウグの海岸にあるウグバマ(3E左下)で裾礁に構成された浅い礁池をウグイノーと呼ぶ。イノー公売。島田図

063 ウググチ [ウググチ] 海名【4E左上】

奥集落から県道70号(2D中下、4E左中)を東に約2.5km地点にリュウキュウヤマガメの大きなモニュメントが建立されている。その付近がウグ(3E左下)である。奥区と楚洲区の境界をなす地で、ウグの海岸でウグイノー(3E左下)と外洋を繋ぐ礁嶺の割れ目である津口を、ウググチと呼ぶ。親徳図、島田図

064 ウグザチ [ウグザチ] 海名【3E左中】

ウグ（3E 左下）の北側にある崎で、かつての奥区が管理したイノシシ垣（ウグ垣）の起点がウグザチである。ウグ垣はウグザチを起点にウグシジ（3D 右下）を最高位置にめぐらし終点を東側の奥・楚洲字境界であるチルガー（4E 左上）の河口まで全長約 1.5km のイノシシ垣であった。ウグ垣は県道 70 号（2D 中下、4E 左中）の拡幅工事で、ほとんどが失われているが、ウグバマ（3E 左下）に降りる古道がウグザチのイノシシ垣起点付近に残っている。親徳図、島田図

065 ウグシジ [ウグシジ] 山名【3D右下】

ウグ（3E 左下）の西側にあり一番高い尾根をウグシジと呼ぶ。ウグシジは奥区と楚洲区の境界となり境界線伝いの古道があり、奥区からのピダカタ（東側）の村々へ繋がる道となっていた。この古道とイノシシ垣（ウグ垣）は県道 70 号（2D 中下、4E 左中）の拡幅工事でほとんどが消えた。チルガー橋（4E 左上）の上流側に秀一橋（金城秀一（徳門仲、1911 年生）が造った橋）が残る。島田図

066 ウグバマ [ウグバマ] 海名【3E左下】

ウグ（3E 左下）の海岸にあるウグバマは、県道 70 号（2D 中下、4E 左中）を約 3km 東に行った所に位置する浜である。県道 70 号からウグバマに降りる道もあったが、放置され道跡が消えている。島田図

067 ウグミチ [ウグミチ] 山名【3D右下】

ウグ（3E 左下）の西側にあり一番高い所であるウグシジ（3D 右下）は、奥区と楚洲区の境界線となり、境界線伝いに古道があり、奥区からのピダカタ（東側）の村々へ繋がる古道をウグミチと呼ぶ、この古道は県道 70 号（2D 中下、4E 左中）の拡幅工事でほとんどが消えたが、チルガー橋（4E 左上）の上流側に秀一橋（金城秀一（徳門仲、1911 年生）が造った橋）が往時の名残となっている。島田図

068 ウクンドーマ [ウクンドーマ] 史跡名【3C左上】

奥集落から西の集落である宜名真や辺戸、そして宇嘉へつながる唯一の道は山越のけもの道のような小さな道であった。1951 年の旧道（2A 左中、2C 中央、3B 中上）開通まで、海路を使用しての旅が叶わないときは、この山道を通して旅に出たものである。この道はシーパーミチ（3C 左上）と呼ばれ集落の中を流れるハーランクワー（いわゆるアンガーが集落内を流れる部分の愛称、3B 右上）に架かる上之橋の広場で見送りが行われ、最初に部落民に顔をみせる場所が久昌屋（奥 159 番地）上で旧青年文庫の松の下であった。その場所をウクンドーマと呼んでいた。現在は国道 58 号線（3A 中央、3C 中下）沿いの奥共同店前にあるバス乗場に代わったため、忘れ去られた場所である。島田図

069 ウシクブ [ウシクブ] 一般地名【5C中上】

奥集落から「奥ヤンバルの里」資料館を通り、奥川に架かる「ピドウムイ橋（奥名橋）」を渡り、奥川の東側堤防沿いに新設された農道がある。その農道を約 2.1km 南下するとウブダーガー（5B 右上）下流部に、1980 年頃に設置された巨大な砂防ダムがある。「114 林班、菊連」の南側である。砂防ダムの手前 100m 程の所に奥川の支流であるシバシジガー（4C 左下）が東側から合流する場がある。その川に沿って奥区管理のイノシシ垣（東大垣第 5 区）を越えて山頂に登り付いたと付近の山名（奥山、60 林班南西端）をシバシジ（5C 中上）と呼んでいる。そのシジ（頂）は奥区と楚洲区の字境界線が東西にはしる頂で、東側へ辿ると尾西岳（272m）へと繋がる。シバシジの北側でシバシジガー上流域の窪地をウシクブと呼んでいる。名称の詳細は不明。1938 年に楠木とイジュを造林。島田図

070 ウシンチーミサ [ウシンチーミサ] 一般地名【3B中上】

奥集落の西側に辺戸や宜名真集落に通じるシーパーミチ（3C 左上）を登って行くと、1951 年に開通した旧道（2A 左中、2C 中央、3B 中上）に達する。その合流点付近はシーパーヌチジ（頂の坂）と呼ばれている場所で、集落を見下ろす休憩場所でもあった。そこを通り、ターウインパナ（3B 右上）を経て

ウブドー (3A 右上) に向かつて登って行くと堀割された法面に赤土が露出している所をウシンチーミサと呼ぶ。ウシンチーミサは、牛の血のように赤い土に因んだもので、その場所からウブドー付近までの道筋には、茶畑が開かれていたが、過疎化の進行による人口減とともに維持管理が厳しく、茶畑が減反している。島田図

071 ウスミチイノー [ウスミチイノー] 海名【2C中上】

奥集落から西へ行った所にフパダチバマ (2C 左上) がある。「112 林班、世皮原」領域内の海岸で砂浜が長く美しいところである。三角点 (世皮原、6.4m、2C 左中) が設置されている付近は田圃であったが整地され駐車場となっている。かつてはメーバマ (現奥港、2C 中下) から辺戸区の宇座浜へ通じる戦前の県道 (戦前の県道跡、1B 中右参照) が通っていた所である。三角点から砂浜に降りると波打ち際に地層面を垂直に立てた大きなクルイシ (黒色の千枚石) が聳え立っているのがフパダチヌター (2C 中上) である。そこから東側の崎と沖側に離れたクルイシの大岩があり、その大岩と手前にある礁池のことをウスミチイノーと呼ぶ。潮の流れが北東側の礁嶺からユッピーノー (1B 右下) まで潮の干満に関係なく、同じ方向に流れることが由来に因むと推察する。イノー内には、ハマサンゴが干潮時の水位以上は成長を停止し、周りを年輪状に外側に成長するために造られたマイクロアトール化した半球状のハマサンゴが多く、そこを棲息場とするクサビ (ペラ) 等の小魚が多く生息しているイノーである。イノー公売。島田図

072 ウチジナー [ウチジナー] 一般地名【6B中央】

奥集落から奥川沿いに造られた奥与那林道 (旧ウイバル林道、4B 右中) を約 4km 南下したところに奥川の支流であるマチアラシガー (6B 右上) に架かる五号橋 (6C 右上) がある。そこを南に約 200m 行った所に木炭集積所があった。その手前からマチアラシガー (6B 右上) に降り、遡上した上流域がウチジナーと呼ばれる所である。マチアラシガー (6B 右上) は奥の山名「奥山、県 57 林班」と「県 58 林班」の境界となり、南西側に聳える西銘岳 (420.1m) の東山麓を水源域としている。旧 9 林班。1929 年に杉、イジュ、楠木造林。現在、アカギの大木と石積みされた川垣が残っている。島田図

073 ウチジナーシミ [ウチジナーシミ] 一般地名【6B左中】

奥集落から奥川沿いに造られた奥与那林道 (旧ウイバル林道、4B 右中) を約 4km 南下したところに奥川の支流であるマチアラシガー (6B 右上) に架かる五号橋 (6C 右上) がある。マチアラシガーは奥の山名「奥山、県 57 林班」と「県 58 林班」の境界線となり、南西側に聳える西銘岳 (420.1m、6A 右下) の東山麓を水源域としている。ウチジナーシミはウチジナー (6B 中央) の上流域の隅が由来である。西銘岳の北東尾根を通る奥と辺野喜の領域の東側にある窪地である。宮城親良 (1886 年生) が樟脳を製造していたと伝えられる。また楠木が造林されていたとも伝承されているが未確認。島田図

074 ウチバルカイクン [ウチバルカイクン] 一般地名【4B中下】

奥集落から奥川沿いに造られた奥与那林道 (旧ウイバル林道、4B 右中) を約 2.3km 南下したところに「113 林班、仲田原」がある。「仲田原」の山頂付近を南北に延に構築された奥区が管理したイノシシ垣「西大垣第四区」の西側の山中に拓かれたのがウチバルカイクンである。山名は「奥山、56 林班」で、その領域の東半分がウチバル開墾領域である。戦後、宮城親三 (1913 年生) と仲嶺真二 (1914 年生) の 2 所帯が入植して開墾を拓いた。名の由来は不明である。ウチバルカイクン域は一号橋川の源流域をなしている。宮城親三の長女・安子 (1949 年生) は「山あり、川あり、田あり、畑ありの田園風景は今でも鮮明に覚えている」と、当時を懐かしんでいた。その田園風景は、放置され森に戻り、今では見るができない。島田図

075 ウチンヒチガー [ウチンヒチガー] 川名【6C右上】

奥集落から奥与那林道 (旧ウイバル林道、4B 右中) を約 4km 南下した五号橋 (6C 右上) 手前に、ウイバル林道の第 1 期工事の終点ヒヤギマタ (6C 左上) がある。三角点 (奥川、116.1m、6C 左上) が設

置される付近である。そこに東側から注ぐ奥川の支流がウチンヒチガーである。奥の山名「奥山、59 林班」と楚洲の領域「伊江原、現 53 林班、いわゆるコンヌヤマ（5C 右中）」との境界線沿いに東側の三角点（ゆうぐしく、292.6m）付近を源流としている。奥川との合流点であるヒヤギマタの河川敷には金城秀一（徳門仲、1911 年生）が植栽したといわれるユーカリの巨木が 1 本ある。1957 年小学校 3 年生の遠足は、五号橋（6C 右上）までワイバル林道探索であった。ヒヤギマタで初めて見た細長く聳え、穂先をなびかせている 2 本の木を見た、先生に聞くとユーカリという名でオーストラリアから持ってきた木で、ヨットのマストにすると説明され、感動した記憶がある。しかし、老木とり 1 本残った巨木は往時の少年の想像力を湧き立てない姿となっているが、キジムナー（沖縄の木の精、マジムン）でも住んでいそうな新たな畏敬を感じさせる。ウチンヒチの地名との関係は詳細不明である。

2011 年 3 月 27 日、奥・楚洲字境界となっているウチンヒチガーを遡上し三角点（ゆうぐしく、292.7m、6D 左中）の西を通るイーⅡ号林道まで踏査する機会があった。途中で炭焼き窯より小さな窯跡があり、煙突が筒状になっているのを確認したことがある。アハズミ（シャリンバイやヤマモモから製造し染料）を製造する窯跡ではないかと推察されるが、その付近でのエキス製造の伝承はなく詳細不明。島田図

076 ウッカー [ウッカー] 川名【3C中央】

現在の奥集落入口にある「奥駐在所」と国道 58 号線（3A 中央、3C 中下）を挟んで「奥ヤンバルの里」の間に奥川が流れていた。その付近をウッカー（大川）と呼び、洗濯や食べ物を洗う場であり、水浴びの場であった。また東側の田畑へ行き来する生活の場でもあった。そして、ピドゥムイ（3C 中央）のウエーク（堰、せき）からミーダー（3C 中上）への灌漑用水路としてのピー（樋）が架かる場所がウッカーであった。また、その用水路が部落内を通るところをナガミジバイと呼んでいた。ウッカーのイブ（砂州）では、田植えを済ませた後に、豊作を祈願するターンヨー（雨乞）の神事がおこなわれ、大人たちは酒を酌み代わる場となっていた。1969 年 10 月の大水害で奥川沿いの田園地帯が土砂で覆われる被災後、奥川大河川改修工事が 1999 年から 2 期 12 年に及ぶ施行され、緩やかに流れた往時の奥川は姿を消し、深く掘り下げられたコンクリートの護岸が出来、ウッカーのイブも姿を消した。また、田圃が無くなったことでターンヨーの行事も消えた。島田図

077 ウッカーピー伐り出し所 [ウッカー'ピー] 史跡名【6B右中】

奥集落から奥与那林道（旧ワイバル林道、4B 右中）を 4km ほど南下し木炭集積場跡手前から、奥川の支流であるマチアラシガー（6B 右上）において約 300m 遡上したところに南側からマチアラシガー（6B 右上）に注ぐ小さな沢がある。その付近をナガエーバテー（6B 右中）と称される。その沢を約 80m 登った左側に炭焼部隊（畑中隊）が戦時中に木炭を焼いた畑中隊の炭窯跡（6B 右中）がある。その窯跡の 50m 程の斜面に大きな松の切株が残っている。その切株が 1995 年に切り倒された松である。あまりにも長いので必要部分のみを運びだし、残りはそのまま放置され朽ちかけていた。

この松を切り出したことには大きな理由があった。去る大戦で奥の住民は 3 月 23 日の空襲で初めての犠牲者を出したことから山中への避難が始まり、8 月 3 日の投降までの約 4 カ月の厳しい避難生活をし、投降した 8 月 3 日は前日からの台風による大雨で奥川は氾濫寸前であった。東側の山から投降した住民は足止めを食わされているところ、ウッカーヌピー（奥川の樋）から渡ることが決まり、米軍兵士の支援を受け全員が部落に到着した直後にウッカーヌピーは流出した。奥の住民はウッカーヌピーのおかげで命が救われたと感謝の念を抱いている。降伏した住民は辺土名などの収容所に収容され、10 月 5 日に部落に帰還した。そして、戦後 50 年を記念する祝いが 1995 年 10 月 5 日に実施されることになり、ウッカーヌピーを再現して、悲惨な戦争について後世に語り継ぐ記念物として残すことになり、現在「奥ヤンバルの里・民具資料館」に保存・展示されている。ウッカー（大川）に架けられたピー（樋）のことである。島田図

078 ウトゥミジ [ウトゥミジ] 海名【2E左下】

奥集落の北東領域にある「115 林班、加世原」の東側海岸で陸側に大きく湾曲した海岸に、フーンクブ(2D 右下)から海岸に注ぐ小川がある。小川から水が落ちる付近の海岸地名をウトウミジと呼んでいる。島田図

079 ウトウミジグチ [ウトウミジグチ] 海名【2E左下】

奥集落の北東領域にある「115 林班、加世原」の東側海岸で陸側に大きく湾曲した海岸に、フーンクブ(2D 右下)から海岸に注ぐ小川がある。小川から水が落ちる付近の海岸地名をウトウミジと呼んでいる。ウトウミジ(2E 左下)海岸の裾礁が沖側に開けている所、いわゆるウトミチ海岸にある津口のことである。親徳図、島田図

080 ウトウミジグムイ [ウトウミジグムイ] 海名【2E左下】

奥集落の北東領域にある「115 林班、加世原」の東側海岸で陸側に大きく湾曲した海岸に、フーンクブ(2D 右下)から海岸に注ぐ小川がある。小川から水が落ちる付近の海岸地名をウトウミジと呼んでいる。ウトウミジ(2E 左下)海岸の礁池で深く落ち込んだところをウトミチグムイと称する。親徳図、島田図

081 ウドンエーバテー [ウドンエーバテー] 一般地名【4A中下】

国道 58 号線(3A 中央、3C 中下)を辺戸方向へ約 2.3km いくと、国道 58 号線から琉大「奥の山荘」への入口(3A 右下)がある。その南側にトーヤマ(4A 中央)開墾に繋がる小道がある。山名「奥山、村 56 林班」の西側で宜名真領域の「49 林班」「50 林班」の境界線の東を北に流れるチヌプクガー(4B 右上)の支流のナンガー(4A 中央)がある。トーヤマ開墾入口から約 500m 行くとナンガーの支流に到達する。その支流は落差の小さい流れをなして上流へ約 700m 遡上した一帯が、ウドンエーバテーと呼ばれている開墾跡で、エー(リュウキュウアイ)を栽培したといわれている。この一帯ではリュウキュウアイを確認する事が出来なかったが、その西側にあるクランメーエーバテー(4A 中上)では、植栽痕跡としてリュウキュウアイが確認できた。島田図

082 ウナガヌパッパーエーバテー [ウナガヌパッパーエーバテー] 一般地名【3B中央】

奥集落から国道 58 号線(3A 中央、3C 中下)を辺戸に向約 1.5km 付近、三角点(桑又原、96.3m、4B 中上)の手前約 140m 付近の谷にチヌプクガー(4B 右上)の支流が北側から流れている。「113 林班、桑又原」の西寄りの所である。その小川を 300m 程遡上したところがアダギ(3B 中下)と呼ばれているところで、そこから 450m 程さらに遡上したところ付近がウナガヌパッパーエーバテーである。翁長の婆さんがエー(リュウキュウアイ)を栽培していた藍畑に因む地名である。途中のアダギには戦時中翁長の避難小屋があった。島田図

083 ウナンダハナグ(錨固定場所) [ウナンダハナグ] 史跡名【2C右中】

奥では錨のことをハナグと呼ぶ。奥湾の津口近くの浅瀬(大潮のときには完全に干上る)に、大きな錨がコンクリートで固められていた場所に因む名称である。陸路のない海上交通が行われていた頃、奥港は北の奄美群島の与論島や沖永良部などの島々や沖縄島南部からの船着き場として、賑わい知られていた。しかし、北に向けた港であることから冬場に北東の季節風、夏場に台風の影響を受け、船を係留するのに難渋していた。

1875 年に、国頭間切(現在の国頭村)の地頭代(現在の村長)に 52 歳で就任した奥出身の宮城親良(川以前の地頭代ウンメー)は、その打開策として「宜名真に遭難したウナンダ船のウパハナグ(大錨)がある。このハナグを奥の港に持って来たら宝になる」と話した。奥集落の有志で相談した結果、上仲門のウンメー(栄盛)を責任者として、クリ舟 8 隻を 2 本の丸太で組み合わせて宜名真沖に出かけた。上新屋小のオジーが海底にもぐり錨を確認しロープをかけ引き揚げ、奥港に運び移設したとのことである。上新屋小のオジーは、その時の後遺症で聴力を失ったと言われている。

このウナンダハナグを設置してから船の係留が楽になり、奥では大変重宝がられていたが、1932 年頃

錨の留金が悪くなったので、東六ツ又の鍛冶屋に修理を頼んだ。鋳物のため修理ができないとのことで、錨の向きをかえ留金から胴体をコンクリートで固めて津口近くの浅瀬に固定したのである。

奥共同店が創設されたのは1906年で、宜名真でのオランダ船の遭難事故から34年後である。陸路のない海上交通の時代に奥区が発展したのは共同店のおかげであるが、このウナンダハナグが大きな役割を果たしたと言っても過言でない。

1951年に旧道(辺戸奥線、2A左中、2C中央、3B中上)が開通し、海上交通から陸上交通へと時代は替わっても、ウナンダハナグは奥湾に放置されていた。1980年頃、奥港の築港工事に支障を来すことから引き揚げられ、現在の前浜入口に移設保存されているのである。

宜名真沖で台風に遭遇し沈没したオランダ船とは、イギリス商船ベナレス号(822ト、ジェームス・アUNDERSON船長、乗組員18人)で、香港からサンフランシスコへ向かう途中で台風に遭遇し、1872年10月8日に、宜名真沖で破壊沈没した機帆船である。5人生還し、9人行方不明、4人死亡、宜名真集落南側の墓地には「オランダ墓」(国頭村指定文化財)が建立され、死亡した4人は丁重に葬られている。
島田図

084 ウニシンクワー [ウニシンクワー] 山名【4D左下】

三角点(尾西岳、272.0m、4D左下)の南西側約300m点にある円錐型をした小さな頂がある。「小さな尾西岳」をイメージしてウニシンクワーと呼ばれている。奥領域「奥山、60林班」を北側に、南側に楚洲領域の「伊江原、県53林班」いわゆるユンヌヤマ(5C右中)の境界となる稜線の東端付近にウニシンクワーは位置している。付近は松が造林され、現在でも真直ぐに成長した松の大木が多い所。尾西岳との間の窪地の開墾跡には奥領域内で一番大きなカシギ(オキナワウラジロガン)の樹が聳えている。島田図

085 ウニシ林道 [ウニシリンドー] 史跡名【4D左中】

奥集落から県道70号(2D中下、4E左中)を東に約1.7km行くとスイヌチジ(スイ林道と県道70号の合流点、3D中央)に達する。楚洲領域の山名「楚意原、県52林班」の北端に位置する。ここは奥II号林道(旧スイ林道)の起点となっている。その起点から林道を南に約2.2km行くと三角点(尾西岳、272.0m、4D左下)の麓に達する。そこから西側にあるのがウニシ林道で、舗装されてない林道である。総延長は約960mであるが約820m行った所に北西方向と南西方向へ分岐する。いずれも140m程で終点となる。尾西林道周辺は1970年頃に皆伐されイジュなどが造林されている。南西方向を行くと終点付近は2012年頃皆伐されイジュと松が造林されている。その皆伐場所から尾根伝いに下ると奥区が管理していた東大垣第五区を横切りクニンパター(4B右上)を通過してハッテン橋(4B右上)付近に通じる。島田図

086 ウニガー [ウニガー] 川名【7B右下】

奥領域の南端、辺野喜領域との境界にスシマタグチ(7C中央)がある。その南西側の辺野喜領域で辺野喜ダム(伊集湖)に注ぐ辺野喜川の水源の支流を大川と呼ぶが、その上流域をウニガーと呼んでいる。その地域は、木炭や材木などの林産物を搬出したり、開墾しエー(リュウキュウアイ)栽培した生活痕として、水田、藍壺、炭焼窯、住居跡など多くの遺構がある。島田図

087 ウフグシクガー [ウフグシクガー] 川名【6C左中】

奥与那林道(旧ウイバル林道、6C中下、7C中下)を約4.2km南下した付近に五号橋(6C右上)がある。その下流で奥川の本流は二つに分枝する。五号橋(6C右上)から合流する支流がマチアラシガー(6B右上)で、本流となるのがウフグシクガーである。いずれも三角点(西銘岳、420.1m、6A右下)の東流域から三角点(ゆうぐしく、292.6m、6D左中)の南西域にまたがる広大な領域を源流としている。ウフグシクガーは東からナグンペーガー(6C中央)、ビルガー(7C中上)、トゥージンガマガー(6C左下)、ヤナマタガー(6C左下)、シナシジリガー(6B右中)と5つの支流と繋がっている。付近にはウフグシクと銘打つ場所

はないので、地名の由来は詳細不明である。しかし、山名「奥山、59 林班」仲程にウフグシクシジ (6C 中下) とする尾根名が奥与那林道 (7C 中上、7C 中下) とイーⅡ号林道と合流する北側の尾根に残ることから、それなりの言い伝えがあることと推察される。島田図

088 ウフグシクシジ [ウフグシクシジ] 山名【6C中下】

山名「奥山、59 林班」仲程にウフグシクシジとする尾根名が奥与那林道 (7C 中上、7C 中下) とイーⅡ号林道と合流する北側の尾根に残る。名称の由来は詳細不明である。旧 11、12 林班を流れるウフグシクガー (6C 左中) の支流であるナグンペーガー (6C 中央) とビルガー (7C 中上) の合流点から南東に延びる尾根の最高部がウフグシクシジである。1919 年～1928 年にかけて、この一帯の窪地に杉、楠木、センダンを大量に造林したとの記録が奥区の造林台帳に残る。島田図

089 ウプクジリ [ウプクジリ] 山名【6B中下】

奥集落から奥与那林道 (7C 中上、7C 中下) を約 4.8km 地点にウイバル林道終点 (戦前、6C 左中) がある。そこに奥川の支流であるシナシジリガー (6B 右中) が合流する。山名「奥山、58 林班」の中央部を南西側から流れる川である。このシナシジリガーの中流域にあるのがシナシジリ (6B 右下) であり、その上流域がウプクジリと呼ばれる地名である。そのウプクジリ付近に旧 10 林班がり、1928 年に昭和天皇即位記念造林として、クインチャー (広葉杉)、シンダン (センダン)、シギ (杉) を造林したとの記録がある。その造林状況を確認するため 2015 年 11 月 22 日、齋藤和彦、親川栄は、イーⅡ号林道 (7B 中央、7A 左中) からシジ (尾根から) 伝いにシナシジリガーに降り、現場を探索した際、二人は奥領域内では初めてサントー (藍壺) を確認し、またエー (リュウキュウアイ) の自生についても確認した。また、親川栄、座安賢一、滝澤玲子、宮城邦昌等は 2016 年 3 月 20 日にシナシジリガー沿いの古道伝いに川に降り、ウプクジリとウプクジリシミの分岐点東側に 2m 程の石垣が積まれ、その上に大きなサントー (藍壺) があり、その東側の窪地にはエーが自生しているのも確認した。また、西側の岸には炭焼き窯跡を確認する。名称からして土砂災害に因む名称と推測するが、地質や地形的な状況から名に因む根拠は未確認である。親徳図、島田図

090 ウプクジリシミ [ウプクジリシミ] 山名【7B中上】

奥集落から奥与那林道 (7C 中上、7C 中下) を約 4.8km 地点にウイバル林道終点 (戦前、6C 左中) がある。そこに奥川の支流であるシナシジリガー (6B 右中) が合流する。山名「奥山、58 林班」の中央部を南西側から流れる川である。このシナシジリガーの中流域にあるのがシナシジリ (6B 右下) であり、その上流域がウプクジリと呼ばれる地名である。さらに上流域に位置するのがウプクヂリシミである。名称からして生活痕跡があると推察されるが、その由来にまつわる伝承等は不明である。親徳図、島田図

091 ウフクビー [ウフクビー] 山名【6B中上】

奥集落から奥与那林道 (旧ウイバル林道、3D 右下) を約 3.2km 南下した付近に三号橋 (5B 右中) がある。それを越えた所から始まるウマンナガニ (5B 右中) と呼ばれる尾根がある。三号橋に注ぐ川の東岸沿いに南に延びる尾根である。山名「奥山、57 林班」のほぼ中央部を南北に延びる尾根で、幅の狭い尾根であることからウマンナガニ (馬の背) に因む。尾根には古道があり、約 700m 登った所で四号橋 (5C 左下) 方面から西に登ってきた尾根と合流する。その付近をウフクビーと呼ぶ。そこは尾根幅が広がっている事から「大きな首」が名に因むと推察する。尾根は 200m 程南下した所で西に向きを変え、400m 程行った所でチヌブク林道 (4A 中下、6A 中央) に繋がる。ウフクビーの北西側は三号橋川の源流域でガアミチヤバル (5B 中下) と呼ぶ開墾跡があり、尾根の南側はマチアラシガー (6B 右上) 中流域の北斜面で南に開けた窪地となりガーミチシチ (6B 中上) と呼ばれる造林仕立の痕跡もあるが詳細不明である。島田図

092 ウプザファン [ウプザファン] 一般地名【5C中下】

奥集落から奥与那林道 (旧ウイバル林道、4B 右中) を約 3.7km 南下したところにアッシマタ (5C 左

下)がある。奥川の東側は楚洲領域の山名「伊江原、県 53 林班」、いわゆるユンヌヤマ (5C 右中) である。南から流れてきた奥川がクランク状に東に向きを変え、また北に向きをかえる付け根付近から東斜面がウフザフンと呼ばれる所である。その付近にウフザフン (ヘッカニガキの大木) があったことに地名の由来となっている。1934 年頃、国頭村伊地出身の新里親喜がテーチ (シャリンバイ) やヤマモモなどの皮のエキスを薬用として製造したとの言い伝えがある。名に因むザフン (ヘッカニガキ) は未確認である。島田図

093 ウプシギ [ウプシギ] 一般地名【6C左下】

奥集落から奥与那林道 (旧ウイバル林道、4B 右中) を約 5.2km 南下したところで奥川の上流ウフグシクガー (6C 左中) の支流トゥージンガマガー (6C 左下) を横切る。この支流は「奥山、58 林班と 59 林班」の境界線を南から北に流れる小川である。三角点 (伊集湖北、337.1m、7C 中央) から北西に下る尾根がチャーフカシクビー (7C 左上) で尾根が二つに分かれる尾根に挟まった北側の窪地である。林道に架かった暗渠を約 100m 遡上したところに直径 1 m 程のウプシギ (大杉) がある。頂上は折れているが真直ぐに伸びた大杉である。奥領域で確認された杉で一番大きいものとされている。島田図

094 ウプダーガー [ウプダーガー] 川名【5B右上】

奥川は河口から約 2.8km 南下したところで大きく西に向きをかえる。シブギントー (4C 左下) と呼ばれる所である。シブギントーは奥川沿いに開けた田園地帯の南端部で、緩やかに蛇行した奥川の両脇にはアムトゥ (川の堤防) が構成され、ハーダイ (ホウライチク) とデーク (ダンチク) が生い茂り、川に面したアムトゥの裾はそれぞれの植物の根が露出し、アユ、ターイル (フナ)、ミスー (オオグチユゴイ)、イーバー (ヨシノボリやハゼ類)、ウナジ (オオウナギ)、タナガー (エビ)、ガニ (カニ類)、ハーイナ (カワニナ類) の水生動物の棲息場所となっていた。シブギントーからフィジ (5C 左上) を山越した南がわのヒナフシ (5C 左中) の西に落ちる滝までがウプダーガーと呼ばれる所である。何重もの落差とフムイ (深い淵) がある岩場の急流域である。

1957 年小学校 3 年の夏、隣に営林署の詰所があり補佐役として新里仁一 (1935 年生) に伴い、ウプダーガーにウナギ獲りに行ったことがある。シブギントーまでは親戚の田畑があり手伝いに行ったことがあったが、ウプダーガーに行くのは初めてであった。フィジガーとの合流点を過ぎたころから川には大きな石が転がり、流れが速くなっていた。奥区が管理したイノシシ垣である東大垣と西大垣が結合する部分に大きな岩があり滝となり滝壺のうえがイノシシ垣の合流点となっていた。この滝壺には西側から一号橋 (5B 右上) からの小川が注いでいた。この滝壺であるフムイまではほとんどの川魚は遡上し、住みついていた。仁一兄が潜りトダ (鉈) で突き獲らえたオオウナギの味は記憶に残る。

奥川流域の肥沃な田園地帯は 1969 年 10 月の大洪水で土砂に埋まった。1970 年から 1999 年にかけて 2 期 12 年に及ぶ奥川河川改修工事が行われた結果。往時のゆるやかに蛇行したアムトゥは失われ、河川はほぼ直線状に深く掘り下げられ両岸はコンクリートで固められ、往時の田園風景は消え豊富に棲息していた水性生物はほとんどが消えた。このウプダーガーのクムイは河川工事と共に砂防ダムが構築されたため土砂でうまり跡形もなくなっている。また、シブギントーはフィジやカイチ (4C 右下) への山道の起点となっていた。かつてウイバル林道が開通する 1934 年までは、ウプダーガーの上流域からフィジ経由で材木を運び、シブギントーで集積して大雨で増水した奥川に再び流し、河口で引き揚げた山の生活痕が残る場所でもあった。島田図

095 ウプドー [ウプドー] 一般地名【3A右上】

奥集落から西ヘシーバーミチ (3C 左上) を登り 1951 に開通した旧道 (2A 左中、2C 中央、3B 中上) を約 2km 辿ると南方向へ分岐する所に達する。宜名真部落領域と接する領域名「奥山、55 林班」の中央部に位置する標高 200m の台地である。周囲約 3.6km、面積にして 31.6ha と大きな平坦地であることが、ウプドーの名に因む。1950 年 8 月から 1965 年 3 月まで、国頭村立奥中学校はこの地にあった。1965 年 4 月から集落内の奥小学校に再併置されたが、生徒数が少なくなり 2004 年 3 月を持って閉校となった。

1965年8月に中学校跡地は琉球大学に譲渡され、琉球大学「奥の山荘」として現在に至る。

2003年3月の閉校に際し、琉球大学の承諾をえて、同窓生諸氏の計らいで敷地内に「奥中学校跡『開魂一心』の碑(3A右中)」を建立した。島田図

096 ウプナガシ [ウプナガシ] 海名【2E中央】

奥湾の東側「115林班、加世原」の最北東端に位置し、裾礁が発達し干潮時には干あがる礁嶺の縁に南北約100m、幅約30mの背の低い大岩のことをウプナガシという。外洋からの大波が打ちあがるので、いつも波をかぶる岩場である。沖側は急に深くなっているため、天候のいい時は、荒磯釣りポイントとなっているが、往来がきびしいので普通は近づけない釣り場である。島田図

097 ウプヤトウ [ウプヤトウ] 海名【3E左中】

奥湾の東側「115林班、加世原」の東海岸に西側からダヒプガー(3E左中)が注ぐ小さな海岸がある。小川が海岸に注ぎ込む場所は真水の影響を受け裾礁が浸食された窪んでいる。その窪みのある礁池をシンブングムイ(3E左中)と呼んでいる。その東側の礁嶺に大きな穴が落ち込み底の方で沖に繋がる穴がある。その穴のことをウプヤトと称している。イノー公売。島田図

098 ウマンナガニ [ウマンナガニ] 山名【5B右中】

奥集落から奥与那林道(旧ウイバル林道、4B右中)を南に約3.2km付近に三号橋(5B右中)がある。それを越えた所から始まるウマンナガニと呼ばれる尾根道が、三号橋に注ぐ川の東沿いに南に延びる。「奥山、57林班」のほぼ中央部を南北に延びる尾根で、幅の狭い尾根であることからウマンナガニ(馬の背)が尾根の名に因む。南に辿るとウチジナー(6B中央)や西銘岳(420.1m、6A右下)方面への尾根を越える古道であった。登り口にウチバル垣(個人の開墾にめぐらしたイノシシ垣)が残る。ウマンナガニはサツキの自生地であったが1970年代の園芸ブームで盗掘されて激減している。島田図

099 ウマンパロー [ウマンパロー] 一般地名【3C左中】

奥集落から国道58号線(3A中央、3C中下)を150m南下したところで、奥与那林道(旧ウイバル林道、4B右中)が分岐する手前付近、「113林班、辺野原と親田原」が「114林班、多和田」と3つの小字名が境界をなす付近で、「親田原」の西側の斜面をウマンパローと呼び、ウガミンフシ(3C左中)の南側に位置する。湿田とイモ畑で段畑を形成していた。登り口には牛小屋もあった。また登りかけた所には瓦焼き場の跡と伝えられる畑があり、赤瓦の破片が多く散在していた。そこから南に繋がる畑への道の起点となっていたが、国道58号線(3A中央、3C中下)が整備された後は、国道を廻った方が楽であることと、段畑が放置されたため、深い森に覆われ段畑と道は消えた。島田図

100 ウルグチダー [ウルグチダー] 水田名【4B右中】

奥集落から奥与那林道(旧ウイバル林道、4B右中)を南下しハッテン橋(4B右上)から約400mの所に西から注ぐ沢がある。「113林班、仲田原」の北側に位置する。ここはウイバル方面を行き来する人々の美味しい水飲み場となっていた。またウイバル林道からシブギントウ(4C左下)方面の奥川中流域に開いた田圃へ行き来する農道の分岐点となる。水飲み場の対岸は奥川が西に蛇行し東側の斜面のふもとで田圃が開いていた。「114林班、菊連」のほぼ中央部の西側に位置する。その田圃を拓いたのがウルグチ(奥の屋号：卸口)であることからウルグチダーと名に因むが、奥川の大河川改修工事で失われた。1964年頃まで、水飲み場の北側の直線道路の法面には戦時中に掘られた防空壕があり、山仕事や草刈などで付近を通るとき、防空壕に棲んでいたハーブイ(小型コウモリ)を捕えて噛まれた痛い思いがある。その防空壕は奥与那林道(旧ウイバル林道)の改修工事で消えた。親徳図小型

101 ウローラ [ウローラ] 海名【2C左上】

「112 林班、世皮原」にあるフパダチ（2C 左上）の海岸にあるイノー（礁池）の名である。フパダチの礁嶺はほぼ東西に発達しているがその中央部にへこみがあり、その部分をフパダチグチ（フパダチの津口、2C 左上）と呼び、そこから西側に砂浜と礁嶺との間に形成されたナハイノー（フパダチイノー、2C 左上）はユッピーに向けて深くなっている。その礁池内にはエダサンゴやハマサンゴなどの多くのサンゴ類が棲息している。サンゴのことをウローラと呼び、サンゴが多いことが名に因んでいる。ウローラは干潮時に沖からの波は直接入ってこないが、砂浜から湧きでる真水のために真夏でも冷たい。イナ（巻貝）やゲー（二枚貝）、クサビ（ペラ）やイシンバイ（ハタ類）が釣れ、初任者向けの釣り場として馴染まれていたが、南側丘陵地で 1970 年以降に行われた牧場開発で汚染され、40 年余経た現在も生物の戻りにくい環境である。イノー公売。島田図

102 ウンダーマタ [ウンダーマタ] 水田名【3C中下】

奥集落の南側奥川沿いに三角点（親田原、5.8m、3C 中下）が設置されている。「113 林班、親田原」の東端である。その対岸は「114 林班、菊連」の北西に接している。奥川河川改修工事（1970 年～1999 年 2 期 12 年に及ぶ工事）で川は南北に直線状になっているが、かつては右に大きく蛇行し深いフムイ（淵）を形成していた。奥川で最も深いフムイがウンダーマタフムイ（約 3m）である。中学生など高学年生が水浴びをする所であった。そのフムイ近くの東斜面の田畑をウンダーマタと呼んでいた。段畑は標高 100m 付近まで拓かれその上には、奥区が管理したイノシシ垣である東大垣第三区が南北に構築されている。また、ウンダーマタヌシジ（山頂）には戦時中、監視所があり、尾根の東に南北に延びる谷川沿いはナナチグス（3C 右下）と呼ばれ避難小屋跡などの戦争痕跡が多く残る。詳細は不明。親徳図

103 ウンダーマタヌハーンクワー [ウンダーマタヌハーンクワー] 川名【3C中下】

奥集落の南側奥川沿いに三角点（親田原、5.75m、3C 中下）が設置されている。「113 林班、親田原」の東端である。その対岸は「114 林班、菊連」の北西に接している。奥川大河川改修工事（1970 年～1999 年 2 期 12 年に及ぶ工事）で川は南北に直線状になっているが、かつては右に大きく蛇行し深いフムイ（淵）を形成していた。奥川で最も深いフムイ（約 3m）がある。ウンダーマタグムイに東側から奥川に注ぐ小川がウンダーマタンハーンクワーである。西に面した斜面は小川に沿った湿田は棚田を形成していた。その小川の水を奥川にピー（樋）を架け西側のウェンパラ（奥の屋号：親原、宮城昌良（1886 年生が開拓）の田に水を引いていた。島田図

104 ウンニーエーバテー [ウンニーエーバテー] 一般地名【4D左中】

楚洲領域「楚意原、県 50 林班」の尾西岳の東をスイ林道（奥 2 号林道）が南北に通る。尾西岳（272.3m、4D 左下）の北東付近で西に開かれた林道がウニシ林道（未舗装、4D 左中）である。その林道を約 200m 入ったところに北東の谷からチルガー（4E 左上）の支流であるワタヌッキガー（4D 中央）の支流が尾西林道を横切る。その付近の窪地をウンニー（奥の屋号：上根）が藍畑としていたことからウンニーエーバテーと呼ばれている。付近にシギ（杉）が植林されているのは確認しているが、エー（リュウキュウアイ）は未確認である。島田図

105 エイタローヤマ [イエイタローヤマ] 一般地名【3B中下】

奥区から国道 58 号線（3A 中央、3C 中下）を辺戸に向けて約 2km の地点にナンガー橋（4B 左上）が架かる。チヌブクガー（4B 右上）の支流であるナンガー（4A 中央）の支流が北斜面から注ぐ、その上流域の尾根の鞍部周囲約 600m、面積約 1.7ha を拓いた英太郎に因む開墾名である。「奥山」領域内「55 林班」にあり、国道 58 号線（3A 中央、3C 中下）の琉球大学「奥の山荘」への道の途中が入口となっている。戦前、上原英太郎（蔵根小）が開墾しミカンを植えた山。現在もミカン畑として使用されている。島田図

106 エイブンダ [イエイブンダ] 一般地名【3A右下】

奥区から国道 58 号線（3A 中央、3C 中下）を辺戸に進みと、約 2.4km 地点に国道 58 号線から琉大「

奥の山荘」への入口(3A右下)ある。そこから北西側にターマタ(3A中央)と呼ばれる湿田が拓かれていた。現在は国道58号線の拡幅工事で、湿田は消えた。そのターマタ領域の北側の小さなクブ(窪地)に栄文が田を拓いたことに因みエイブンダ(栄文田)いう。親徳図、島田図

107 エーマタ [エーマタ] 山名【5A中央】

チヌプク林道(4A中下、6A中央)の中間点付近ある三角点(奥山南、283.9m、5C中央)を北側約240mに、奥の領域「奥山、56林班」と宇嘉の領域「知意花山、県55林班」の境界が西に横切る。その林班境界を西側約250m地点に、奥・宜名真・宇嘉の字境界が重なり合う点をエーマタと呼ぶ。名の由来は字境界を槍にたとえ三つの槍が一点で結びついている様子に因むといわれている。イノシシ猟につかう槍は幅の広いことから理解できる形態である。1921年に作成された地形図を見ると、この地点を介して宇嘉からエーマタ、ターマタ(3A中央)、ウブドー(3A右上)へと繋がり、ウブドーで奥・辺戸の山道に合流し奥区へ繋がった山道が記されている。沖縄島北部の西海岸道路が整備される前は郵便道と呼ばれ、チダイミチ(5A右上)と繋がる古道であったと伝えられる。島田図

108 奥・宜名真境界線 [-] 史跡名【3A中央】

奥集落から辺戸へ進み国道58号線から琉大「奥の山荘」への入口(本稿168)を過ぎ約3km地点に、奥と宜名真の境界線である。奥領域「奥山、55林班」と宜名真領域「吉皮山、51林班」の境界線を国道58号線(3A中央、3C中下)が横切る所である。この付近はかつてターマタ(3A中央)と呼ばれる湿田で、奥と宜名真の人々が田圃を営んでいた。島田図

109 奥Ⅰ号林道(ウイバル林道) 終点 [-] 史跡名【7C右上】

奥部落領域のほぼ中央部を南北に注ぐ奥川に沿って、戦前にウイバル林道として竣工され、奥川上流域のシナシジリ川の分岐点まで延びていた。1972年の沖縄復帰に伴い更に南に延長されイーⅠ号林道の起点とイーⅡ号林道の終点で合流しているのが奥Ⅰ号林道の終点である。現在は奥Ⅰ号林道は、奥与那林道と改称され、大國林道へと繋がり大宜味村大保まで続く沖縄で一番長い林道を構成している。

110 奥Ⅱ号林道 [-] 史跡名【5D中上】

奥集落の北東側に、奥川に架かるワナー橋(現・奥橋(国道58号線起点、県道70号起点)、3C右上)を起点にスイバルを経由して、県道70号(2D中下)の下に林道痕跡がある。その痕跡を辿るとスイヌチジまで繋がる。県道70号の起点から約1.7km点に位置する。そこはスイヌチジ(頂)と呼ばれていたが、県道工事で拡幅と掘り下げられその面影はない。その時はスイ林道と県道70号の分岐点(3D中央)となっている。そこから林道は奥集落の東脊梁山脈の東側中腹をチルガー(4E左上)の上流ワタヌッキガー(4D中央)まで戦後竣工されたのがスイ林道である。スイ林道は、1972年の本土復帰後にさらに延長され尾西岳(272.3m)の東側を南北に縦断し、ゴエヌヤーカイクン(5D右下)の南尾根で終点となる。名称もスイ林道から奥Ⅱ号林道と改称された。この終点はイー(伊江)集落から辺野喜へ繋がるイーⅠ号林道との合流点となり、そこから伊江、楚洲、奥、辺野喜、宇嘉、チヌプク、与那方面へと繋がっている。楚洲の領域「伊江原、県52林班と県51林班」。島田図

111 奥Ⅱ号林道(旧スイ林道) [-] 史跡名【3D右下】

奥集落から県道70号(2D中下、4E左中)を約1.7kmに位置するスイヌチジ(スイ林道と県道70号の合流点、3D中央)から尾西岳の北東を流れるワタヌッキガー(4D中央)の西付近までを復帰前に開いた林道で旧スイ林道があった。復帰後に延長整備され奥Ⅱ号林道となった。楚洲領域「伊江原、県52林班」の東端を南北に延びる。島田図

112 奥中学校跡「開魂一心」の碑 [-] 史跡名【3A右中】

かつて国頭村立奥中学校は、奥集落から辺戸への山越の旧道（2A 左中、2C 中央、3B 中上）沿いの南側、ウブドー（3A 右上）にあった。旧道の工事が 1948（昭和 23）年に始まり、開通の見通しがついた 1950（昭和 25）年 8 月に開校し、1965 年 3 月までの約 15 年間の歴史を刻んだ。場所は集落から約 2km の奥と宜名真の境界をなす付近、「奥山、55 林班」の領域内に位置する。奥中学校は戦後の人口増による食糧確保のため山地農業研究センター的な学校として開校した。先輩から「毎日が開墾と勉強の日々であった」とうかがう。1960 年初頭は、農業家庭から技術家庭へと社会構造の変化に応じた授業となり、農産物の収穫はしたが開墾や植え付けはしなかった。それでも過疎化が加速し生徒数が激減し 1965 年には奥小学校との併置校となった。奥中学校跡地は 1965 年 8 月に、琉球大学に寄贈され「奥の山荘」としての歴史を綴っている。その後も生徒数が減ったため 2004 年 4 月に辺土名の国頭中学校に統合され、奥中学校は同年 3 月に閉校となった。閉校に際し、同窓生諸氏の計らいと琉球大学の承諾をえて、跡地に建立されたのが「開魂一心」の碑である。島田図

コラム 1948 年に辺戸から奥への山越県道（旧道）着工され、その工事の辺戸と奥の工事分担境界が、字境界でもあるヤマダヘー（2A 右下）であった。この場所の奥区の担当は 3 番組であった。そして、1951 年に全長一里約 4.0km が開通しが、このヤマダヘーの工事の仕上げはブルドーザーが導入され完成した。当時、ウブドーの奥中学校の敷地は狭あいが開墾地と変わらなかったが、ブルドーザーでグラウンド拡張・整備をすることが決まり、奥区の老若男女が弁当を持参しウブドーに総動員し、大きな松の樹を根こそぎ倒して地ならししていくブルドーザーの威力を体験したのである。

113 奥与那林道 [一] 史跡名【6C左下 7C中下】

ウイバル林道は 1972 年の本土復帰後に全線が整備され大國林道（国頭村与那と大宜味村大保を繋ぐ沖縄県内で一番長い林道）へと繋がったことで、奥与那林道と改称された。奥集落から旧ウイバル林道を南に約 5.5km 付近にトゥージンガマガー（6C 左下）の上流の南側にスシマタグチ（7C 中央）がある。奥の南端領域「奥山、59 林班」の中央部で、三角点（伊集湖北、337.0m、7C 中央）南側である。奥与那林道はスシマタグチで、東西に延びるイーⅡ号林道（7B 中央、7A 左中）から分岐し、南に延び大國林道へと繋がる。島田図

114 奥与那林道(旧ウイバル林道) [一] 史跡名【4B右中】

奥集落から奥与那林道（7C 中上、7C 中下）を約 4.8km 南下した所に、ウイバル林道終点（戦前、6C 左中）がある。奥川の上流ウフグシクガー（6C 左中）の支流シナシジリガー（6B 右中）の合流点付近である。ウイバル林道とは 1933 年から始まる 1 期工事と 1937 年の 2 期工事で施工され、1938 年に完成した。戦前に完成した林道をウイバル林道と呼ぶ。1 期工事はハッテン橋（4B 右上）から始まり、一号橋（5B 右上）から五号橋（6C 右上）と五つの橋を架け、一番の難所はガンバ（5B 右中）のクルイシ（黒色の千枚岩）の岩盤掘削工事であったという。また当初計画で五号橋の架設経費が盛り込まれてなく、その捻出に難渋したとかがう。島田図

115 カーミーマタ [カーミーマタ] 川名【5B中上】

奥集落から奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を約 3km 行った所に二号橋（5B 右中）がある。その川の上流域がカーミーマタと呼ばれる所である。「奥山、57 林班」内である。二号橋が架かるハシッタイガー（5B 中上）は滝となっているので、カーミーマタへの道は三角点（仲田原、114.6m、5B 右上）付近からウチバルカイクン（4B 中下）への農道から繋がる。この農道はイズーミチ（5B 左上）にも繋がっている。農道から川に降りた付近をクラガーと呼び、川が二つに分岐するところをカーミー（亀）のマタ（谷）にと称している。分岐点から始まる尾根道はチヌプク林道（4A 中下、6A 中央）や西銘岳（420.1m、6A 右下）へと繋がる。カーミーマタの分岐点には奥区の簡易水道の取水施設が、1983 年に設置されていたが維持管理が困難となり、1996 年に現在のワタンナガームイ（3C 左下）跡にボーリングを行い取水してサジナ（4C 左上）に設置された浄水場にポンプアップされ、奥の簡易水道も国頭村の水道事業として営まれている。島田図

116 ガーミチシチ [ガーミチシチ] 一般地名【6B中上】

「奥山、57林班」の南端に位置し、五号橋(6C 右上)に流れるマチアラシガー(6B 右上)の中流域にあるアカギヤマ(6B 中央)近くでマチアラシガーが分岐するところに川垣がある。その北斜面の窪地に開墾を拓いた屋号に因む名である。この場所はシチ(敷)となっているが畑小屋ではなく、琉球王朝時代の「林政」にもとづく「仕立敷」で、建築や造船に使う有用材を特別に育成する人工造林のことである。また、尾根はウマンナガニ(5B 右中)からチヌブク林道(4A 中下、6A 中央)に繋がる古道があり、尾根の北側窪地にはガーミチャバル(5B 中下)がある。「シチ」と「バル」とも開墾跡未踏査。島田図

117 ガーミチャバル [ガーミチャバル] 一般地名【5B中下】

「奥山、57林班」の南寄りに位置し、三号橋(5B 右中)の東側を南に延びるウマンナガニ(5B 右中)と呼ばれている尾根道は、ウフクビー(6B 中上)を通りチヌブク林道(4A 中下、6A 中央)へと抜ける。そのウフクビーの北西側の三号橋に流れる川の上流付近の窪地に開かれた開墾である。開墾者の屋号が名に因む。開墾跡未踏査。旧9林班。戦前の向上会山(ミカン畑、柴門)。「字奥 造林台帳」によると1930年～1931年にかけて、シギ(杉)、イジュー(イジュ)、クスヌチギ(楠木)、チャーギ(イヌマキ)、マチ(松)などが植林されている。島田図

118 カールメーカイクン [カールメーカイクン] 一般地名【5D左中】

楚洲区領域「楚意原、県53林班、いわゆるユンヌヤマ(5C 右中)」で、奥集落から奥与那林道(7C 中上、7C 中下)を南に約3.7km登った所で、奥川の支流として東側から流れ込むアラマタガー(5C 中央)の上流部に開いたのがカールメーカイクンである。また上流にはゴエヌヤーカイクン(5D 中下)もある。ゴエヌヤーカイクンの南尾根は県50林班、県51林班、県53林班(ユンヌヤマ)と3つの林班境界が交差する地点である。その付近で北から奥Ⅱ号林道(5D 中上)が、東からイーⅠ号林道が合流し南へ延びる合流点(5D 中央)となり南へと延びている。林道の北西側の窪地に拓けた2つの開墾名は、開墾者の屋号に因んだ名称である。開墾地は未踏査。島田図

119 カイチ [カイチ] 一般地名【4C右下】

奥領域「奥山、60林班」で尾西岳(272.3m、4D 左下)の西側の窪地で、奥川の支流であるタチミチガー(4C 左下)の上流域である。旧14林班。1938～1941年にマチ(松)、イジュー(イジュ)、クスヌチギ(楠木)などを造林。戦後、奥区が建造した奥共同店所有の船「おく丸」20トンの造船材は主にカイチの松を使った。現在でもシギ(杉)、イジュー(イジュ)、クインチャ(コウヨウザン)が残る。尾西岳の字境界線付近の開墾跡にはカシギ(オキナワウラジロガシ)の巨木もある。島田図

120 カイチバンタ [カイチバンタ] 一般地名【4C左下】

カイチ(4C 右下)はウイバル林道を約2.0km南下したシブギントー(4C 左下)から奥川を渡り、シバシジガー(4C 左下)を渡ってフィジミチ(5C 右上)から南に登りはじめ途中の段畑から北東に向きを変え、再びシバシジガーを渡り、段畑をつづら折して登り奥区が管理した東大垣第五区、いわゆるハチバー(イノシシ垣)に上った所に、フィグチ(ビービーガチ)を越え開墾や山への道が続いていた。このハチバーの手前に広場があり、材木や薪などを集積し、麓にすべり落とした所がカイチバンタである。カイチバンタは二つあり、薪など傷を付けても心配しないものはアップバンタ(大きな落とし場所)といいタチガミガー(4C 左下)崖淵から滝壺に直接落とすのである。この場所は垂直にして50mの落差の崖で、崖の途中からタチミチガーの流れが吹出す滝で、素晴らしい景観をなしているが、大変危険なバンタであった。

もう一つは、緩やかな傾斜に沿ったバンタで大事な木材に傷を付けずに滑落とす所であった。現在も大きな掘り込みが残る。奥共同店所有の「おく丸」の材料はこのバンタから運ばれた。また、フィグチ(ビービーガチ)と記したのは、集団で牛を伴った材木運搬の時はイノシシ垣の石積を取り除き扉を付けて、そこから行き来したのでビービーハチとしたのである。共同作業などが終了したら再び石垣を積み上げフィグチに戻した。島田図

※フイグチは、丸太を階段状に切り込、イノシシ垣を登り降りする梯子。

※ビービーガチは、人や牛がイノシシ垣を出入りするために、木製の扉を構築してある。扉の開閉時にビービーと音を発したことに因む。

121 かくれい丸救出の堀割 [一] 史跡名【1B右下】

奥区が一番西にあるユッピー海岸のイノー（礁池）に、人工的に掘削した堀割の痕跡がある。台風の大波でユッピーイノー（1B 右下）に打ち上げられた「かくれい丸」を、奥の住民が総動員し救出したことに因む痕跡である。1921年8月、鹿児島、奄美大島諸島航路の「かくれい丸」（約600ト、鉄船）が、大島紬女工及び船客約30人と食糧・日用雑貨を積んで与論島茶花港に着いたが、風波が強く、乗客の下船と荷揚げができず、錨をおろして停泊していたが、風波はますます強まり暴風雨に巻込まれた。船は夜とともに沖へ流され、大波を受け奥のユッピーのピシ（礁嶺）を乗り越えイノーに打ち上げられた。夜明けとともに風波弱まり乗客は全員助かり、ユッピー海岸に上陸した。数日後に救助船「黒潮丸」が到着したが救出できず。奥区の若い男女が干潮時に夜も昼もサンゴ礁に発破をかけ掘削作業を行い、ユッピーグチ（1B 右下）までの長さ約140m幅約10m深さ不明を掘削したところで、満潮時にフパラチバマ（2C 左上）側にあるタチ（クレイシ（黒色の千枚岩）の大岩）、「かくれい丸」から東に約400mの位置にある。このタチにロープをかけウインチで巻き上げて船体がユッピーグチまで移動したのを見計らい、津口沖で待機していた救助船「黒潮丸」が沖に引っ張り無事救出を完了した。この救難救助作業をとおして、掘削工法や道具の扱う技術、他県人との交流、情報を得る等、多くの体験をした。このサルベージ作業は、奥の人々は外に向けての目を開く契機となり、若い娘たちは紡績女工に応募し、盆・正月に金や衣類を送るなど、住民たちの経済を潤しとのことで、この救助事件は奥の夜明けとも言われている。（字誌「奥のあゆみ」P.332-335）

奥区への道がまだない時代の話である。94年余を経た現在でも、「かくれい丸」救出のため掘削された堀割は残り、その痕跡は航空写真でも確認できる。島田図

122 ガジマナ [ガジマナ] 水田名【4C左上】

奥集落から奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を南下し、プシマ（4B・4C 境界上方）の旧チヌブク林道入口を過ぎ右に曲がる辺からハッテン橋（4B 右上）が見える。そこから奥川に向けて荷車が通る大きなアブシ（畦道）があった。奥川を渡り東側のマッカ（4C 左上）やクニンバテ（4B 右上）に繋がる道である。この畔を挟んだ南北に位置するウイバル林道と奥川の Amtou（川の堤防）の間に広がる田圃域がガジマナである。名の由来は不明であるが、チヌブクガー（4B 右上）からピー（樋）などを繋ぎ合わせた用水路を使用し田圃へ水を引いている。1期作のみを稲作にし、2期作は水不足のためタードーシ（田倒）にして芋を植えた。その田圃風景は消えた。親徳図

123 ガジマンクビー [ガジマンクビー] 山名【5D中央】

楚洲領域の「県53林班、いわゆるユンヌヤマ（5C 右中）」と「県51林班」境界が北の三角点（尾西岳、272.1m）と南側の三角点（ゆうぐしく、292.7m、6D 左中）を繋ぐ東脊梁山脈がある。アラマタガー（5C 中央）の最も東側のシジ（頂）付近をガジマンクビーと呼ぶ。尾根の東側には南北に奥Ⅱ号林道（3D 右下）が南北にのびる。その南東側で奥Ⅱ号林道は、北東に延びるイーバル林道（5D 右上）へと分岐し、県道70号（4E 左中）へと繋がる。ガジマンクビーの名については詳細不明。このシジから、南東側に安田ヶ島が見える。島田図

124 ガタ [ガタ] 水田名【2C右下】

奥川河口には、ワナー橋（3C 右上、現奥橋）があった。沖縄の本土復帰後に国道58号線と県道70号が整備され、新規に架けられたのが奥橋である。そして南に向かう国道58号線、東に向かう県道70号の起点となった。奥橋から奥小学校までの間は、古い時代に奥湾の西側から東に発達した砂嘴（さし）は、ソーマジ（砂地、兼久地）となり、奥川河口付近で湿地帯のガタ（瀉）を形成したのである。「その昔、首里島堀村平安名の五世、平安名基信の三男平安名基記は奥にて百姓上原の娘をめとり、定住し、奥での

初代を築く。二代平安名基善の長男三代基基は、士族を返上し、百姓として金城姓を称し、屋号を「上ノ根」と命名した。金城基基が干拓した水田と湿地一帯をガタと呼んでいた。」(字誌「奥のあゆみ」338-340頁)

1964年頃まで、一部田圃を拓いていたが干満の影響を受ける領域はビー(イグサ)が栽培され、河口付近はマングローブが群生し、トーンヤンメーガニ(オキナワアナジャコ)、ガザミ(ノコギリガザミ)、スッタ(トビハゼ類)などが棲息していた。1969年10月の大水害による土砂災害後、1970年から始まった奥川の大改修工事のため往時の面影は消えた。現在の民宿「海山木」付近。島田図

125 ガッコーリン [ガッコーリン] 山名【5C左中】

奥集落から奥与那林道(旧ウイバル林道、4B右下)を南下し、奥川の中流域である難所ウプダーガー(5B右上)に注ぐ三号橋(5B右中)、ガンバ(5B右中)を過ぎヒナフシ(5C左中)に達する。ヒナフシはかつて奥川の上流域からの林産物を集積し、ウプダーガーの難所を迂回してフィジ(5C左上)を越えて北側の奥川中流に運ぶ起点となっていた。その林産物集積場から南に奥川を遡上すると西側に奥山「57林班」の北東端に達する。その付近は奥川が楚洲区領域との字境界ともなる「伊江原、県53林班、ユンヌヤマ(5C右中)」の西端との境界となっている。戦前学校が造林するなど管理する山であったことからガッコーリン(学校林)と呼ばれている。山作業中の生徒がパブ(ハブ)咬傷に遭遇した時、ユダイムシ(ナメクジ)で毒抜き処置をし、一命をとりとめたとの伝承もある。現在は民間に払い下げられミカン畑となっている。島田図

126 カマッチヤークブ [カマッチヤークブ] 山名【2D右中】

奥区の領域で、奥港の北東側にある「115林班、加世原」の北側に注ぐ小さな沢がある。1970年頃に開かれた養豚牧場の東の谷である。上流部(南)にイドーヤンクヌタークブ(2D右下)があり、中流域に位置するのがカマッチヤークブで、イシンミーヌイノー(2D右中)に注ぐ。島袋吉次郎(1876年生、渾名:カマッチヤーク)が湿田を開拓中に草木を焼き払う祭に火災に巻き込まれ死亡したことに因み、カマッチヤークブと伝承されている。島田図

127 カマムラヤマ [カマムラヤマ] 山名【6C左上】

奥与那林道(旧ウイバル林道、4B右中)の一部であるウイバル林道は、第1期工事を1933~1934年まで施工され、その終点はヒヤギマタ(6C左上)である。五号橋(6C左上)の東側にある三角点(奥川、116.1m、6C左上)の東側窪地。そこは奥川の支流ウチンヒチガー(6C右上)が東から合流する場所で、北側は楚洲区領域との字境界ともなる「伊江原、県53林班、ユンヌヤマ(5C右中)」で、南側は「奥山、59林班」と境界をなしている。三角点「奥川」の東の窪地をカマムラという人が開拓した。三角点「奥川」のあるシジ(頂)を、開拓者の名に因みカマムラヤマと呼ぶ。現在もミカン畑が営まれている。島田図

128 火薬貯蔵庫跡 [一] 史跡名【1B左上】

1930年、井野次郎知事による沖縄振興15ヶ年年計画案に辺土名と奥との間の県道工事が織り込まれ、1937年頃から西隣集落・辺戸区の宇座浜を経て海岸沿いに奥までの工事が始まった。辺戸領域「吉波原、111林班」いわゆるユツパバマ(1B左上)付近の県道工事を請け負ったのが奥出身の上原直帯(1888年生)で、自分の畑に工事用の火薬を保管する貯蔵庫を建てた。今でも直帯が架けた暗渠が完全な状態で残り、火薬貯蔵庫も扉は落ちたものの原形を維持している。この県道工事にかかわる火薬蔵庫は、奥集落のソーマジ(2C右下)にもあったが、沖縄の本土復帰(1972年前後の砂採集で火薬貯蔵庫は撤去された。また砂採集は、奥のハニク(砂地)とともに奥第三貝塚も失われた。文化財指定がなされなかった事から残念である。ユツパの火薬貯蔵庫跡は2013年と2014年に確認した。島田図

129 ガンバ [ガンバ] 史跡名【5B右中】

奥川沿いに南に延びる旧ウイバル林道(4B右下)は、1933年にハッテン橋(4B右上)からヒヤギマタ(6C

左上)までの約 2.7km の 1 期工事が行われた。しかし、ハッテン橋から三号橋(5B 右中)をこえた約 1.8km 付近には大難所があった。クルイシ(黒色の千枚岩)の相が幾重にも重なる岩場のことをガンバという。ウプダーガー(5B 右上)の急流が北側を流れる崖淵の危険な場所であった。林道工事中に、宮城悦生(東り六ツ又、1934 年生)の祖父である宮城親松は鍛冶屋を営んでいた。岩を剥離したり、ダイナマイトを仕掛ける穴を掘るタガニ(タガネ)やハニガラ(金棒)に焼をいれても、すぐになまってしまうので大変難儀したとの伝承がある。

沖縄の本土復帰(1972 年)後の奥 I 号林道の改修まで、ガンバは勾配 1.5m 程の斜面にクルイシの岩盤が露出し、荷車を曳いて上り下りに難渋した。また蹄鉄を打ち付けられた馬が荷馬車を曳いて上り下りするとき蹄鉄が滑り馬泣かせの場所がガンバであった。足を踏み外したらウプダーガーの滝壺におちるので、大変危険な場所であったが、その後「奥与那林道(4B 右下、6C 中下、7C 中下)」として再整備され、往時のガンバの面影はない。島田図

130 カンプースーグワー [カンプースーグワー] 史跡名【2C中央】

奥港の北西側に、シドゥンサチ(2C 中上)の麓を起点に長い防波堤が整備されている。その麓に戦前無縁仏の遺骨があったと伝承されていた。カンプー(琉球王府時代の男性の髪方、結髪)をした爺さんに因む地名である。1960 年頃には見かけられなかった。島田図

131 ギヤマ林道 [ギヤマリンドー] 史跡名【5A中下】

チヌプク林道(4A 中下、6A 中央)の中間付近に位置し、三角点(奥山南、283.9m、5A 中央)の南側でチヌプク林道から西側に分岐したのがギヤマ林道(宜名真林道)である。宜名真ダムの南側を通り、宜名真集落の南に位置するブミ(武見)に繋がっている林道名である。島田図

132 旧チヌプク橋 [チヌプクバシ] 史跡名【4B左上】

旧チヌプク林道の 1 期工事は、1940 年から始まった。奥与那林道(旧ウイバル林道、4B 右中)のハッテン橋(4B 右上)手前、ガジマナ(4C 左上)が起点となっている。旧チヌプク林道は国道 58 号線(3A 中央、3C 中下)の下を通っていることからそのほとんどは 1960 年初期の琉球政府道 1 号線工事による土砂で失われている。しかし、沖縄の本土復帰(1972 年)後に、整備された国道 58 号線沿いの三角点(桑又原、96.3m、4B 中上)から約 100 先にチヌプク橋(4B 中上)架かる。そこから約 900m は旧チヌプク林道の姿を残している。いわゆるシンノブ現場(4B 左上)といわれる区間である。旧チヌプク橋は、チヌプクガー(4B 右上)の支流であるナンガー(4A 中央)に架かっている橋で、起点から約 1.3km 地点にあった。現在も原形を保っている。島田図

133 旧チヌプク林道 [チヌプクリンドー] 史跡名【4B左中】

旧チヌプク林道の 1 期工事は、1940 年から始まり、戦前と戦後の 2 期に分けて施行されている。戦前のチヌプク林道は旧チヌプク林道終点(戦前、4A 右下)までの約 2.4km で、戦後のチヌプク林道は旧チヌプク林道終点(戦後、5B 左中)までの 900m で全長は約 3.3km であった。奥与那林道(旧ウイバル林道、4B 右中)のハッテン橋(4B 右上)手前、ガジマナ(4C 左上)が起点となっている。旧チヌプク林道は国道 58 号線(3A 中央、3C 中下)の下を通っていたが、1960 年代初期の琉球政府道 1 号線工事による土砂で失われた。しかし、沖縄の本土復帰(1972 年)後に、整備された国道 58 号線沿いの三角点(桑又原、96.4m、4B 中上)から約 100 m 先にチヌプク橋(4B 中上)架かる。そこからハートウイグムイ(4B 左下)までの約 900m は、現チヌプク林道とチヌプクガー(4B 右上)の間に残っている。またハートウイグムイからイズーガップル(5A 右上)までは、現在のチヌプク林道の拡幅工事で失われているが、イズーガップルから旧チヌプク林道終点(戦後、5B 左中)までの約 600m は放置されたまま残されている。島田図

134 旧チヌプク林道終点(戦前) [-] 史跡名【4A右下】

旧チヌプク林道の 1 期工事は、1940 年から始まった。奥与那林道(旧ウイバル林道、4B 右中)のハッ

テン橋 (4B 右上) 手前、ガジマナ (4C 左上) を起点とし、旧チヌブク林道終点 (戦前) までの全長 2.4km の林道であった。旧チヌブク林道は国道 58 号線の下を通っていたために、1960 年代の旧琉球政府道 1 号線の工事に際し土砂崩のため失われている。しかし、国道 58 号線沿いの三角点 (桑又原、96.4m、4B 中上) から約 100 m 先に架かるチヌブク橋 (4B 中上) からハートウイグムイ (4B 左下) までの約 900m は、現チヌブク林道とチヌブクガー (4B 右上) の間は残っている。この区間は工事を請負った中真親信に因みシンノブ現場 (4B 左上) と呼んでいる。またハートウイグムイから終点 (戦前、4A 右下) までの約 500m は、現在チヌブク林道の拡幅工事で失われている。島田図

135 旧チヌブク林道終点(戦後) [-] 史跡名【5B左中】

旧チヌブク林道の 2 期工事は、戦後行われたが年代は不明である。工事範囲は旧チヌブク林道終点 (戦前、4A 右下) から旧チヌブク林道終点 (戦後、5B 左中) までの全長約 3.3km である。旧チヌブク林道終点 (戦前) からチダイミチの南までの一部約 200m は、現在のチヌブク林道として拡幅整備され、そこから南東側に旧チヌブク林道跡が分岐し、そこからイジューガツプル (5A 右上) を通り、チヌブク林道終点 (戦後) までの約 600m は、今でも痕跡を残している。1961 年頃、その林道終点からニシミ (西銘岳) の北西山麓のザトゥンガー (座津武川) 上流付近では金城久栄 (那覇屋、1920 年生) と金城寛 (田ん端、1914 年生) 2 人が木炭を生産し、金城久栄はチヌブク林道終点に設置されていた木炭集積小屋に搬出し、金城寛はザトゥンガーの河口である宇嘉領域の座津武トンネル近くまで運搬していた。金城寛の長女久子 (1946 年生) 等中学三年の女生徒数名が、1962 年 1 月 3 日に西銘岳へ登山し、日が暮れ道に迷い、部落中が大騒ぎとなったこともあった。

チヌブク林道終点付近には、崎原栄重 (崎原小、1930 年生) の炭窯上にカシギ (オキナワウラジロカシ) とガジュマルの大木と伝承されているが、カシギは確認されたが、ガジュマルは枯れ朽果てていた。島田図

136 旧道 [-] 史跡名【2A左中、3C中上、2B中央】

奥集落への陸路は 1942 年に西隣の辺戸集落の宇座浜海岸から奥領域の西海岸ユッピバマ (1B 左上) までの約 3.0km が開通したものの、その後戦時体制に入ったため放置されて失われた。1948 年に辺戸からヤマダヘー (2B 右下)、ウブドー (大堂、3A 右上)、ターウインパナ (3C 右上)、スグラ (2B 左下)、シガイマガイ (2C 中央) などを経由して奥集落までの山越え県道建設が着工され、1951 年に全長一里約 4.0km が開通した。この県道開通により奥集落の海上交通の時代は終わり、陸路による自動車の時代となった。かつて奥中学校は中間点 (約 2.0km) 地点に位置するウブドーにあった。現在は国道 58 号線 (3A 中央、3C 中下) が整備され農道として使用されている。この県道工事による法面掘削では、特徴的な地質から二つのユニークな地名がつけられていた。奥領域のウシンチャーミサ (牛の血のように赤い土、3B 中上) と辺戸領域のオシロイバー (化粧品のオシロイのような白い土) であるが、往時の面影は失われている。島田図

137 クインチャクブ [クインチャー'クブ] 山名【5C右中】

楚洲区の領域である「伊江原、県 53 林班」いわゆるユンヌヤマ (5C 右中) 内にある。奥川の上流域の支流で、東側から合流するアハマタガー (5C 中央) の中流域の窪地にクインチャ (広葉杉) を造林したことに因む地名である。窪地付近ではクインチャは確認されていないが一緒に造林したとされるシギ(杉) は現在でも残っている。またユンヌヤマ領域内では、アハマタガーの川尻に 2 本、アラマタガー (5C 中央) に数本のクインチャが確認されている。島田図

138 クシントーナーカダー [クシントーナーカダー] 水田名【3D中上】

奥湾の東側の奥領域の東に南北に位置する「114 林班、楚意原」の中央部でスイガー (3D 左上) の支流が東側の窪地から注いでいる。その支流は「115 林班、加世原」の南西端に位置している。現在の県道 70 号 (2D 中下、4E 左中) を起点である奥橋から約 1.3km 付近で、奥区が管理したイノシシ垣 (東大

垣) 第一区と交差する所がある。その窪地の上方付近にあるのがクシントナーカダーである。スイヌチジ(スイ林道と県道70号の合流点、3D中央)と呼ばれるシジ(頂)は北側に尾根をなし、ハルー(加世原、3D中上)領域では最高部(約110m)をなしている。その北西側の窪地をクシントウナーカ(奥の屋号:後ん当仲ケ)が田圃を拓いたことに因む。チツチダー(3D左上)の東側、吉本牧場の南側近く。島田図

139 クチ [クチ] 海名【2C右上】

クチは奥湾の津口のことである。奥湾北側で東西のピシ(礁嶺)が幅約130mもの溝状に形成していた。奥川河口のことである。大潮でも完全に干上ることはない。かつては奥川河口側の浅瀬にウナンダハナグ(固定場所、2C右中)があった。ウナンダハナグとは、1872年に、ギヤマ(宜名真)沖に沈んだイギリス商船ベナレス号(822ト)の錨を、1875年奥湾に移動設置したものである。クチの左側には濤があり、そこには船繋ぎ用のブイも設置されていて津口に停泊するヤンバル船を始めとする船舶は、へさきをウナンダハナグに繋ぎ、ともを沖側のブイに繋いで停泊したと伝えられている。島田図

140 クニカチシヤ [クニカチシヤ] 一般地名【2D左下】

奥湾の東側「114林班、楚意原」の農道を墓地の方から北の方に行くとトープクギ(テリハボク)とアダニ(アダン)の防風林があり、左はハニク(兼久、砂地)の畑を通りスイ林道に繋がりが、右側のハニク畑付近をクニカチシヤよんでいた。この付近は奥第四貝塚(1977年に発見)があるところであるが、クニガブクの由来については不明。奥第四貝塚は、沖縄の本土復帰後の1977年頃の砂採掘により確認されたとしている。奥区内における貝塚は、同時期に第二から第四貝塚までの三つが砂採掘で失われた。親徳図

141 クニガブク [クニガブク] 一般地名【2D左下】

奥湾の東側「114林班、楚意原」の農道を墓地の方から北の方に行くとトープクギ(テリハボク)とアダニ(アダン)の防風林があり、左はハニク(兼久、砂地)の畑を通りスイ林道に繋がっている所をクニガブク(2D左下)と呼んでいる。この付近は奥第四貝塚が1977年に発見・確認されたが、すでに貝塚包含層である砂が採掘され発見とともに貝塚は失われた。親徳図

142 クニダフシジ [クニダフシジ] 山名【5B右下】

ウイバル林道(奥与那林道(4B右下、6C中下、7C中下))を南下した四号橋の西側をガンバ(5C右中)から南に延びる尾根の山名である。クニダフシジとウイバル林道間の村有林は1960年初頭に、国頭村役場新築経費捻出のため個人に払い下げられた。スモモやミカン畑として開拓された。クニダフシジの由来については不明。親徳図、島田図

143 クニンバテー [クニンバテー] 水田名【4B右上】

奥川東流域沿いに南北に位置する「114林班、菊連」の中間部で、奥川とチヌフプガー(4B右上)が合流するところでチヌフプガー(4B右上)に架かるハッテン橋(4B右上)の東側がクニンバテーである。かつて奥川がハッテン橋(4B右上)の松下で蛇行する内側が田圃で、斜面の段畑はピヤバル(ネギ畑)とウムバル(イモ畑)となっていた。クニンバテーグムイ(深い淵)のアムトウ(川の堤防、ハーラヒ(ホウライチク)を植栽)には、冷たい伏流水が湧き、真夏のタドーシー(田倒し、一期作の水田の収穫が終わると、干し田に畝を造りウム(イモ)を植えた)作業時の冷たい伏流水は、「命の水」として重宝がられ、周辺のタドーシー作業中の人々の水汲み場となっていた。日本復帰後は、水田はミカン畑に代わり、斜面の段畑は森となり、往時の面影はない。親徳図

144 クニンバテー [クニンバテー] 山名【4C左上】

奥川東流域沿いに南北に位置する「114 林班、菊連」の中間部で、奥川とチヌブクガー（4B 右上）が合流するところでチヌブクガーに架かるハッテン橋（4B 右上）の東側がクニンバターの田園地帯である。東側の丘陵地に開かれた茶畑やミカン畑付近の名称もクニンバターである。茶畑は喪失したがミカン畑は現在ものこる。その北側には、奥区が管理していたイノシシ垣の一部である旧大垣の痕跡が残る。また田園地帯を起点とする尾根は途中、東大垣第五区を横切り、尾西岳（4D 左下、272m）へ繋がる。島田図

145 クランニーグワーエーバテ [クランニーグワーエーバテ] 一般地名【7B右上】

奥領域南端部、「奥山、58 林班」内の奥川の支流であるヤナマタガー（6C 左下）上流域の窪地に拓いた開墾跡に、クランニーグワー（奥の屋号：蔵ん根小）が拓いたエーバテ（藍畑）に因む。南側尾根の頂部はイシブドゥチ（3C 左中）となっている。島田図

146 クランメーエーバテ [クランメーエーバテ] 一般地名【4A中上】

奥集落から国道 58 号線（3A 中央、3C 中下）を約 2.4km 行った所に、国道 58 号線から琉大「奥の山荘」への入口（4A 右上）がある。その南側にトーヤマ（4A 中央）開墾に繋がる農道がある。その農道沿いにチヌブクガー（4B 右上）の支流でナンガー（4A 中央）の支流が注いでいる。その支流は二つに分岐し西側を南から流れてくる沢の中流域がクランメーエーバテである。クランメー（奥の屋号：蔵ん前）が拓いたエーバテ（藍畑）に因む。現在でもエー（リュウキュウアイ）も残る。島田図

147 クルマニッシバー [クルマニッシバー] 山名【4D左中】

楚洲区領域の「伊江原、県 52 林班」内のウニシムイ（尾西岳、272.1m、4D 左下）東側にある奥Ⅱ号林道（5D 中上）から西に分岐するウニシ林道（4D 左中）ある。分岐点から約 200m 行った所の坂道をクルマニッシバーと呼ぶ。ウニシムイから北に延びる尾根を切開いた急な坂であったが、現在はブルドーザーで拡幅整備されたため往時の坂道は消えているが高い法面が両脇に迫っている。島田図

148 クワーギバル [クワーギバル] 山名【4C中央】

奥領域「奥山、60 林班」内、ウニシムイ（尾西岳、272.1m、4D 左下）の北西側の窪地でウニシ林道の終点付近に位置する。奥川の東支流であるワタンナガー（4C 中央）の上流域に位置する。ワタンナガーは奥区が管理したイノシシ垣である東大垣第四区と交差するがその交差点をサールーバンタ（崖場でサルも登れないということに因む、4C 中央）がある。その上流域の窪地にクワーギ（桑）を植林したことに因む。現在、皆伐されイジュなどが造林され、往時の桑の木は確認されていない。島田図

149 クワーギマタ [クワーギマタ] 水田名【4B右上】

奥集落から奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を南下しチヌブクガー（4B 右上）に架かるハッテン橋（4B 右上）がある。チヌブクガーを遡上し砂防ダムが設置されているところがある。その途中にチヌブクガーの支流であるクワーギマタガー（3B 右下）がある。その川の両面に拓けた田圃をクワーギマタと呼んでいる。国道 58 号線（3A 中央、3C 中下）の整備により段畑や田は土砂で覆われ往時の田圃は存在しないが、ミカン畑などとなっている。サトーマー（砂糖屋、4B 右上）の名も残る。親徳図

150 クワーギマタガー [クワーギマタガー] 川名【3B右下】

奥集落から奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を南下しチヌブクガー（4B 右上）に架かるハッテン橋（4B 右上）がある。チヌブクガーを遡上し砂防ラムが設置されている所がある。その途中にあるチヌブクガーの支流が北側から注ぐ、その川の名がクワーギマタガーである。国道 58 号線（3A 中央、3C 中下）にはクワーギマタ橋（3B 右下）が架かっている。島田図

151 クワーギマタ橋 [クワーギマタバシ] 史跡名【3B右下】

奥集落から国道58号線(3A中央、3C中下)を、辺戸集落向けに約1.5km地点にかかる最初の橋が、クワーギマタ橋である。クワーギマタガー(3B右下)に架けられたことが名に因む。島田図

152 クワーバカ [クワーバカ] 史跡名【2D左下】

奥湾東側「114林班、楚意原」の北端で、現在の県道70号(2D中下、4E左中)を約500m東へ行った所にハラミミチ(2D左中)の分岐点がある。その分岐点の下の海岸脇にクワーバカ(童墓)と呼ばれる水子供養の墓があった。現在は存在しない。かつてはスシバマ(奥湾の東の浜、2D左下)に降りる道があった。またこの少し北側は奥区が管理したイノシシ垣痕があり、東大垣第一区の起点となっていた。島田図

153 クワイサクブ [クワイサクブ] 山名【5C中央】

楚洲区領域「伊江原、県53林班、いわゆるユンヌヤマ(5C右中)」で奥川の支流であるアラマタガー(5C中央)が東から注ぐ、アラマタガーを約200m遡上したところに滝がある。その滝に南から注ぐ小川がある。滝から少し遡上した南側の窪地をクワイサクブ(会社窪)と呼んでいるが、詳細は不明。島田図

154 グンダバマ [グンダバマ] 海名【2D中上】

奥湾の東側「115林班、加世原」で一番北側に突き出た岩場をアサチンサチ(2D中上)と呼び、その岩場の東脇にある小さな浜をグンダバマと言う。奥では鯨をグンダと呼び、鯨が打ち上げられた浜と言う事に因む。島田図

155 県道70号(2D中下、4E左中) [-] 史跡名【2D中下、4E左中】

奥領域「115林班、加世原」内での県道70号(2D中下、4E左中)表記点。沖縄島の東海岸沿いの琉球政府道13号線の終点であったが、1972年の日本復帰後に整備され県道70号と改称され奥橋(旧ワナー橋、3C右上)が起点となり東村平良が終点となった。島田図

156 向上会山 [-] 一般地名【3A中央】

区行政を円滑に行うために、その補佐団体として各集落に成人会という実践団体があった。奥では1906年に青年会が結成され、国頭村青年会奥支部として、その役割を果たすが、1920年に成人会は向上会と呼称を変えるとともに、若い人々のみで組織する青年団も向上会に含めた一体組織として、絶えず区行政の補佐的存在として農事奨励や農業技術の改善に努力した。1930年に青年団は向上会から分離独立し修養団体として発足した。1941年、戦争突入と共に向上会の名称は天下り式に壮年団と改名して、総て戦争遂行のための協力団体に変じてしまった。(字誌「奥のあゆみ」73-75頁)

向上会が活躍した頃に開拓した山を向上会山とよび、「奥山、55林班」現在の国道58号線(3A中央、3C中下)の宜名真境界付近にあるターマタ(3A中央)の北側の窪地に位置する。ウプドー(3A右上)に奥中学校があった頃は学校の果樹園としてミカンやビワなどが植えられていた。現在は放置されその存在は消えている。

157 ゴエヌヤーカイクン [ゴエヌヤーカイクン] 一般地名【5D中下】

楚洲の領域「伊江原、県53林班、いわゆるユンヌヤマ(5C右中)」に奥川の支流アラマタガー(5C中央)が東から注ぐ、そのアラマタガーの上流域でスイ林道とイーI号林道の合流点(5D左下)の北側の窪地を、辺土名出身の宇良宗栄が拓いた開墾である。現在でも藍壺が残っていると伝承されるが、未確認。島田図

158 ゴーミチ [ゴーミチ] 山名【6C中央】

奥与那林道(旧ウイバル林道、4B右中)を部落から約4km地点の五号橋(6C右上)の南東に円錐峰が聳えている北麓には三角点(奥川、116.1m、6C左上)があり、「奥山、59林班」の北に位置する。そ

の嶺から南東側につづく尾根が三角点(ゆうぐしく、292.7m、6D 左中)の南西側で交差する。タバクバテ(6C 右中)と呼ばれているところである。このシジミチ(尾根道)は奥川の本流であるウフグシクガー(6C 左中)と支流であるウチンヒチガー(6C 左上)に繋がる尾根でナグンペーシジ(本稿 6C 中央)と呼ばれている。尾根道の間あたりにゴーマチと呼ぶ山道が南に分岐している。尾根には西の方からヒサヌナンタルグチ(6C 中央)、東にウイヌナンタルグチ(6C 中央)とよばれる地名が付いている。ゴーマチの由来については不明。島田図

159 コーレーバテ [「コーレーバテ」] 一般地名【3C左上】

奥集落の西斜面にある段畑で奥から辺戸へ繋がるシーバーミチ(3C 左上)がある。その段畑の中腹付近に昔、コーレー(唐辛子)を植栽したことに畑名が因む。コーレーバテから北に、戦時中にサンペイゴウ(塹壕、本稿 180)が掘られ、奥小学校の上の海岸近くまで続き、コーレーバテは塹壕の起点となっていた。島田図

160 国道58号線 [-] 史跡名【3A中央、3C中下】

1962年に開通した琉球政府道1号線は、1972年の日本復帰に伴い国道58号線として改称され、国頭村奥を起点に那覇市明治橋を終点とする約130kmが整備された。西隣の辺戸集落からチヌブク経由で奥集落に繋がり、ヌガンナー(3C 中央)のカーブを南から廻り込むと、視界が大きく開け、山麓のみどりの中に、2001年に開設された「奥ヤンバルの里」宿泊施設の赤瓦が輝き、奥集落の家々の上に水平線が表れ、遙か彼方と与論島が浮かんでいる。国道58号線のヌガンナーは、奥集落の素晴らしいパノラマを描き見る場所で、故郷回帰を思わせる。島田図

161 国道58号線から琉大「奥の山荘」への入口 [-] 史跡名【3A右下】

奥集落から国道58号線(3A 中央、3C 中下)を辺戸部落へ向かい約2.4km地点付近にある国道58号線のバス停留所であったが、村営バスを運行している現在では、乗客はどこでも手を揚げ乗り降りできるのでバス停留所は消え、琉大「奥の山荘」入口の看板が表示されている。この付近の地名はターマタ(3A 中央)と呼び、かつて宇嘉集落から奥へ繋がる山道は、南からシジンミーシジ(4A 右上)、ターマタ、ウブドー(3A 右上)と北に繋がり、西側にある集落である辺戸・宜名真からの山道とトープマミバル(3B 左上)付近で合流して東側の奥集落へと繋がっていた。島田図

162 国道58号線とチヌブク林道の合流点 [-] 史跡名【4A右上】

奥集落から国道58号線(3A 中央、3C 中下)を辺戸集落へ向かい約2.3km地点付近にある国道58号線とチヌブク林道の合流点。この付近をターマタ(3A 中央)と呼んでいる。近くに琉大「奥の山荘」入口(3A 右下)がある。島田図

163 五号橋(6C右上) [「ゴゴバシ」] 史跡名【6C左上】

奥集落から奥与那林道(旧ウイバル林道、4B 右中)を南下し約4.3kmにある橋の名前。1937年にウイバル林道の2期工事で架設された。奥川の支流であるマチガラシガー(6B 右上)に架かる橋。付近には三角点(奥川、116.1m、6C 左上)がある。マチアラシガーへの降り口付近にミカン畑がある。島田図

164 サールーバンタ [「サールーバンタ」] 一般地名【4C中央】

奥川の東側「114 林班、菊連」の仲程に東から支流ワタンナガー(4C 中上)が注ぐ、ワタンナガーの支流の一つはウニシ(尾西岳、272.1m、4D 左下)の北西側に位置する窪地であるクワギーバル(4B 右上)を源流とする。その支流は標高100m程の地点で奥区が管理したイノシシ垣である東大垣第三区を横切る。その付近は急傾斜となっていることからサールー(猿)も登れない崖という事からサールーバンタの名に因む。現場は小さな滝(約7m)となっていて、滝壺に猪の屍骸があった。島田図

165 サーンケー [サーンケー] 一般地名【4B中上】

奥集落の南側「113 林班、桑又原」と「113 林班、仲田原」の境界を流れるチヌブクガー（4B 右上）の南に面した窪地である。北側に国道 58 号線（3A 中央、3C 中下）沿いの三角点（桑又原、96.4m、4B 中上）がある。1960 年頃まで旧チヌブク林道（現在の三角点下）からチヌブクガー（4B 右上）を渡っていく道があった。チヌブク林道ができる以前は、奥川とチヌブクガー（4B 右上）の合流点でチヌブクガー（4B 右上）に架かるハッテン橋（4B 右上）から南西に開けた段畑を登り、尾根近くを南北に延びるイノシシ垣・西大垣四区を越え、イチリンハナシジ（4B 中央）を横切りサーンケーに行き来した道の痕跡がイノシシ垣に残っている。地名の詳細不明。島田図

166 サジトマー [サジトマー] 一般地名【3B左下】

奥集落から国道 58 号線（3A 中央、3C 中下）を辺戸に向、三角点（桑又原、96.4m、4B 中上）の国道 58 号線の北側の頂にエイタローヤマ（3B 中下）の地名がある。三角点の西側に小川がありナンガー橋（4B 左上）が架かっている。その小川の北側頂とエイタローヤマにかけた頂上付近を切り拓いた開墾地の名前をサジトマーと呼んでいる。現在はドーグチ（奥の屋号：門口）がミカン畑を営んでいる。開墾への道はアップド（3A 右上）から下ってきたが現在は逆に、国道 58 号線から琉大「奥の山荘」（3A 右中）への山道が使用されている。領域的には「奥山、55 林班」の南東側に位置する。島田図

167 サジナ [サジナ] 一般地名【4C左上】

奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を約 900m 南下した所に旧チヌブク林道への分岐点があった。その西の頂をサジナと呼ぶが、名前の由来は不明である。1962 年 1 月に開通した現在の国道 58 号線（3A 中央、3C 中下）を辺戸に向け約 800m の地点の東側に簡易水道の貯水タンクがある付近の総称がサジナである。この貯水タンクは 1983 年に、ウイバル林道に架かる二号橋（5B 右中）に流れるハシッタイガー（5B 中上）の中流域であるカーミーマタ（5B 中上）を取水源とし、自然落差を利用してサジナに建造された貯水タンクまで送水し、奥区の水道として利用された。しかし、カーミーマタでの取水は維持管理が厳しかったため放棄された。変わって、1970～2000 年、2 期 12 年にまたがり、奥川大河川改修工事が施工された。その工事で埋められたワタンナガーグムイ（3C 左下）跡に、1996 年にボーリングされ、取水が始まり、サジナのタンクにポンプアップしている。1973 年に奥区運営の簡易水道は、国頭村営の簡易水道へ移行し現在にいたる。島田図

168 サトーマー [サトーマー] 一般地名【4B右上】

奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を約 1.2km 南下したところに、奥川の支流チヌブクガー（4B 右上）に架かるハッテン橋（4B 右上）がある。そこからチヌブクガー（4B 右上）に沿って行くとクワーギマタ（4B 右上）の田圃がある。国道 58 号線（3A 中央、3C 中下）に架かるクワーギマタ橋（3B 右下）の南下側である。この田圃付近で昔サトウキビが植えられ砂糖屋があり、黒砂糖を生産していたことに因む。ジートイグナ（砂糖を固める石灰調合係り）はミージ（奥の屋号：新地）のウンメー（爺さん：新城春良）であった。島田図

169 サナシジガー [サナシジガー] 川名【1B中下】

奥領域の北西側、「112 林班、世皮原」にあるユッピバマ（1B 右下）の中央に注ぐ小川である。ユッピバマには部落側からタチガミガー（2B 右上）、サナシチガー、インビガー（1B 中下）の三つの川が、ユッピバマの南に丘陵をなすアブントー（2B 中上）付近を主な水源とする。サナシジガーは水源をタチガミ（琉球石灰岩の円錐峰、2B 中上）の北西の窪みになしている。1962 年頃には琉球石灰岩の離水ノッチ（標高約 100 m）沿いにイノシシ垣（西大垣第一区）があり、そのイノシシ垣に横穴洞窟があり水が湧き出していた。現在は土地改良され牧草地となり洞窟からの水は枯れている。小川の長さが短いことから水量が少ない川である。サナシチガーには戦前に施工された辺戸集落の宇座浜から奥まで、海岸線沿いに造られていた県道の暗橋がいまでも残る（現在の車止め先）。そこからタチガミやその上のアブントー（2B 中上）

の畑へ繋がる道が暗橋脇にあった。名の由来は不明。親徳図、島田図

170 サバンナー [サバンナー] 水田名【3C中央】

「奥ヤンバルの里」の施設全域の総称。かつて奥集落の東側を南北に流れる奥川、部落近くの名称はウッカー(3C中央)の東側にひろがる田園地帯であった。一期作は稲作で二期作は、夏場に水不足となるためタードシ(田倒)にして芋を植えていた。1969年10月の大水害で奥川沿いの田園地帯はすべて土砂で埋まり土地はやせ果て荒地となった。一時期サトウキビを栽培していたが収穫量が少なくほとんどが放置された。1970年から2000年までの2期12年にまたがる奥川大河川改修工事のため、川は直線状になり、掘り下げられ両面はコンクリート張りとなり、おまけに奥川中流域ウブダーガー(5B右上)とチヌブクガー(4B右上)に砂防ダムが建造されたため、往時の水生動物のほとんどが失われた。

サバンナーには、「奥ヤンバルの里」が2001年4月に完成し、「民具資料館」「レストラン」「宿泊施設」などの施設が整備された。これは、国頭村の委託を受け奥区が運営する施設である。また、「奥ヤンバルの里鯉のぼり祭り」が1988年からサバンナーを会場として開催され、多くの県民から親しまれている。サバンナーの地名については、外国帰りの奥人が命名したとの伝承があるが、詳細不明。親徳図

171 サバンナーヌチビ [サバンナーヌ チビ] 水田名【3C中上】

サバンナーが田園地帯を維持していた頃、田園の北側のアムトウ(川の堤防)からイビガナシ(3C中上)祠のあるムイ(小丘)の裾はクムイ(淵)をなし、そのムイの裾にピー(樋)を掘りこみ北側のマンカー(3C中上)の田圃へ水路を引いていた。サバンナーの田圃からあふれた水をイビガナシに放水したり、マンカーへの水を送る場所が田圃の尻となり、サバンナーチビと呼ばれていた。そのアムトウのアダニ(アダン)やハーダイ(ホウライチク)、デアク(ダンチク)の根元にはアカガニやキイロガニ(サワガニの類)が棲息し子供たちの遊び場となっていた。現在のイビガナシのゲートボール場付近がかつてのサバンナーヌチビ。島田図

172 三号橋 [サンゴバシ] 史跡名【5B右中】

奥与那林道(旧ウイバル林道、4B右中)を約3km南下した所に架かる橋のこと。急なカーブに三号橋川が滝をなして落ちている。三号橋の滝の上には南に延びるウマンナガニ(5B右中)の尾根が続き、その西側谷に三号橋へ注ぐ川が南から流れてくる。その上流域の窪地にはガアミチヤバル(5B中下)開墾跡がある。島田図

173 サンバシ [サンバシ] 海名【2C中央】

奥港は1980年から1982年にかけて築港工事が行われ、奥湾西側に完成した埠頭場のことを棧橋と呼んでいる。親徳図

174 サンペイゴー [サンペーゴー] 史跡名【3C左上～2C中下】

奥集落の西側斜面の段畑であるコーレーバテー(3C左上)からお奥小学校の西上にあったホーグ(松の抱護林、屋号：盛鄭屋＝前糸満の畑付近)に通じる深さ約1.3m、幅約1.2m、長さ約1.4kmの塹壕。奥港から上陸する敵を攻撃するために掘ったとされる戦争遺構。島田図

175 シーバーミチ [シーバーミチ] 史跡名【3C左上】

奥集落までの陸路が整備される1951年以前、奥集落から西側にある辺戸・宜名真集落へ通じる道の総称で、集落からウブドー(3A右上)付近までは畑や茶畑が拓かれていた関係で道幅も広がっていたが、ウブドーを過ぎ宜名真部落上の学校跡付近までは山道であった。その状況は1921年に旧陸軍が作成した地形図(5万分の1)にも明確に記されている。奥では地名であるシーバーに因み、シーバーミチと呼ばれている。現在はシーバーの段畑のほとんどが放置され、旧道(2A左中、2C中央、3B中上)が農道に

変わり、そこを利用するので森に覆われ消えかけている道である。島田図

176 ジーブグワーカイクン [ジーブグワーカイクン] 一般地名【7D中央】

奥領域の南端「奥山、59 林班」と楚洲領域「楚意原、県 49 林班」の境界線をなす所で、奥与那林道（7C 中上、7C 中下）と伊江Ⅱ号林道が交差する地点がある。その南東谷を源流とするイーガー（6E 右下）の上流域に拓かれた開墾名である。この開墾は首里出身の屋号ジーブグワー（儀保小）が明治の末期から 1942 年頃まで芋などを造り生活していた。イソ林道（6D 中下）の下にフクギの防風林に囲まれた屋敷とワアーブル（排便で豚を養う所）跡がある。また川のそばには池跡も残る。そこで育った池原美津子（1927 年生）は、「池にはジクル（オオクチュゴイ）などの川魚を養っていてよく食べた。時々、兄と二人で奥まで買い物に出かけたこともある。」と、当時を懐かしんでいた。戦前、ジーブグワーカイクンに行ったことのある奥区の先輩達は、ジーブグワーカイクンは篤農家で牛、豚、山羊、鳥、兎なども飼育したと言う。現在開墾跡には杉などが造林されている。島田図

177 ジーブグワームイ [ジーブグワームイ] 山名【7D右上】

奥領域の南端「奥山、59 林班」と楚洲領域「楚意原、県 49 林班」の境界線をなす付近、奥Ⅰ号林道（ウイバル林道は、日本復帰後延長され伊江Ⅰ号林道と繋がり、奥Ⅰ号林道と改称された。その後、さらに延長され、現在では奥与那林道（7C 中上、7C 中下）となる。集落から奥Ⅰ号林道を約 6km 南下した所で、奥与那林道とイーⅠ号林道（5E 左中）の終点、又は伊江Ⅱ号林道（7B 中央、7A 左中）の起点が交差する地点がある。その南東谷を源流とするイーガー（6E 右下）の上流域に拓かれた開墾名がある。この開墾は首里出身の屋号ジーブグワー（儀保小）が開墾を拓いたことに名が因む。その開墾地の北西側の尾根の高い所をジーブグワームイ（標高 280m）と呼ぶ。開墾名に因む新しい山名である。島田図

178 シガイマガイ [シガイマガイ、シガンマガイ] 一般地名【2C中央】

奥港の港湾道路から西に繋がる道の分岐点は、戦前の県道（宇座浜－奥線、1B 右中）や戦後の山越え旧道（辺戸奥線、2A 左中、2C 中央、3B 中上）の奥側終点であった。この付近はかつてクルイシ（黒色の千枚岩）が露出したまま海に突き落ちた崖淵であった。干潮時にも付近は干上らず。膝まで海水につかり行き来していたが、海が荒れた時は通行不能な難所であった。この難所にしがみついて越えたことからシガイ（しがみつく）に因む。その付近は突き出て曲がっているためシガイマガイとも呼ばれていた。このような難所を通り抜けて西側の海や田畑に行き来するために、奥の先人たちはこの場所より 50m 程高い山腹に小道を開き行き来していた。また、奥湾の西の突端であるシドゥンサチ（2C 中上）には旧イノシシ垣が構築されていたので、イノシシ垣も西への行き来の道代わりに利用された。シガイ付近に道路工事が行われたのは、1927 年で糸満盛任（奥の屋号：仲ヶ、1882 年生）が工事長を務めている。1930 年、沖縄県振興 15 ヶ年計画案に辺土名と奥の間の県道構築が盛り込まれる 3 年前のことである。シガイの工事に関連して掘削剥離したクルイシが、イノシシ垣構築に利用されている。イノシシ垣の持ち主が適当な大きさの石板を買い取りイノシシ垣上部にケーシガチ（返し、忍び返し）として使用したのである。今でもカイチ（4C 右下）付近（東大垣第五区）に発破を仕掛けた時に掘られた穴の空いた頁岩がイノシシ垣の上部に積まれているのが確認できる。島田図

179 シギヤマ [シギヤマ] 山名【4D左下】

楚洲領域「伊江原、県 52 林班」にある三角点（尾西岳、272.0m）の東側でスイ林道からウニシ林道（尾西林道、4D 左下）が西側に分岐する。奥集落からは県道 70 号（2D 中下、4E 左中）を経由して約 3.9km 地点である。ウニシ林道を西に約 200m 行った尾西岳の北東斜面の窪地に杉を植えたことに因む山名である。この窪地は、チルガー（4E 左上）の上流であるワタヌッキガー（4D 中央）の支流の上流で、ウニシ林道の北東側窪地はウンニーエーバテー（4D 左中）が記されている。杉は未確認。島田図

180 シシタ [シシタ] 海名【3E中下】

奥区の東領域「115 林班、加世原」の東にあるウグバマ (3E 左下) の礁嶺淵にある海の地名であるが、その詳細については不明。島田図

181 シジンミーシジ [シジンミーシジ] 山名【4A中央】

奥の領域「奥山、55 林班」と宜名真領域「吉波山、50 林班」の境界付近で、三角点 (宜名真ダム、223.6m、4A 左上) がある農業団地 (1970 年頃拓かれたが、現在は牧草地となり、その中に三角点が設置されている) の東側に、チヌブクガー (4B 右上) の支流であるナンガー (4A 中央) の支流が国道 58 号線から琉大「奥の山荘」入口 (3A 右下) で南から注いでいる。そのナンガーの支流の西側尾根はターマタ (3A 中央) から南に繋がリエーマタ (奥・宜名真・宇嘉山部落の境界、5A 中央) へ延びている。そのシジ (尾根) が農業団地に接するところをシジンミーシジと呼んでいる。現在その付近の様相が大きくかわっているため、地形から読み取られる地名の由来は不明である。また、かつて西海岸沿いの道が開けない時代に奥と宇嘉を繋ぐ古道は郵便道とも呼ばれている。島田図

182 シタンクブ [シタンクブ] 山名【6D左上】

奥の南側にある楚洲の領域、「伊江原、県 50 林班と県 53 林班、いわゆるユンヌヤマ (5C 右中)」が境界をなす所に位置する。三角点 (ゆうぐしく、292.7m、6D 左中) の北側を通るイー I 号林道 (5E 左中、6C 右下) の北側にある下る窪地をシタンクブと呼ぶ。詳細不明。島田図

183 シドゥンサチ [シドゥンサチ] 海名【2C中上】

奥湾の西側にある崎のこと。旧イノシシ垣の西側の起点となっていたが、この痕跡は山越の旧道 (辺戸奥線、2A 左中、2C 中央、3B 中上) の拡幅でほとんど消滅した。奥港から西の海岸に分枝する農道の掘込の北側の頂部には、戦時中監視哨があった。1964 年頃まで「堀割された法面の裾に、ハラジアレーミサ (髪を洗う灰色の土) を採取する横穴があったが、復帰後の拡幅工事での法面が削られ消えた。島田図

184 シナシジリ [シナシジリ] 山名【6B右下】

奥集落から奥与那林道 (旧ウイバル林道、6B 右下) を南に約 4.8km 地点は戦前のウイバル林道の終点である。そこに奥川の支流であるシナシジリガー (6B 右中) が合流する。山名「奥山、58 林班」の中央部を南西側から流れる川である。そのシナシジリガーの中流域にあるのがシナシジリの地名がこの。土砂災害に因むものか地質や地形などに特徴的なものがある場所か、まだ確認されていない。シナシジリガー沿いは、カシギ (オキナウラジロガシ) が多く自生していた。ウンブラ (奥の屋号：上之大屋) の建築資材として 1951 年頃切り出されたと聞く。島田図

185 シナシジリガー [シナシジリガー] 川名【6B右中】

奥集落から奥与那林道 (旧ウイバル林道、4B 右中) を南に約 4.8km 地点にウイバル林道の終点 (戦前、6C 左中) がある。その付近で合流する奥川の支流がシナシジリガーである。山名「奥山、58 林班」の中央部を南西側から流れる川である。このシナシジリガーの中流域にあるのがシナシジリ (6B 右下) であり、その上流域がウブクジリ (7B 中上) と呼ばれる地名である。そのウブクジリ付近に旧 10 林班がり、1928 年に昭和天皇即位記念造林として、クインチャ (広葉杉)、シンダン (センダン)、シギ (杉) を造林したとの記録がある。その造林状況を確認するため 2015 年 11 月 22 日、齋藤和彦、親川栄は、イー II 号林道 (7B 中央) から北側ヘシジ (尾根から) 伝いにシナシジリガーに降り探索した際に、奥領域内では初めてサントー (藍壺) とエー (リュウキュウアイ) の自生を確認した。また、親川栄、座安賢一、滝澤玲子、宮城邦昌等は 2016 年 3 月 20 日にシナシジリガー沿いの古道から川に降り、ウブクジチとウブクジリシミの分岐点東側に 2 m 程積まれた石垣の上に大きなサントー (藍壺) があり、その東側の窪地にはエーが自生している事を再確認するとともに、西側の岸には炭焼き窯跡を確認した。名称からして土砂災害に因む名称と推測するが、地質や地形的な状況から名に因む根拠は未確認である。親徳図、島田図

186 シヌグシク [シヌグシク] 山名【2C中下】

奥集落の北西側に聳える円錐峰（標高約 110m）をシヌグシクと呼ぶ。「113 林班、辺野原」内に位置する。シヌグシクの南東斜面に拓かれた畑に付近には、瓦葺の屋根に使用するための赤土の採掘場所があった。また、畑の防風林としてユンヌグヒチ（トキワススキ）が植栽されていた。1960 年頃まで、隣のイルバタヤンクウ（奥の屋号：溝畑小）の畑では、味噌の材料としてトープマミ（大豆）とムジ（麦）が栽培されていた。収穫の手伝いに行ったとき、ユンヌグヒチで指を切った痛い思いがある。頂上には拝所があると聞かすが、未確認である。その拝所から奥湾東のクワーバカ（2D 左下）付近の海岸の岩場は、区管理の東大垣の起点となっているが、その岩場にドンドンナリ（洞窟に波や風が入り音を響かせた事に因む）がある。シヌグシクからドンドンナイをタンカー（遙拝）したとの伝承がある。奥集落では 1906（明治 39）年の青年会創設当初から迷信打破に努めた結果、大正の初期には「御願不足」がないことを認識し、御願事や法事などが簡素化され、ユタを信じない生活習慣が実現している。島田図

187 シバクブ [シバクブ] 山名【4D中上】

楚洲領域「伊江原、県 52 林班」ないで、県 70 号線を東にスイヌチジ（スイ林道と県道 70 号の合流点、3D 中央）で分岐する。スイ林道を東に約 400m 廻り込むと、ダヒプガー（3E 左中）の上流にあるナハヤマガー（4D 中上）に架かる橋がある。ナハヤマガーの上流は南西に源流をもつが途中で支流が南から注ぐ、その小川の上流付近の窪地をシバクブと呼んでいる。名の由来はシバ（奥ではシダ類の総称）が自生したこと因むと推察されるが、現場は未確認である。親徳図、島田図

188 シバシジ [シバシジ] 山名【5C中上】

奥川を南に遡上し東斜面の耕作地「114 林班、菊連」の南端は「奥山、60 林班」の南西端と南の楚洲領域「伊江原、県 53 林班、いわゆるユンヌヤマ（5C 右中）」と接する。その境界が尾根にあり、ウニシ（尾西岳 272.1m、4D 左下）へと繋がる。奥側の支流で東から合流するシバシジガー（6B 右中）の源流域南に位置する尾根のチジ（頂）をシバシジと呼んでいる。奥ではイヌガシのことをシバヒと呼び、旧暦 9 月に行われるシヌグ行事（豊年祭、2015 年は 9 月 10～12 日の 3 日間）で部落内の悪霊を祓う神木である。その神木であるシバヒを取りに行く山の一つがシバシジである。もう一つの山は部落すぐ南のミヤゲムイ（3C 左中）から山道をいったヤマジー（3B 右中）のハイノーマー（3B 右中）の南にあるシバヒヤマ（奥の地名図では省略）である。1938（昭和 13）年度に松、イジュ造林。島田図

189 シバシジガー [シバシジガー] 川名【4C左下】

奥川を南に遡上し東斜面の耕作地「114 林班、菊連」の南端は「奥山、60 林班」の南西端と南の楚洲領域「伊江原、県 53 林班、いわゆるユンヌヤマ（5C 右中）」と接する。その境界が尾根にあり、ウニシ（尾西岳 272.1m、4D 左下）へ繋がる。奥川の支流で東から合流する川の名前。上流域にシバシジ（5C 中上）があり、奥のシヌグ行事（豊年祭）で使用するシバヒ（イヌガシ）が自生し、その山を源流としていることに因む川名。タチミチガー（4C 左下）とフィジガー（5C 左上）の間の川。フィジ入口で奥川に合流する。島田図

190 シブギントー [シブギントー] 水田名【4C左下】

奥集落から奥与那林道（旧ウイバル林道、6C 中下、7C 中下）南下し、途中から奥川沿いに開けた田圃沿いに南に約 3km 行った所にある。奥川はこの地点まではほぼ落差がない緩やかな川であるが、こちら上流側いわゆるウブダーガー（5B 右上）からは急流となる。そのウブダーガーの下流域に位置するのがシブギントーであるが、この位置は奥川の支流フィジガー（5C 左上）、シバシジガー（4C 左下）、タチミチガー（4C 左下）が合流するところである。シブギントーは奥川が左に蛇行する内側にできた砂州が発達して形成された沖積地である。林産物搬出現場が南に移動し、その搬出に難渋した奥の住民たちが、1916 年に集落からシブギントーまでの約 3km の車道を造ったのである。名の由来はシブギ（リュウキュウマメガキ）のある平坦地に因む。その平坦地を利用してフィジ（5C 左上）を越えて運ばれた木材を集

積場所、また製材所が設置された。水車式製材所の取水場は、奥区管理のイノシシ垣である東大垣終点（第六区）と西大垣（第四区）が、ウプダーガー（5B 右上）の落差のある岩場で合流する。その岩場に掘削された取水場跡が残る。また、運動会のマラソン競走の折り返し点（実際は往復で約 6km 程）であった。親徳図

191 シマブクチャーヤマ [シマブクチャーヤマ] 山名【3B右上】

奥集落内を西側から流れるアンガー（3C 左上）が奥区管理のイノシシ垣（西大垣 3 区）と交差する付近の山名である。シマブクチャー（奥の屋号：島袋屋）が開墾したことに因む。大きな竹が植栽されていた。島田図

192 シムドークワダー [シムドークワダー] 水田名【4B右中】

奥集落から奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を南下し、シブギントー（4C 左下）へと下って行く途中付近で奥川の西に拓けた田圃である。シムドークワ（奥の屋号：下門小）が開拓したことに因む。親徳図

193 シルカニジ [シルカニジ] 海名【2E左中】

奥湾の東「115 林班、加世原」のハルー（加世原、3D 中上）の北東端にある小さな海岸である。その海岸はハルーの裾野から大きな岩が沖の方に点在している。いわゆる瀬戸と呼ばれる地形である。点在している岩は裾礁が発達し干潮時には干瀬となる。そこに点在する岩が奥領域の代表的なクレイシ（黒色の千枚岩）ではなく金属的な岩石であることが名に因むと推察する。1944 年冬、北東の季節風が吹き荒れる頃、エンジンの故障で一隻の船が漂流して打ち上げられた。南方への軍事徴用船須磨丸（約 50 トンの木造船）であった。積載物は食糧品で、カンパンや乾燥ジャガイモで、奥の部落民は総動員して波の届かない場所へ移動し、戦時中の食糧の足しにしたとのこと。ところがシルカニジ海岸は断崖絶壁の海岸で、戦時下の真っ暗闇をカンパン運びに奥の住民は行き来したとのこと、命がけであったとうかがう。（字誌「奥のあゆみ」324 頁）島田図

194 シルプクジ [シルプクジ] 水田名【3C中下】

「奥ヤンバルの里」からピドゥムイ橋（沖縄県の工事関係資料では、「奥名橋」と命名されているが、名称無表示）を渡り東岸沿いの農道を約 500m 行った付近がシルプクジである。奥川に面した窪地に東側から注ぐ小川があり、その流域は湿田となっていた。その小川をシルプクジガー（3C 中下）と呼ぶ。シルプクジは水分を多く含む地、いわゆる湿田に因むと推察される。シルプクジの湿田のほとんどは奥川の大河川改修工事で失われた。親徳図

195 シルプクジガー [シルプクジガー] 川名【3C中下】

奥ヤンバルの里からピドゥムイ橋を渡り東岸沿いの農道を約 500m 行った付近がシルプクジ（3C 中下）である。奥川に面した窪地に東側から注ぐ小川がシルプクジガーである。シルプクジガーから奥川にピー（樋）をかけて西対岸にあるヌガンナー（3C 中央）の水田に灌漑用水を引いていたが、1969 年 10 月の大洪水で田園地帯が土砂に埋まり、水田が失われ用水路のピーも失われた。

奥川の河川改修工事に伴い、シルプクジの湿田はほとんどが失われた。その後、村興しの一環として「奥ヤンバルの里鯉のぼり祭り」がスタートした 1990 年 5 月に、祭りを記念して在那覇奥郷友会有志等が奥川に鯉を放流するとともに、シルプクジの湿田跡とシルプクジガーの水を利用して養殖場を造り、鯉の稚魚を養殖した経緯がある。現在は放流された大きな鯉は減少し、養殖場は失われた。島田図

196 シンナ [シンナ] 水田名【3C中上】

奥集落から北に奥小学校へと繋がるイッシンダー（一心道、3C 中上）と国道 58 号線の間には挟まり、集落の北東側に広がる田圃である。そこへの灌漑用水はピドゥムイ（3C 中央）のウエーク（堰）から現在の「奥ヤンバルの里」入口にあったウッカー（3C 中央）に架けられたピー（樋）から部落内をとおり、アンガー（部落内ではハーランクワーと呼ぶ、3B 右上）が「下の橋」で交差するとき再度ハーランクワーの水が補給されシンナとミーダー（3C 中上）へと送水されていた。シンナとミーダーの田圃で使用された水は再びガタ（2C 右下）を通してイナトチビで奥川に放水された。部落の中を通る用水路をナガミジバイ（長水張）と呼び、生活用水としても活用された。また、用水路が通る所は集落内で低くなっている事からインドンヒサ（溝の下）と呼び、洪水のたびに床下まで浸水する水害常襲地であった。島田図

197 シンノブ現場 [シンノブゲンバ] 史跡名【4B左上】

旧チヌフク林道の一期工事が 1940 年から始まった。旧チヌフク橋（4B 左上）付近の工事を請負った中真親信の名に因む。現在国道 58 号線（3A 中央、3C 中下）に架かるチヌフク橋（4B 中上）からチヌフクガー（4B 右上）の支流マシガー（4B 左下）の分岐点であるハートウイグムイ（4B 左下）まで残り、特に旧チヌフク橋は原形を維持していて、景観もよい。島田図

198 シンブングムイ [シンブングムイ] 海名【3E左中】

奥湾の東側「115 林班、加世原」ハルー（3D 中上）の東海岸に南西からダヒブガー（3E 左中）が注ぐ。川尻のフムイ（深場）のことをシンブン（親文）の名に因むと推察するが、詳細は不明。島田図

199 スイ [スイ] 一般地名【2D左下】

奥湾の東側「114 林班、楚意原」領域のことをスイと呼んでいる。領域の中央部をスイガー（3D 左上）が南東側からハーチビイブ（奥川河口の砂州、2C 右下）に注ぐ。スイガーの河口付近は三角洲をなし沖積層で形成されているが海岸に面する部分は砂が堆積しスイハニク（楚意兼久）を形成している。このスイカニクには奥第四貝塚（1977 年に砂採掘中に発見された。沖縄貝塚時代後期の遺跡であるが、大量な砂採掘でほとんどが失われている。）があり、芋畑があり、低地は水田が営まれていた。現在は畑のみが営まれている。このスイバルの三角洲にはかつて奥の小字があった。この小字は、蔡温の山林巡見後の指導で現在のスシ（楚洲区）に移転し村興しをするが、大風と大波の苦いに遭い、スイバルに遷村するがしばらくして元の楚洲に再遷村し現在に至るスシ集落の歴史的経緯は次の通りである。

琉球の正史「球陽」からスシ（楚洲）に関する見出しを記載する。

- ① 1736 年、楚洲村奥のスイ原より現在地に移転。（球陽 1026）
- ② 1770 年 11 月 13 日（現：12 月 29 日）、国頭郡楚洲村の、奥村楚江兼久原に遷るを准す。（球陽 1281）
- ③ 1801 年 12 月 23 日（1802 年 1 月 24 日）、国頭間切楚洲村を旧籍に遷し、仍、掟役を立つるを准す。（球陽 1495）

島田図

200 スイガー [スイガー] 川名【3D左上】

奥湾の東側「114 林班、楚意原」領域のことをスイ（2D 左下）と呼んでいる。領域の中央部を南東側からハーチビイブ（奥川河口の砂州、2C 右下）に注ぐのがスイガーである。地名が川名に因む。島田図

201 スイクビ [スイ'クビ] 水田名【2C左中】

奥集落の西の海岸「112 林班、世皮原」フパダチ（2C 左上）の中間程にある砂地であるハニクバル（兼久畑）の南斜面を登った尾根の南斜面付近に流れるフパダチガー（2C 左中）の支流領域に拓けた湿田付近の総称である。1958 年頃、スイクビーの田作りに行ったことがある。深い湿田でハラ（リュウキュウチク）の葉を緑肥としていた。ハラの切口が足に刺ざらないように切口から踏み込み、しだいに葉の方

へと移動しながらムジンクン（鋤きこむ）で、足に刺さらないように苦勞した思いがある。島田図

202 スイヌチジ(スイ林道と県道70号の合流点) [スイヌチジ] 史跡名【3D中央】

楚洲領域「伊江原、県52林班」の北端で、スイヌチジ（スイ林道と県道70号の合流点）合流付近のかつてのチジ（山頂）をスイヌチジが地名に因む。このチジは東大垣一区と二区の結合地点で、人間と牛がスイヤマ（3D中央）や開墾などへ行き来するためのビービー垣（木製の扉で、開閉時にビービーと音を発したのに因む）を構築していた場所である。その付近のイノシシ垣は県道70号（2D中下、4E左中）の拡幅整備工事で失われた。島田図

203 スイヤマ [スイヤマ] 山名【3D中央】

楚洲領域「伊江原、県52林班」の北端で、県道70号（2D中下、4E左中）と奥Ⅱ号林道（旧スイ林道、3D右下）合流する付近のチジ（山頂）をスイヌチジ（3D中央）から南に延びる尾根があり、その尾根は南に聳えるウニシ（尾西岳、272.3m、4D左下）へと続く。県52林班の北側に位置する。付近にはダヒブガー（3E左中）の上流であるナハママガー（4D中上）の中流域となる。島田図

204 スイ林道とイー原林道の合流点 [-] 史跡名【5D中央】

楚洲領域「伊江原、県51林班と県53林班」の境界にある林道分岐点。三角点（尾西岳、272.1m、4D左下）の南東700m付で、スイ林道（奥Ⅱ号林道）と県道70号線（4E左中）からタチガー（4E左下）沿いに南西に登ってきた新しい林道（伊江原林道、5D右上）との合流点である。島田図

205 スイ林道とイーⅠ号林道の合流点 [スイリンダー] 史跡名【5D中央】

楚洲領域「伊江原、県51林班と県53林班」の境界にある林道分岐点で、三角点（ゆうぐしく、296.7m、6D左中）の北600m付近。奥Ⅱ号林道の終点で、イーⅠ号林道（5D中央）との合流点である。島田図

206 スグラ [スグラ] 一般地名【2C中下】

奥領域「113林班、辺野原」にある開拓地で、奥小学校南側の住宅南に西から注ぐナビクブヌハーンクワー（2C中下）がある。その源流付近の標高約100mの丘陵地で、シヌグシク（標高110m、2C中下）の北北西約150mで旧道（辺戸—奥線、2C中央）を奥港から約1km登ったところの西に位置する。名の由来については不明。島田図

207 スシアンダー [スシアンダー] 水田名【3D左上】

奥湾の東「114林班、楚意原」の扇状地の中央部に南東側から緩やかに突き出た嶺がある。その尾根の北側に拓かれた小さな田の名前である。その南東上にはチッチダー（3D左上）がある。この二つの田は水が少ないことから天水田であった。名の詳細不明。島田図

208 スシバマ [スシバマ] 海名【2D左下】

奥湾に注ぐ奥川に河口の東側の砂浜の地名である。「114林班、楚意原」の扇状地の北西に位置し、潮間帯と砂浜、砂丘にはアダニ（アダン）やユナ（オオハマボウ）が防潮林として植栽されていた。内側は砂地でハネク（兼久地）を形成している。スイ（2D左下）の浜が名に因む。島田図

209 スシマタグチ [スシマタグチ] 史跡名【7C中央】

奥領域の最南端で「奥山、59林班」と辺野喜領域「大川山、県57林班」それに楚洲領域「伊江原、県49林班」が結合するところで、三角点（伊集湖北、337.1m、7C中央）の南南東約300mの地点である。東側で奥Ⅰ号林道（奥与那林道（7C中下））と合流したイーⅡ号林道が辺野喜方面に西進する地点で、奥

与那林道が南に分岐する地点である。南東側の窪地は我地川の源流域でユッパ（横芭、1921年作成5万分の1、参謀本部築地測量部の地形図より）と呼ばれる村跡があった。また南西窪地は辺野喜川の源流である大川領域でウニンガ（7B右下）と呼ばれ開墾跡にはサントー（藍壺）跡があり、エー（リュウキュウアイ）が自生している。スイマタグチは、現在は林道で繋がっているが、かつてはスシ（楚洲）・ユッパ（横芭）・ガジ（我地）に繋がる山道の交差点であった。島田図

210 スラシイジマタ [スラシージマタ] 山名【5C右中】

楚洲領域「伊江原、県53林班、いわゆるユンヌヤマ（5C右中）」を東から奥川に注ぐ、アラマタガー（5C中央）の上流域の支流付近にある。イタジイの美林が自生していたマタ（谷）に名が因む。島田図

211 セイネンミチ [セイネンミチ] 史跡名【2C中下】

奥尋常小学校（現奥小学校）からスイ（楚意）方面に行くにはミーダー（新田、3C中上）があるなめ、イッシンドウ（一心道、3C中上）を集落側のアジマー（広場）まで戻りワナー橋（3C右上）に迂回していくしかなかった。青年会はその不便を克服するため積立金80余円を投じて道路に要する田を買収し、幅4尺余（約1.2m）、長さ約80間余（約145m）の新道を1910（明治43）年3月に竣工したことに因む。（字誌「奥のあゆみ」73頁）島田図

212 セイネンヤマ [セイネンヤマ] 山名【5C左下】

ウイバル林道（奥与那林道7C中上、7C中下）を南下した四号橋（5C左下）の西斜面で「奥山、57林班」が奥川中流域の西側に位置する。青年会が植林するなど山を管理していたことに因む。島田図

213 戦前の県道跡 [一] 史跡名【1B中右】

1942年に一部開通した辺戸・宇座浜から奥までの海岸沿の県道。衆院議員選挙に立候補していた漢那憲和（1877年生、那覇市出身）がその選挙運動のため、ユッピバマ（1B左上）まで自動車を乗りつけて来た。その後、戦時体制へと突入したため県道工事は放置された。荒波にさらわれ、原形を失われた。所々に電柱痕や暗渠、発破を保存した火薬貯蔵庫など痕跡が残る。島田図

一度しか自動車が通らなかったこの県道の思い出を、上原イネ（1932年生、当時小学校4年生）の体験談を紹介する。「初めて見る自動車より印象に残っているのは、漢那憲和を車から降ろすためにニンブー（こも、ユンヌ（与論島）から伝わった藁で編んだ蓆）を敷いて、降ろしたことである。私は大人になり往時を思い起こすことが時々あるが、今考えるとニンブーではなく絨毯（じゅうたん）を敷いたのだと思いたいなおした。」

214 ソーマジー [ソーマジー] 一般地名【2C右下】

1980年代の奥港の築港で前浜は失われた。かつてのメーバマ（前浜、2C中下）は、新たに造られた防波堤の中に消えた。メーバマは西側にある奥小学校付近から発達した砂嘴（さし）が東側に伸び形成されたものである。かつての砂嘴の海側は砂浜で、陸側の丘陵帯はアダニ（アダン）やユナ（オオハマボウ）が防風林を形成していた。防風林の中には1933年に完成した旧護岸が残っている。防風林の南側砂地をソーマジーと呼び、芋や大根、落花生などが栽培されていた。また、ソーマジーには奥第三貝塚（1967年に琉球大学歴史研究クラブによって発見された沖縄の貝塚時代後期の遺跡である。）があったが、沖縄の日本復帰前後に大規模な砂採取により、貝塚は失われている。ソーマジーの東側には辺戸・宇座浜経由の海岸沿いの県道工事に使用する発破を保存する火薬貯蔵庫も砂採取とともに失われた。島田図

215 ターウインパナ [ターウインパナ] 山名【3B右上】

奥区からシーバーミチ（3C左上）を登り、旧山越え県道と合流するところで奥区を見下ろす景観のいいところ。そこを越したら部落を見ることができないので、休憩所ともなっていた。かつて奥を訪れた上

杉茂憲県令(1881年)、笹森儀助(1883年)、河村只雄(1936年)ら旅人は、山道を通り抜けたこの地、ターウインパナの開けたシジから奥集落を遠望し、桃源郷をイメージし感動したであろう。その風景は1936年10月25日に、河村只雄が撮影した1枚の写真に残る。島田図

216 タータ [タータ] 一般地名【3C中央】

「奥ヤンバルの里」敷地内で、奥川の東側「114林班、多和田原」でサバンナー(3C中央)の田圃の東側で斜面には湿田もあった。現在「奥ヤンバルの里」の宿泊施設が建っている一帯。島田図

217 ターマタ [ターマタ] 水田名【3A中央】

奥集落から、国道58号線を辺戸方面へ約2.4km行った国道58号線から琉大「奥の山荘」への入口(3A右下)付近で、奥・宜名真境界にあった湿田の名称。そこへの経路はシーバーミチ(3C左上)を通りウブドー(現琉大「奥の山荘」、3A右中)から南に下ってきた。また、エーマタ(5A中央)を越えて宇嘉へ繋がる唯一の山道で、郵便道とも呼ばれていた。ウブドーの開墾に住んでいた1953年頃、ターマタの田圃へ稲作をしていたが、深い湿田で松の大木を底に沈めていたが、緑肥のハラ(リュウキュウチクの若葉)を鋤き込む作業中に、時々松の丸太を踏み外して胸まで沈み込むことがあった。現在は田圃の風景は失われ、わずかに茶畑が営まれている。島田図

218 ターマタバー [ターマタバー] 山名【3A右中】

ターマタ(3A中央)にウブドー(現琉大「奥の山荘」、3A右上)方面から南に降りてくる坂道ごと。1962年に琉球政府道1号線(現国道58号線)が開通し、ターマタ道もブルドーザーで拡幅されウブドーにあった奥中学校へのバス通学も可能となったが、ターマタからターマタバーを経由してウブドーの中学校までの路程は、距離にして約530m、標高差82m、勾配15.5%で、一気に82mの山を登るバス通学は大変キツイ思いをした。そのため、通学は旧道(3B中上)が主で、バスはあまり利用されなかった。その後、過疎化による学生数の激減で1965年4月に奥中学校は、小学校敷地に併置されたため使用されずに放置された。現在は国道58号線から琉大「奥の山荘」への入口(3A右下)から琉大「奥の山荘」へ農道が繋がり、便利になっている。親徳図、島田図

219 タアנקビー [ターンクビー] 一般地名【2B右下】

奥集落からシーバーミチ(3C左上)を登った西に位置する。「112林班、世皮原」領域内のフパダチガー(2C左中)の上流域に拓かれた湿田である。その北側にはスインクビ(2C左中)の湿田がある。そこへの道はフパダチガーを遡上しスインクビを経由して来る道と、シーバーミチをチジンパーからヒサントー(2B右下)を経由していく道があったが、いずれも坂道を登ったり下ったりと大変な山道を歩いていく田圃であった。親徳図、島田図

220 タカシジ [タカシジ] 山名【3B中下】

国道58号線(3A中央、3C中下)を辺戸方面へ約1.5km行ったチヌブクガー(4B右上)の支流と交差する付近で、北西側の窪地アダギ(3B中下)から注ぐ支流の東側に位置する小さなシジ(頂)のことで、南東に傾斜するチヌブク付近では高く見えたことに因む。島田図

221 タカバテー [タカバテー] 山名【3D左中】

奥領域「114林班、楚意原」の南端と楚洲領域「伊江原、県52林班」北西端の境界をほぼ東西に巡らした、東大垣第二区(イノシシ垣)の中間点付近で、スイガー(3D左上)がイノシシ垣を南北に横切る付近にあるシジ(頂)である。奥湾望む北西側の展望が良いことから戦時中に奥住民で組織した防衛隊の監視所があった。島田図

222 タカバテーシジ [タカバテーシジ] 山名【3D左中】

奥領域「114 林班、楚意原」の南端と楚洲領域「伊江原、県 52 林班」北西端の境界をほぼ東西に巡らした、イノシシ垣（東大垣第二区）の中間点付近で、スイガー（3D 左上）がイノシシ垣を南北に横切る付近にあるシジ（頂）である。そのシジからウニシ（尾西岳、272.3m、4D 左下）に繋がる尾根が形成され、北側のシジ名をタカバテーシジと呼んでいる。島田図

223 タチガー [タチガー] 川名【4E左下】

奥集落から県道 70 号（2D 中下、4E 左中）を東に約 3.7km 行った地点に橋が架かる川がある。その川がタチガーである。楚洲の領域「伊江原、県 51 林班」が海岸に接する所である。昔、楚洲の小字ダナ（田名、5E 右上）があったが廃村となっている。タチガーは水量も多いことからダナ部落の水源ともなっていた。また、タチガー河口の北側にはチシーヤーバル（4E 中下）の開墾跡もある。島田図

224 タチガーバマ [タチガーバマ] 海名【4E中下】

奥集落から県道 70 号（2D 中下、4E 左中）を東に約 3.7km 行った地点に橋が架かる。その川がタチガー（4E 左下）で、川が注ぐ浜をタチガーバマと称する。楚洲の領域「伊江原、県 51 林班」が海岸に接する所である。昔、楚洲の小字ダナ（田名、5E 右上）があったが廃村となっている。奥区の領域はダナの北西側のチルバマ（4E 左中）に注ぐチルガー以北であることから、1953 年 2 月 28 日に、奥区長・宮城達夫他 13 名、楚洲区長・長嶺徳山他 11 名がタチガーバマに集い、道路、電話用電柱、海の管理について話し合い、ダナまでの道や電柱の管理を奥が行う代わりに、ダナの東にある小さな浜であるハミガーバマから西側の楚洲領域である海の利用権を奥区に譲る契約を交わした。そのことを奥区では「タチガー会談」と傳承されている。また、ハミガーバマの海岸にはコロシタガマと呼ばれる洞窟があり、風が吹くとコロシタホイホイの音を響かせたことから恐れられていた。島田図

225 タチガミ [タチガミ] 山名【2B中上】

奥集落の北西端「112 林班、世皮原」と「奥山、54 林班」の境界付近、ユッピーバマ（1B 右下）の南側丘陵地に琉球石灰岩のカルスト地形の円錐峰（標高 124m）がある。この円錐峰をタチガミと称している。付近は標高 100～150m の斜面で周囲約 3km、面積約 28.2ha のほぼ平坦でドリーネ（縦穴）があることからアブントー（2B 中上）と呼ばれている。タチガミの北側の標高 100m ラインには離水ノッチがあり、奥区が管理したイノシシ垣（西大垣一区）の一部は、タチガミの離水ノッチを活用している。島田図

226 タチガミガー [タチガミガー] 川名【2B右上】

奥集落の北西端「112 林班、世皮原」と「奥山、54 林班」の境界付近、ユッピーバマ（1B 右下）の南側丘陵地に琉球石灰岩のカルスト地形の円錐峰（標高 124m）がある。この円錐峰がタチガミ（2B 中上）で、東側の谷を流れる川をタチガミガーと称する。急流をなしユッピーバマに注いでいことからユッピーともいう。また、タチガミの北側の標高 100m ラインには離水ノッチがあり、奥区が管理したイノシシ垣（西大垣一区）の一部は、離水ノッチを活用している。タチガミガーは西大垣第一区と二区の結合点となっている。また、フバダチの田圃への灌漑用水の取水は、タチガミガーから行われ、その取水口が暗渠の南側の滝の上に残る。島田図

227 タチミチガー [タチミチガー] 川名【4C左下】

奥の領域「奥山、60 林班」から「114 林班、菊連」に注ぎ、奥川の中流域シブギントー（4C 左下）で東から奥川に合流するか川の名前である。ウニシ（尾西岳、272.3m、4D 左下）の西裾野に広がる開墾地、カイチ（開地、4C 右下）付近を源流とする川である。タチミチの由来は奥川に合流するシブギントーの東で、落差 50m の垂直滝をなし、滝壺に垂直に水が落ちることに因む。カイチを流れることからカイチガーとも呼ばれる。その流域にトゥクドナーカ（奥の屋号：徳門仲）が拓いたトゥクドナーカバル（4C 中下）

と呼ばれる開墾跡があり、そこから流れるタチミチガーをイノシシ垣が横切る所で小さな滝があり、イノシシ垣は川垣を構築し景観のいい場所である。東大垣第五区。島田図

228 タチントー [タチントー] 海名【2C中下】

奥港の西側に築港された棧橋がある。その手前に二つの大きなクルイシ（黒色の千枚岩）が水面に突き立っている。この二つの岩をタチントーと呼んでいたが、1982年5月8日に「かりゆしの岩」と命名された。沖側の大きいタチ（立岩）をウブタチ（大岩＝雄のタチ）、手前の小さなタチをフウタチ（小岩＝雌のタチ）と子どもたちは呼んでいた。大潮の干潮時にはフウタチまで干上り、潮干狩り時の海入口であった。夏の夕方の子供たちの泳ぎ場所でもあり、小学校5-6年生や中学生の男性徒等は、ウブタチ（高さ約5m）の頂上から飛び込むのを唯一の楽しみとしていた。また、台風や季節風などで共同店の船が避難し遅れた時、やむなく係留する場所がタチントーの岩陰であった。島田図

229 ダナ [ダナ] 一般地名【5E右上】

奥集落から県道70号(2D中下、4E左中)を東に約4.0km地点に拓けた兼久地がある。その付近をダナ(田名)とよぶ。名の由来については不明。楚洲の領域「伊江原、県51林班」が海岸に接する所である。昔、楚洲の小字ダナの集落として数軒の民家があったが廃村となっている。島田図

230 タバクバテー [タバクバテー] 一般地名【6C右中】

奥領域「奥山、59林班」と楚洲領域「伊江原、県49林班」が境界をなす稜線にイーI号林道が南北にのびている。北東約300m方向に三角点（ゆうぐしく、292.7m、6D左中）が位置する。現在西側にブルドーザーが拓いた森林皆伐場への道が分岐する付近に、昔たばこ畑があったことから名に因む。現在のブルドーザー道はウフグシクガー（6C左中）付近の林道に設置された木炭集積場から奥川におり、支流のナグンペーガー（6C中央）を遡上しかけた所から北側に登った尾根が東西に伸びナグンペーシジ（6C中央）と呼ばれ古道があった。その古道を東側から西側にブルドーザー道が拓けて、タバクバテーへと繋がっている。名の由来となるたばこ畑の痕跡は確認できない。島田図

231 ダヒプガー [ダヒプガー] 川名【3E左中】

楚洲領域「伊江原、県52林班」のほぼ全域を源流としたナハマヤガー(4D中上)を始め多くの支流があり、奥領域「加世原、115林班」の南西端で支流は合流し、県道70号(2D中下、4E左中)付近を北東に横切って流れ、加世原の東海岸に注ぐ川をダヒプガーと呼んでいる。海岸に注ぐ場所(落水)はウグザチ(3E左中)の北側に裾礫を形成するところのシンブングムイ(3E左中)付近である。名の詳細は不明。島田図

232 タムチグムイワハリ [タムチグムイワハイ] 山名【5D左上】

楚洲領域「楚江原、県53林班、いわゆるユンヌヤマ(5C右中)」の北側で奥川に東から注ぐ支流がアハマタガー(5C左中)である。その中流域の支流の分岐点から東に登る尾根がある。その尾根と三角点(尾西岳、272.1m、4D左下)から三角点（ゆうぐしく、292.7m、6D左中）を繋ぐ脊梁山脈と合流するところがタミチグムイワハリと呼ばれる所である。名の由来は詳細不明。親徳図、島田図

233 タムンダー [タムンダー] 川名【2C右下】

奥川の河口の西岸に位置している。河口付近で川幅がひろくなりソーマジ（2C右下）とガタ（潟、2C右下）に接する砂地付近をタムンダーと呼んでいた。かつて林道がない時代は、奥川上流で切取った薪やマチガーラ（松丸太）などの林産物は奥川を利用して港まで運び、そこから海路で搬送していた。タムンは薪のことで薪などの林産物を集積した場所からタムンダーの名に因む。奥川上流からの林産物は最初にヒナフシ（5C左中）で収集し、牛に引かしてフィジ（5C左上）を越してシブギントー（4C左下）の川辺まで運び、そこで集積し乾燥させ軽くなった頃に大雨時の増水を利用して奥川に再び流しタムン

ダーで収集したと言われている。現在はその一帯も整備され、往時の面影はない。島田図

234 ダラギクブ [ダラギ'クブ] 山名【3D右上】

奥湾の東領域「115 林班、加世原」の東海岸に河口を持つ小川がある。その小川はウトウミジ (2E 左下) 海岸の北側のヤマグムイ (2E 左下) に注ぐ、この小川の中流域の窪地にダラギ (タラノキ) が群生していたことに因む地名である。奥領域でダラギは少ない植物であり、現場の状況は確認されていない。島田図

235 タンタロークブ [タンタロー'クブ] 山名【5C右上】

奥与那林道 (旧ウイバル林道、4B 右中) を約 3.9km 南下した四号橋 (5C 左下) 付近の奥川東側に、楚洲領域「伊江原、県 53 林班、いわゆるユンヌヤマ (5C 右中)」がある。この領域北部に奥川の支流アハマタガー (5C 中央) が東側から注ぐ。そのアハマタガーの上流域の支流の窪地に拓かれた開墾名で、クインチャクブ (5C 右中) の上流に位置する。開拓者の名に因む地名が記されている。島田図

236 タンナハエーバテー [タンナハエーバテー] 一般地名【7C右上】

奥与那林道 (7C 中上、7C 中下) を約 6km 南下したところで、イー I 号林道終点、イー II 号林道起点と合流する。合流点の北側の窪地に玉那覇という人が拓いた開墾で、エー (リュウキュウアイ) を植栽したことに名をちなむ。ナグンペーガー (6C 中央) の上流。現在でも畑跡にエーが自生している。沖縄の日本復帰前後に木材伐採用のブルドーザー道が開かれ、開墾痕跡が失われている。島田図

237 タンメーヤマ ['タンメーヤマ] 山名【4A右上】

国道 58 号線を辺戸方面に約 2.3km 点付近に、国道 58 号線から琉大「奥の山荘」への入口 (3A 右下) があり、その手前に国道 58 号線とチヌブク林道の合流点 (4A 右上) がある。そこからチヌブク林道に入りトゥピサガー (4A 右上) を渡り約 250m 南下したところの西丘陵地一帯をタンメーヤマと言っているが、詳細は不明。島田図

238 タンヤキ [タンヤキ] 一般地名【3B左上】

奥集落からシーバーミチ (3C 左上) を登りチジンパーで旧県道 (奥辺戸線) に合流して県道をウブドー (3A 右上) へ向かうと道沿いに茶畑が拓かれている。ヤマンクビー (2B 左下) 入口手前の県道は両面が掘り下げられ高い法面を形成しその上に茶畑はある。その付近の西側にタンヤキの地名が記されている。木炭を焼いた場所であることが名に因む。現在、茶やミカン畑となっている。島田図

239 チシーヤーバル [チシーヤーバル] 一般地名【4E中下】

奥集落から県道 70 号 (2D 中下、4E 左中) を東に約 3.7km 地点に橋が架かる川がある。その川がタチガー (4E 左下) である。楚洲の領域「伊江原、県 51 林班」が海岸に接する所である。そのタチガーの北側の窪地を喜瀬という人が拓いた開墾でチシーヤーバルの名を記す。この窪地にはメーガ (ミョウガの種類) の自生地とされるが、未確認である。また、タチガーの河口はタチガーバマ (4E 中下) と繋がり、海岸内陸の兼久地には、昔、楚洲の小字ダナ (田名、5E 右上) があつたが廃村となっている。また、県道 70 号線 (4E 左中) とイーバル林道が、チシーヤーバルの南側で分岐する。島田図

240 チジンパー [チジン'パー] 山名【5B左中】

奥与那林道 (旧ウイバル林道、4B 右中) を約 3km 南下した川に二号橋 (5B 右中) が架かる。「奥山、59 林班」内にあるハシッタヒガー (5B 右上) の中流域にカーミーマタ (5B 中上) ある。かつて 1982 年から 1996 年までの 14 年間、奥の簡易水道の取水場として使用された川である。カーミーマタは支流が両方から流れ込み合流することを表現しているが、その合流点から尾根が南西に延び尾根に古道が残り、古道を辿るとチヌブク林道やギヤマ林道との合流する南側に繋がっている。その尾根にはナハンパー (5B

中央)、チジンパー、ハンナイヤキ (5B 左中) と3つの名がついている。チジンパーの由来については現場の地形からは表現しにくい名となっている。親徳図、島田図

241 チダイミチ (クスノキ造林) [チダイミチ] 山名【5A右上】

奥集落から国道58号線を辺戸方面に行くと、「奥山、56林班」ないで、国道58号線とチヌフク林道の合流点(4A 右上)がある。そこからチヌブク林道に入り約1.6km南下したところの大きなカーブをなす所を、チダイミチと呼んでいる。奥の造林台帳によると、1913年度にチダイミチに楠木89本、杉1本造林したと記録されている。大きな楠木が生えていたが、2012年末にチダイミチ付近が皆伐され、楠木の太木も消えてしまった。造林台帳からすると99年もの年月がかかった太木であった。切株を測ると直径約50cmもあった。島田図

242 チッチダー [チッチダー] 水田名【3D左上】

奥湾の東にあるスイ(2D 左下)の扇状地に南東から流れ込むスイガー(3D 左上)と支流は扇状地で合流するが、その二つに挟まれた所に小さな丘陵をなしている。支流である小川は水量が少ない沢である。スシアンダー(3D 左上)という天水田があり、その上に小さなチッチダーとよばれる天水田がある。一枚田ということに名が因む。そのすぐ上を県道70号(2D 中下、4E 左中)が南北に繋がっている。領域的には「114林班、楚意原」内にある。島田図

243 チナヤーダー [チナヤーダー] 水田名【4C左中】

奥集落から奥与那林道(旧ウイバル林道、4B 右中)を約1.7km南下すると、「113林班、仲田原」にシムドグワダー(4B 右中)がある。ここから南北に流れる奥川を渡って行った「114林班、菊連」の裾野は南西方向に開けている。その斜面に拓いた湿田である。奥では照喜名屋を略してチナヤ(喜名屋)と称する事に因む。1970年頃に行われた奥川の大改修工事でほとんどが失われている。チナヤーダーの上に戦前アラジバル(明替畑)があり、美味しい芋が取れたとうかがう。親徳図

244 チヌブクガー [チヌブクガー] 川名【4B右上】

奥集落から奥与那林道(旧ウイバル林道、4B 右中)を約1.2km南下するとハッテン橋(4B 右上)がある。ハッテン橋は「113林班、桑又原」と「113林班、仲田原」の境界を西から東に注ぐ奥川の支流チヌブクガーに架かる橋である。源流を「奥山、56林班」領域にしている川で、奥の地名チヌブクを流れることが名に因む。下流のクワーギマタ(4B 右上)には、昔、チヌブクガーの水で水車を利用したサトーマー(砂糖屋)があった。島田図

245 チヌブク橋 [チヌブクバシ] 史跡名【4B中上】

奥集落から国道58号線(3A 中央、3C 中下)を辺戸方面に向け約1.7km付近に、チヌブクガー(4B 右上)の支流をなす窪地が北側からせまる。その窪地に架かる国道58号線の橋を、チヌブク橋と呼んでいる。「113林班、仲田原」内で、チヌブク領域に架かる橋に因む。手前には三角点(桑又原、96.4m、4B 中上)がある。島田図

246 チヌブク林道 [チヌブクリンドー] 史跡名【4A中下、6A中央】

国道58号線とチヌフク林道の合流点(4A 右上)からチヌブク林道を約2.3km南下した所に記した位置表記。近く北側にあるトーヤマ(4A 中央)開墾への山道がある。奥領域「奥山、56林班」内。島田図

247 チヌブク林道とギヤマ林道の合流点 [-] 史跡名【5A右下】

国道58号線とチヌフク林道の合流点(4A 右上)を約3.8km南下した所にチヌフク林道とギヤマ(宜名真)林道の合流点である。北西方向約460m 点に三角点(奥山南、283.9m、5A 中央)がある。島田図

248 チャープカシクビー [チャープカシ'クビー] 山名【7C左上】

奥領域最南端に位置するスシマタグチ（7C 中央）の北北西方向約 300m にある三角点（伊集湖北、337.1m、7C 中央）から北西に下る尾根がある。その尾根をくだった分枝点に付けられた山名をチャープカシクビーと呼ぶ。ヤナマタガー（6C 左下）の東側に形成され尾根は、トージングマガー（6C 左下）の支流でウブシギ（大杉、6C 左下）のある沢に挟まった尾根の合流点である。島田図

249 チル [チル] 一般地名【4E左中】

奥集落から県道 70 号（2D 中下、4E 左中）を東に約 3km 行った所にチルガー橋（4E 左中）がある。奥領域と楚洲領域の境界付近である。そこに南西側から流れるチルガー（4E 左上）がチルバマ（4E 左中）に河口をなしている。そのチルガーの北側が奥の領域である。また、奥区が管理したイノシシ垣であるウグ垣の終点がチルガー河口である。島田図

250 チルイノー [チルイノー] 海名【4E左中】

奥集落から県道 70 号（2D 中下、4E 左中）を東に約 3km 行った所にチルガー橋（4E 左中）がある。奥領域と楚洲領域の境界付近である。そこに南西側から流れるチルガー（4E 左上）がチルバマ（4E 左中）に河口をなしている。チルバマに発達したのがチルイノーである。チルイノーは本来楚洲領域であるが、1953 年 2 月 28 日の「タチガー会談」で奥の利用が認められた。島田図

251 チルガー [チルガー] 川名【4E左上】

奥集落から県道 70 号（2D 中下、4E 左中）を東に約 3km 行った所にチルガー橋（4E 左中）がある。奥領域と楚洲領域の境界付近である。そこに南西側から流れるチルガー（4E 左上）がチルバマ（4E 左中）に河口をなしている。かつて奥の部落が共同管理していたイノシシ垣があった。ウグザチ（3E 左中）を起点に構築されウグシジ（3D 右下）を經由し、チルガー河口を終点としていた。ウグ（3E 左下）領域に構築されたのでウグ垣として猪台帳がのこるが、その遺構は県道 70 号（2D 中下、4E 左中）の整備などでほとんどが失われている。本来の奥と楚洲の境界。島田図

252 チルガー橋 [チルガーバシ] 史跡名【4E左中】

奥集落から県道 70 号（2D 中下、4E 左中）を東に約 3km 行った所にチルガー橋がある。チルガー（4E 左上）に架けられた橋。その橋の南側に、かつて奥Ⅱ号林道（旧スイ林道、3D 右下）からチルガーに降りてくる山道があり、その名残としてチルガー橋の南側上流付近に、この領域で松を造林した営林署の担当者金城秀一（1911 年生）が架けた橋、いわゆる秀一橋が今も残る。島田図

253 チルグチ [チルグチ] 海名【4E中上】

奥集落から県道 70 号（2D 中下、4E 左中）を東に約 3km 行った所にチルガー橋（4E 左中）がある。その河口の海岸にある津口である。島田図

254 チルグムイ [チルグムイ] 海名【4E左中】

奥集落から県道 70 号（2D 中下、4E 左中）を東に約 3km 行った所にチルガー橋（4E 左中）がある。その海岸の裾礁にできた長さ約 15m 幅 5m 水深約 2m（干潮時）のフムイに因む。イノー公売。島田図

255 チルシジ [チルシジ] 山名【4D中下】

奥集落から県道 70 号（2D 中下、4E 左中）を東に約 3km 行った所にチルガー橋（4E 左中）がある。そこから南西側に尾根がのび、ウニシ（尾西岳、272.3m、4D 左下）の東側を通る奥Ⅱ号林道（旧スイ林道、3D 右下）へと繋がる。島田図

256 チルバマ [チルバマ] 海名【4E左中】

奥集落から県道70号(2D中下、4E左中)を東に約3km行った所にチルガー橋(4E左中)がある。チルガー(4E左上)の河口に拓けた浜の名前。島田図

257 電波中継所 [-] 一般地名【2A中下】

山越の奥-辺戸間の旧道(2A左中、2C中央、3B中上)を辺戸方面に西へ行った辺戸領域「吉波原、53林班」と宜名真領域「吉波原、51林班」の境界線上を通る旧道の南側に建造された電波中継所。島田図

258 トージンガマガー [トージンガマガー] 川名【6C左下】

奥与那林道(旧ウイバル林道、4B右中)を役4.8km南下したところにウイバル林道終点(戦前、6C左中)がある。奥川は上流域でウフグシクガー(6C左中)と呼ばれ、ナグンペーガー(6C中央)、トージンガマガー、ヤナマタガー(6C左下)、シナシジリガー(6B右中)の4つの支流に分岐する。戦前の林道終点から約440m南下したところで、トージンガマガーの支流にはウプシギ(奥領域で一番大きい杉、6C左下)やハラギヤマ(肉桂が多く自生する山、7C中上)がある。奥領域南端部「奥山、58林班と59林班」が境界をなし、三角点(伊集湖北、337.1m、7C中央)の北側。島田図

259 トーミヤーシジ [トーミヤーシジ] 山名【2D中央】

奥湾の東側「115林班、加世原」の北端となるアサチンサチ(2D中上)の南側のシジ(頂)である。奥海岸線で一番見通しがきく場所で、昔、沖縄で飛行機が初飛行したとき、そこに住民が集まった。この辺の岩場にはエンピツギー(オキナワハイネズ)が自生していたが、少なくなっている。島田図

260 トウクドナーカバル [トウクドナーカバル] 一般地名【4C中下】

三角点(尾西岳、272.1m、4D左下)の西「奥山、60林班」の窪地にトウクドナーカ(奥の屋号:徳門仲)が拓いた開墾に因む。奥集落が管理したイノシン垣(東垣第五区)の東側に位置し、開墾の中央部を尾西岳の西裾野であるカイチ(開地、4C右下)を源流とするタチミチガー(4C左下)が西に流れ奥川に注ぐ、イノシン垣と交差するところは川垣となっている。イモやミカン畑があり、シギ(杉)、シンダン(センダン)なども造林された。また戦時中、徳門仲等の避難小屋があった場所でもある。島田図

261 トウクムイェーバテー [トウクムイェーバテー] 一般地名【5B左中】

奥与那林道(旧ウイバル林道、4B右中)を約2.5km南下した林道西斜面に三角点(仲田原、114.6m、5B右上)がある。三角点の西側は奥の領域「奥山、57林班」で二号橋(5B右中)に流れ注ぐハシツタイガー(5B中上)の源流となっている。ハシツタイガーは中流域であるカーミーマタ(奥の簡易水道の取水跡がある、5B中上)で分岐するが、向かって左側の支流を遡上し、再分岐する。右側の支流の上流域がトウクムイェーバテーである。開墾者である徳盛が名に因む。東の尾根にフシンパー(5B中下)と西の尾根にチジンパー(5B左中)に挟まった谷川となっている。島田図

262 トウトクビーガー [トウトウチ'クビーガー] 川名【5E右上】

奥集落から県道70号(2D中下、4E左中)を約4.4km東に行った所、ダナ(田名、5E右上)の次の浜であるハミガーバマに注いでいる川の中流がトウトクビーガーである。トウトチは奥ではソテツの事であるが、名の由来は不明である。ダナバマとハミガーバマの間には三角点(赤崎、44.04m)がある。島田図

263 トウピサガー [トウピサガー] 川名【4A右上】

国道58号線とチヌフク林道の合流点(4A右上)の南側にチヌブクガー(4B右上)の支流であるナンガー(4A中央)が西から東に流れている。その支流に南から注ぎこむ小川がトウピサガーである。川幅が狭く

一歩で渡れることに因む。島田図

264 トーグラバーチ [トーグラバーチ] 一般地名【5C右中】

奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を南に約 3.9km 行った四号橋（5C 左下）の東を流れる奥川に接する「伊江原、県 53 林班、ユンヌヤマ（5C 右中）」内のアハマタガー（5C 中央）の川尻から尾根が東に延びるアハマタシジ（5D 左中）は、三角点（ゆうぐしく、292.7 m、6D 左中）から三角点（尾西岳、272.1m、4D 左下）へ繋がる東脊梁山脈と合流する。その尾根の中間ほどに位置するのがトウグラバーチと言う山名である。由来は不明であるが、その西の窪地はクインチャクブ（5C 右中）で、南側の窪地はアラマタガー（5C 中央）中流域のハンダンミークブ（5C 右中）となっている。島田図

265 トープマミバル [トープマミバル] 一般地名【3B左上】

奥の領域西端「奥山、55 林班」近くの字境界線を通る旧道（辺戸奥線、3B 中上）の三角点（大堂、228.9m、3A 右上）の手前、奥中学校跡地（現琉大「奥の山荘」）入口付近の茶畑は、かつてトープマミ（大豆）を植栽していたことが名に因む。現在は前宮城（奥の屋号）のミカン畑付近。（奥字の議事録より）。島田図

266 トーヤマ [トーヤマ] 一般地名【4A中央】

奥集落から辺戸へ国道 58 号線を約 2.3km 行った所、国道 58 号線とチヌフク林道の合流点（4A 右上）の南側にある尾根の上に拓かれた開墾でミカンやスモモが植栽されている。尾根道は南にのび約 2.3km 付近でチヌフク林道（4A 中下）に繋がっている。「奥山、56 林班」島田図

267 ナーカバンタ [ナーカバンタ] 一般地名【5B右上】

奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を約 2.5km 南下した林道西斜面に三角点（仲田原、114.6 m、5B 右上）がある。林道からブルドーザーで切開いた農道を登り三角点を過ぎ約 260m 点に東側に林道に向けた急な切通しがある。往時に付近から切り出した材木などを滑り落とすバンタであった。小字名「仲田原」に因む名と推測する。その近くに戦後までマチカンデーマチ（5B 右上）とよばれる松の大木 3 本があったと伝承されている。島田図

268 ナガエイバテー [ナガエーバテー] 一般地名【6B右中】

奥集落から奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を 4km ほど南下し木炭集積場跡から、奥川の支流であるマチアラシガー（6B 右上）に下りて約 300m 遡上したところに南側からマチアラシガーに注ぐ小さな沢がある。その一帯を永栄が拓いた畑に因む。また、その沢を登った左側に戦時中に炭焼部隊が木炭を焼いた「畑中隊の炭焼窯跡（6B 右中）」がある。また、窯跡の斜面上方に大きな松の切株がある。その切株は「ウッカーヌピー（大川の樋）伐りだし痕」（6B 右中）で、1995 年に切り倒された松である。島田図

269 ナガサフ [ナガサフ] 海名【1B右中】

奥集落西の海岸「112 林班、世皮原」のユッピーバマ（1B 右下）から北に突き出たユッピーザチ（1B 中上）の海岸線に付いた名称である。戦前の県道（宇座浜 - 奥線）が 1942（昭和 17）年頃ほぼ完成していたが、放置され消えかけている。名の由来は不明。島田図

270 ナガシグチ [ナガシグチ] 海名【2E中央】

奥湾の東側「115 林班、加世原」の東海岸にある岩場で、裾礁が発達して大潮の干潮時には干瀬となるが、外洋からの波が直接打ち上げられ、波にさらされている場所がある。その裾礁が沖に少し開いたところを津口と見かけて、ナガシグチの名に因む。付近にはウプナガシ（2E 中央）やナガシクワー（2D 右上）

の名が残る。島田図

271 ナカシジ [ナカシジ] 山名【3A中央】

奥集落の西側「奥山、55林班」と宜名真領域「吉波原、51林班」にあるウプドー（3A右上）、現琉大「奥の山荘」から西に延びる尾根の名称である。名の由来については「長い尾根」と推察されるが、他にも長い尾根はあるので詳細は不明。尾根は西側で国道58号線（3A中央）が横切り、切通しとなり終わる。島田図

272 ナガシシジ [ナガシシジ] 山名【2E左中】

奥湾の東側「115林班、加世原」の東海岸にある岩場で、裾礁が発達して大潮の干潮時には干瀬となるが、外洋からの波が直接打ち上げられる場所がある。海岸線が北から南に位置している関係で、裾礁部分はいつも波でさらされる長い瀬となっている。その瀬の西側の尾根に因んだ山名と推察する。裾礁ふちにあるナチョーラダー（2E中下）の西側のシジである。親徳図、島田図

273 ナガシクワー [ナガシクワー] 海名【2D右上】

奥湾の東側「115林班、加世原」の最北東端に位置し、裾礁が発達し干潮時には干上る礁嶺の北縁にある南北約40m東西約30mの背の低い小岩のことである。外洋からのからの大波が打ちあがるので、いつも波をかぶる岩場である。ウプナガシ（2E中央）より小さいのでナガシクワーと呼ばれている。親徳図、島田図

274 ナガシクワグチ [ナガシクワグチ] 海名【2D右上】

奥湾の東側「115林班、加世原」の最北東端に位置し、裾礁が発達し干潮時には干上る礁嶺の北縁にある南北約40m東西約30mの背の低い小岩のことである。外洋からの大波が打ちあがるので、いつも波をかぶる岩場である。その西側に裾礁の小さな割れ目があり、その割れ目を津口に例えて、ナガシクワグチと呼ばれている。島田図

275 ナグンペー [ナグンペー] 一般地名【6C右下】

奥領域南端の「奥山、59林班」内で、奥与那林道（旧ウイバル林道、4B右中）とイーI号林道（5E左中）が交差するところからタバクバテー（6C右中）から西に下る尾根の間に挟まった領域である。奥川の支流であるナグンペーガー（6C中央）の水源域となる。1922年度杉造林。1932年度シナギリ、ハゼノキ、楠木、杉、ヒノキ、イヌマキ、イジュ、松を造林。島田図

276 ナグンペーガー [ナグンペーガー] 川名【6C中央】

奥領域南端の「奥山、59林班」内で、奥与那林道（旧ウイバル林道、4B右中）とイーI号林道（5E左中）が交差するところからタバクバテー（6C右中）から西に下る尾根の間に挟まった領域を源流とする川である。奥川の支流ウフグシクガー（6C左中）の上流側の支流で、山名ナグンペー（6C中央）を源流とする事に因む。上流部にはタンナハエーバテー（7C右上）がある。島田図

277 ナグンペーシジ [ナグンペーシジ] 山名【6C中央】

奥与那林道（旧ウイバル林道、4B右中）を約4.8km南下し、ウイバル林道終点（戦前、6C左中）付近で、奥川支流ウフグシクガー（6C左中）がナグンペーガー（6C中央）とビルガー（7C中上）に分岐する。その分岐点付近にタバクバテー（6C右中）から西に下る尾根の途中の山名がナグンペーシジである。島田図

278 ナチョーラダー [ナチョーラダー] 海名【2E中下】

奥湾の東側「115 林班、加世原」の東海岸に裾礁が発達し、その縁に南北の長さ約 40m、幅約 10m の低い岩がある。外洋からの波が直接打ち上げられるので、大潮の干潮時でも波を被ることがある。岩の上部は平たくなり少々窪んでいるので潮水は干上ることがない、この環境に適応してナチョーラ（マクリ、海人草）が自生している。窪みが田圃を思わすことに因む。島田図

279 ナッスダー [ナッスダー] 水田名【2C右下】

奥湾の東「114 林班、楚意原」の中央部をながれるスイガー（3D 左上）の南側の小さな田圃。苗代としたのに因む名。親徳図

280 ナナチグス [ナナチグス] 史跡名【3C右下】

奥集落の東側の山で奥領域「114 林班」の小字名多和田と菊連の東端が接する楚洲領域「伊江原、県 52 林班」内に位置する。奥川の支流であるヒクリンガー（3C 中央）がナンチンムイ（奥集落東側の丘で標高 173m、3C 右中）の南側を小字名多和田と菊連の境界線上を東に遡上し、奥集落が管理していたイノシシ垣（東大垣二区と三区）の結合点を南に折れ曲がり、三角点（尾西岳、272.1m、4C 左下）の北側領域を源流として流れをなしている。イノシシ垣を横切る所では落差 5m 程の滝を利用した川垣が構築されている。そこを南に遡上したところがナナチグスと呼ばれる所である。名の由来については不明であるが、戦時中に奥集落の住民のほとんどが避難した場所であり、川沿いには避難小屋の痕跡が多く残っている場所である。1945 年 8 月 2 日に部落の代表者が集まり、8 月 3 日に降伏することを決議した場所でもある。ユーカリの太木 3 本もある。住民が集会をしたとされる広場は、戦後の一時期田圃が拓かれていた。島田図

281 ナハイノー [ナハイノー] 海名【2C左上】

奥の西海岸「112 林班、小字名世皮原」にあるフパダチバマ（2C 左上）の中程にある礁池の名前である。またフパダチイノーとも呼ばれている。イノー公売。島田図

282 ナハダー [ナハダー] 水田名【4B右上】

奥集落から奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）にあるハッテン橋（4B 右上）を過ぎた付近の林道と奥川の間に拓けた田圃のこと。名の由来は不明である。現在は奥川の大改修工事により田圃の面影はない。親徳図

283 ナハドー [ナハドー] 一般地名【3B右上】

奥集落からシーバーミチ（3C 左上）を登り、ヤッチェーイシ（3C 左上）を過ぎた所から段々畑の上に張り巡らされた部落が管理していたイノシシ垣（西大垣第三区）との間に位置する領域をナハドーと呼んでいる、詳細は不明。放置されているため往時の段畑や棚田の面影はない。島田図

284 ナハヤマガー [ナハヤマガー] 川名【4D中上】

奥集落から県道 70 号を約 1.7km 東に行った所に、スイヌチジ（スイ林道と県道 70 号の合流点、3D 中央）がある。そこからスイ林道に入り約 400m 行った所に暗渠があり、南西方向からダヒブガー（3E 左中）の上流域をナハヤマガーと呼んでいる。由来はこの一帯をナハヤマ（中山）と呼ぶことに因む。東側の尾根はナハヤマシジ（4D 中上）がある。ナハヤマガー流域は、戦時中に沖縄島中部勝連方面からの避難民の避難小屋があった。1958 年にはナハヤマガーの豊富な水をスイ（2D 左下）の田圃に送水するためコンクリート造りのピー（樋）が架設され、現在もスイ林道沿いに残っている。島田図

285 ナハヤマシジ [ナハヤマシジ] 山名【4D中上】

奥集落から県道 70 号を約 1.7km 東に行った所に、スイヌチジ（スイ林道と県道 70 号の合流点、3D 中央）

がある。そこからスイ林道に入り約 400m 行った所に暗渠があり、南西方向からダヒブガー (3E 左中) の上流域がナハママガー (4D 中上) である。由来はこの一帯をナハママ (中山) と呼び、東側尾根の地名としてナハママシジの名が残る。楚洲領域「伊江原、県 52 林班」内。島田図

286 ナハンパー [ナハンパー] 山名【5B中央】

奥与那林道 (旧ウイバル林道、4B 右中) を約 2.5km 南下した林道の西斜面に三角点 (仲田原、114.6 m、5B 右上) がある。三角点の西側は奥の領域「奥山、57 林班」で二号橋 (5B 右中) に流れ注ぐハシツタイガー (5B 中上) の源流となっている。ハシツタイガーは中流域であるカーミーマタ (奥の簡易水道の取水跡がある、5B 中上) で分岐する。分岐点から南西方向に尾根が伸び、チヌフク林道と宜名真林道と合流点 (5A 右下) の南側へと続いている。その尾根にカーミーマタの分岐点から登りかけた最初の緩やかなシジ (頂) の手前の坂道をナハンパーと呼んでいる。また、尾根はチジンパー (5B 左中)、ハンナイヤキ (5B 左中) と南につらなる。島田図

287 ナビクブヌハーンクワー [ナビクブヌハーンクワー] 川名【2C中下】

奥集落の北側で、奥小学校の南側に西側から小川が注いでいる。シヌグシク (2C 中下) の北側の窪地で、スグラ (2C 左下) を源流としている小川をナビクブヌハーンクワーと呼んでいる。名の由来は不明である。島田図

288 ナンガー [ナンガー] 川名【4A中央】

奥集落から辺戸方向へ約 2.3km の国道 58 号線から琉大「奥の山荘」への入口 (3A 右下) の南側にトーヤマ (4A 中央) 開墾につらなる小道がある。山名「奥山、56 林班」の西側で宜名真領域の「49 林班」「50 林班」の境界線の東を北に流れるチヌブクガー (4B 右上) の支流がナンガーである。名の由来は不明である。上流にはウドウンエーバテー (4A 中下) がある。親徳図、島田図

289 ナンガー橋 [ナンガーバシ] 史跡名【4B左上】

奥集落から国道 58 号線を辺戸方面へ約 2km 行った所にある橋の名前である。チヌブクガー (4B 右上) の支流のナンガーに架かることに因む橋名である。島田図

290 ナンチンパー [ナンチンパー] 一般地名【3C右上】

奥集落の東にそびえるナンチンムイ (173m、3C 右中) の西斜面「114 林班、多和田」に位置する。マンカー (3C 中上) の尾根部にある坂の名前となっているが道ではなく、ここでは斜面を意味する。近くに畑を拓いた跡はない。親徳図、島田図

291 ナンチンムイ [ナンチンムイ] 山名【3C右中】

奥集落の東側の山で、114 林班内の小字楚意原と多和田にまたがる標高 173m の丘である。奥集落が管理していたイノシシ垣 (東大垣第二区) 内に位置する。1964 年頃まで裾野に段畑が開き畑以外はヤマダヒ (リュウキュウチク) が生茂り、茅葺屋根の茅を刈り取る場所であった。またタヒンネー (芋折目、タードローシ (田倒) に植えた芋の収穫を祝う 11 月の行事) には、子供たちがギマ (ギーマ) を食べに行く楽しい場所であった。いまは、段畑も消えギマも消え、鬱蒼とした森に覆われている。イビガナシ (3C 中上) から登り、フシクブ (3D 左中) のイノシシ垣を越えてウニシ (尾西岳、272.3m) へと繋がる尾根道があった。また、尾根の西側にはヒクリンガー (3C 中央) があり、その上流側のナナチグス (3C 右下) には、戦時中の避難小屋跡が今も残る。島田図

292 ナンヨーバル [ナンヨーバル] 一般地名【3D中央】

奥集落から県道 70 号を約 1.7km 行った所にスイヌチジ (スイ林道と県道 70 号の合流地点、3D 中央)

に到着する。そこから林道に入り 200m 付近にコンクリート造りのピー（樋）が架かったダヒプガー（3E 左中）の中流がある。その一帯をナンヨーバルという。戦後ナンヨウ（南洋）から引き揚げてきた人たちが拓いた田畑に因む。1960 年頃まで、芋畑と湿田があった。放置され深い森に覆われている。島田図

293 二号橋 [ニゴーバシ] 史跡名【5B右中】

奥集落から奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を約 2.8km 行った所に架かる橋の名前。奥川の支流ハシッタヒガー（5B 中上）が西側から滝をなして落ちる所に架かる橋で、奥川の中流域であるウプダーガー（5B 右上）へと流れ落ちていく。上流には、奥の簡易水道の取水場としていたカーミーマタ（5B 中上）がある。島田図

294 ヌガンナー [ヌガンナー] 水田名【3C中央】

奥集落から国道 58 号線を南下し、奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）の分岐点付近から林道を南に行った所の最初のカーブがウェーダヌサチで、そこを起点に西側に尾根を形成しホーグ（3C 左中）へとつらなる。そのカーブ付近から次のカーブとなるワタンナガーグムイ（3C 左下）までの奥川の西側沿いに広がるかつての田園地帯である。三角点（親田原、5.8m、3C 中下）はヌガンナーの東端に位置する。かつて足踏み水車を利用し、奥川から水を汲みあげ、ヌガンナーターブック（ヌガンナーの田圃）へ導水した。親徳図

295 ヌンヂー [ヌンジー] 水田名【3C中央】

部落の東側の田圃で、サバンナー（3C 中央）とピドゥムイ（3C 中央）の間にある田圃。夕方小雨が降ったときミヤゲムイ（3C 左中）からヌンヂー（虹の古語）が現れた所に因む。親徳図

296 ヌンドゥルチダー [ヌンドゥルチダー] 水田名【4B右上】

奥集落から奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を約 1km 行った所に、奥川の支流チヌプクガー（4B 右上）に架かるハッテン橋（4B 右上）がある。チヌプクガー（4B 右上）の南側に田が拓け、イチリンパナ（4B 右中）の北東側裾野に構築された旧イノシシ垣に沿った田圃であった。現在はミカン畑となっている。神地で「のろくむい地」の一つである。現在、奥集落有地。田圃の水はチヌプクガー（4B 右上）からピー（樋）で水を引いていた。親徳図

※のろくむい地はノ口に与えられた土地のこと。

297 ハートウイグムイ [ハートウイグムイ] 川名【4B左下】

国道 58 号線とチヌフク林道の合流点（4A 右上）から約 950m 南下した所で、チヌプクガー（4B 右上）本流と東側のウチバルカイクン（4B 中下）から注ぐマシガー（4B 左下）の合流点のクムイ（淵）に、パンなどの水鳥が多くいた事に因んだ川名。「奥山、56 林班」領域内。島田図

298 ハーバイガマ [ハーバイガマ] 一般地名【5C右下】

奥集落から奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を約 3.9km 南下した四号橋（5C 左下）付近、奥川の支流アラマタガー（5C 中央）の中流域にハーバイ（コウモリ）がすんでいるガマ（穴）があることに因む地名。楚洲領域「伊江原、県 53 林班、ユンヌヤマ（5C 右中）」領域内。1912 年度楠木を造林。島田図

299 ハーラヤキ [ハーラヤキ] 史跡名【3B右上】

奥集落の西側「113 林班、辺野原」と「奥山、55 林班」の接する付近で、旧道（3B 中上）とシーバーミチ（3C 左上）が合流する付近で、明治の末頃、瓦を焼いたことに因む地名。島田図

300 ハーランチビ [ハーランチビ] 川名【3C中上】

奥集落内東側を国道58号線沿いに奥川が奥湾に向けて北に流れている。そこへ支流であるアンガー(3B右上)の下流であるハーランクワ(集落内を流れるアンガーの名称で、ウッカー(大川)と対置した小川の名称)が合流する所の地名。現在の奥集落集落センター東側に位置する。かつて合流点付近は、浅瀬でイブ(砂州)を形成していたことから、豚や山羊を屠殺する場で、牛や馬を浴びせたりする場所でもあった。沖縄の日本復帰後の奥川大河川改修工事で失われた。島田図

301 ハーンチビーグチ [ハーンチビーグチ] 海名【2C左上】

奥湾の西にあるフパダチバマ(2C左上)の注ぐフパダチガー(2C左中)の河口が礁嶺の開けたところクチ(津口)に注ぐことに因む。親徳図、島田図

302 ハーチビイプ [ハーンチビイプ] 海名【2C右下】

奥川河口にできたイブ(砂州)のこと。この砂州はかつて西側の小学校付近から発達し東に伸びた砂嘴(さし)である。メーバマ(前浜、2C中下)の海岸とソーマジー(2C右下)を造り、南側にガタ(潟、2C右下)を造った砂嘴の東端で奥川河口の砂州を構成した。かつてはこの砂州はアブシバレー(五穀豊穡を祈願する奥の行事)の会場となり、相撲やウシデークをしたりし盛り上げた場所である。沖縄の日本復帰後に行われた奥川の河川大改修工事のため流れが変わり、スシバマ(2D左下)のタカコウジ(奥川河口東側の楚意護岸、1931(昭和6)年竣工)の西側に新たな砂州ができ、かつてのタカコウジは防風林に覆われている。島田図

303 ハイノーマー [ハイノーマー] 史跡名【3B右中】

奥集落の南側「113林班、親田原」領域にあるヤマジー(3B右中)を奥区が管理したイノシシ垣(西大垣第三区)が横切る。その場所付近に明治生まれの紡績婦りの女性たちが満月の夜に集い、ハイノ一踊りを舞い明かしたことに因む地名。西側の丘陵(約190m)はシヌグ(奥の伝統行事。旧盆以後の亥の日に、1年おきに行われる)のとき部落内を練り回り悪霊をお祓いするのに使用するシバヒ(イヌガシ)を採る場所の一つである。現在はミカン畑。島田図

304 ハカマハイヤキ [ハカマハイヤキ] 山名【5D左上】

奥与那林道(旧ウイバル林道、4B右中)を約3.9km南下した四号橋(5C左下)付近、奥川の支流であるアハタマガー(5C中央)の中流域で支流の合流点から東に伸びる尾根がある。尾根の東端で三角点(ゆうぐしく、292.7m、6D左中)から三角点(尾西岳、272.1m、4D左下)に繋がる東側脊梁山脈の尾根にあるタミチグムイワハイ(5D左上)で合流する。その西側に下る尾根についた山名をハカマハイヤキと呼ぶが詳細不明。楚洲領域「伊江原、県53林班、ユンヌヤマ(5C右中)」。島田図

305 ハクソーチ [ハクソーチ] 一般地名【3D左上】

奥湾の東側にある「114林班、楚意原」にある畑の名である。隣にヤクチ(役地、3D左上)があるので、ハクソー(百姓)に由来するのではと推察される。百姓地は百姓が開墾した土地であったが、按司が発生するとその領有地となり、「御授け地」として収益を授ける土地となった。近世には地割性が適用され、売買や質入れが禁ぜられていた(国頭村史、123～129頁)。親徳図

306 ハシッタヒガー [ハシッタヒガー] 川名【5B中上】

奥与那林道(旧ウイバル林道、4B右中)を約2.9km付近にある二号橋(5B右中)に注ぐ川名前である。名の由来は不明である。源流域は「奥山、57林班」に位置し、上流にはカーミーマタ(5B中上)やアボーガー(5B中央)の川名が残る。親徳図、島田図

307 畑中隊解散の場 [-] 史跡名【4D左下】

ウニシ（尾西岳）の南東側で、三角点（ゆうぐぐしく、292.7m、6D 左中）から三角点（尾西岳、272.1m、4D 左下）に繋がる東側脊梁山脈からチルシジ（4D 中下）が分岐する。チルシジを奥Ⅱ号林道（本稿 111）が切通した付近で、戦時中に畑中部隊（炭焼部隊）が解散した場所と伝承されている。島田図

308 畑中隊の炭窯跡 [-] 史跡名【6B右中】

奥集落から奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を 4km ほど南下し木炭集積場跡から、奥川の支流であるマチアラシガー（6B 右上）に下りて約 300m 遡上したところに南側からマチアラシガーに注ぐ小さな沢がある。その沢付近はナガエーバテー（6B 右中）の名が記されている。そのナガエーバテーの領域内で、戦時中に炭焼部隊が木炭を焼いた畑中隊の炭焼窯跡がある。炭焼部隊の工夫募集係は宮城安将（1916 年生）であった。島田図

309 ハタババル [ハタババル] 海名【2D左下】

奥湾に注ぐ奥川の河口の東側にあるスシバマ（2D 左下）の海岸線で、干潮時に干上る部分一帯の地名。島田図

310 ハッテン橋 [ハッテンバシ] 史跡名【4B右上】

奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を約 1km 南下した所で、奥川の支流であるチヌブクガー（4B 右上）に架かる橋の名前である。ウイバル林道（1933 年着工）第 1 期工事で架けられた橋、豊富な林産物を切だし部落の発展を祈念して、上原直次（大首里屋、1882 年生）が命名した。奥川にチヌブクガー（4B 右上）が合流する下側のアムトゥ（川の堤防）に大きなサガリバナの樹があり、夏の花期になると夜咲いた花が川面に落ち芳香を放つ中を、仕事の合間に泳ぎ回って涼と香りを楽しんだ思い出がある。島田図

311 ハラギヤマ [ハラギヤマ] 山名【7C中上】

奥領域最南端「奥山、59 林班」内にある三角点（伊集湖北、337.1m、7C 中央）の東谷で、トゥージンガマガー（6C 左下）の上流域に、ハラギ（肉桂）の大木が林立していることに因む。島田図

312 ハラミ [ハラミ] 一般地名【2D中央】

奥湾の東側「113 林班、加世原」領域内で、県道 70 号（2D 中下、4E 左中）を約 470m 地点から海岸に降りるハラミミチ（2D 左中）がある。そこを北側に約 200m 行くと小さな浜がある。そこに注ぐ小川がハラミガー（2D 中央）である。その小川沿いに拓けた湿田付近の総称をハラミと呼んでいた。現在は上流域に牧場ができ、そこへの道が開けたことから面影はない。島田図

313 ハラミガー [ハラミガー] 川名【2D中央】

奥湾の東側「113 林班、加世原」領域内で、県道 70 号（2D 中下、4E 左中）を約 470m 地点から海岸に降りるハラミミチ（2D 左中）がある。そこを北側に約 200m 行くと小さな浜がある。そこに注ぐ小川をハラミガーと呼ぶ。ハラミガーの河口の小さな浜にはスーイシ（奥の呼名で、軟らかい赤色の堆積岩で、カマドの材料や火を使う所に型取りをして使用した石材）が多く、浸食地形を形成している。その岩の上にはエンピツギー（オキナワハイネズ）が自生していた。島田図

314 ハラミミチ [ハラミミチ] 山名【2D左中】

奥湾の東側「113 林班、加世原」領域内で、県道 70 号（2D 中下、4E 左中）を約 470m 地点から北側にある海岸にぬける小道のことをハラミミチと呼んだ。現在は拡張され車も通る大きな道となっている。島田図

315 ハルー [ハルー] 一般地名【3D中上】

奥湾の東側「113 林班、加世原」領域内の北側をハルーと呼んでいる。旧 16 林班。中学生がマチナバ（ハツタケ）を焼いて食べようと火を起こしたのが原因で、山火事となった。山火事後の 1942（昭和 17）年度に松を造林した。島田図

316 ハルーガマ [ハルーガマ] 一般地名【5B右上】

奥川中流域、「114 林班、菊連」のウプダーガー（5B 右上）に一号橋（5B 右上）からの支流が注ぐ、この合流点の東斜面に奥区が管理したイノシシ垣（東大垣六区）の南側についた地名で、詳細は不明。昔、アラジバル（明替畑）を拓いた所。この付近はウプダーガーの西にウイバル林道が通り、東にアラジバルが斜面をなし、やまびこが（こだま）がよく響く場所であった。子供たちが山への行き来に「ヤッホー」と声かけると「ヤッホー」と返ってくるのを喜び、響かせた楽しい場所であったが、現在は森林に覆われやまびこも消えた。島田図

317 ハندانミークブ [ハンダンミー'クブ] 山名【5B右中】

奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を約 3km 南下した所で、三号橋（5B 右中）とガンバ（5B 右中）の間にある南側窪地で、蔓性植物の茂った窪地が名に因む。「奥山、57 林班」。ウマンナガニ（5B 右中）の東側の窪地。島田図

318 ハندانミクブ [ハンダンミー'クブ] 山名【5C右中】

奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を約 4km 行った所の四号橋付近を流れる奥川に、東側の楚洲領域「伊江原、県 53 林班、ユンヌヤマ（5C 右中）」から注ぐアラマタガー（5C 中央）の中流域に、南からハーブイガマ（5C 右下）からの支流が注ぐ。その北側にある窪地をハンダンミクブと呼んでいる。蔓性植物の茂った窪地。親徳図、島田図

319 ハンナイヤキ [ハンナイヤキ] 一般地名【5B左中】

「奥山、57 林班」領域の西側。西銘岳（420.1m、6A 右下）から北側に延びる奥の西脊梁山脈を通るチヌブク林道の宜名真林道合流点（5A 右下）の北東側からカーミーマタ（5B 中上）に下る尾根の標高約 200m 付近の山の名前である。時代は不明であるがハンナイ（雷）が落ちて山が焼けた事に因む。島田図

320 ハンノキクブ [ハンノキ'クブ] 山名【3D左下】

楚洲領域「伊江原、県 52 林班」の西側に位置する。奥区が管理したイノシシ垣（東大垣第二区）を横切るスイガー（3D 左上）の源流付近の窪地の山名で、ハンノキを造林したことに因む。タカバテージジ（3D 左中）とフシクピーシジ（3D 左下）に挟まった北東に開けた窪地。島田図

321 ヒクリン [ヒクリン] 水田名【3C中央】

奥の小字名「114 林班、菊連」は、奥川沿いに東側丘陵の裾野を南に帯状に延びる領域内の北側に位置し、奥川の支流であるヒクリンガー（3C 中央）が注河口付近の地名である。また、奥集落発祥の一つの場所と伝承されているが、それを裏付ける資料はない。親徳図

322 ヒクリンガー [ヒクリンガー] 川名【3C中央】

奥の小字名「114 林班、菊連」の北側で、ピドゥムイ（3C 中央）に流れ込む奥川の支流の名前である。上流域にはナナチグス（3C 右下）があり、戦時中に奥住民の避難小屋跡がある。島田図

323 ヒサヌナンタルグチ [ヒサヌ ナンタルグチ] 山名【6C中央】

奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を約 4.3km 行った所に五号橋（6C 右上）がある。その東側にあるカマムラヤマ（6C 左上）に三角点（奥川、116.1m、6C 左上）がある。「奥山、59 林班」の北西端である。カマムラヤマから尾根が南東へと連なり、三角点（ゆうぐしく、292.7m、6D 左中）の南西側を通るイー I 号林道（5E 左中）付近にあるタバクバテ（6C 右中）へ繋がる。その尾根の下側についていた山名がヒサヌナンタルグチである。上の方にはウイヌナンタルグチ（6C 中央）がある。名の詳細については不明。親徳図、島田図

324 ヒサントー [ヒサントー] 一般地名【2B右下】

奥集落の西側にあるシーバーミチ（3C 左上）を登り旧道（辺戸奥線、2A 左中、2C 中央、3B 中上）と交差点に達する。この交差点から旧道は南西へ登り坂となる。その坂道をシーバーヌチジ（頂）と呼び、部落を見下ろす景観ポイントである。そこは奥区が管理したイノシシ垣（西大垣第二区と三区）の結合点でもあった。旧道工事で切堀され法面上と下にイノシシ垣が延びている。このシーバーヌチジとシーバーミチとの交差点から西側の窪地は湿田や畑が拓かれ、ターンクビー（2B 右下）方面への小道があった。この窪地一帯をヒサントーと呼ぶ。シーバーヌチジを登った南側に位置するウイントー（2B 右下）と対比した地名である。1972 年の復帰前後に、シーバーミチと旧道の交差点から農道が西に開設され、アプトー（2B 中上）やヤマクビー（2B 左下）へと続いている。この一帯は農道と牧場用地として整備され、往時の面影はない。「112 林班、世皮原」の南東端。島田図

325 ピダヒサ [ピダヒサ] 水田名【3C左上】

奥集落の西の隅にある茶工場付近を流れるアンガー（3B 右上）とシーバーミチ（3C 左上）の棚田をなした湿田一帯の呼名である。名称の由来については不明。島田図

326 ピットルグス [ピットルグス] 山名【3D中下】

楚洲領域「伊江原、県 52 林班」内にある。県道 70 号（2D 中下、4E 左中）を約 1.7km 東に行った所にスイヌチジ（スイ林道と県道 70 号の合流点、3D 中央）がある。そこからスイ林道に入り約 400m 行った所に暗渠があり、小川の水は林道下にあるナンヨウバル（3D 中央）で、ダヒプガー（3E 左中）の支流がナハヤマガー（4D 中上）と合流する。この暗渠の上には、1958 年にナハヤマガーの豊富な水をスイ（2D 左下）の田圃に送水するためコンクリート造りのピー（樋）が架設され、現在もスイ林道沿いに残っている。小川の東側にあるナハヤマガー本流との間で、尾根が立ち上がり、ウニシ（尾西岳、272.1m、4D 左下）方面へと繋がる。この尾根の立ち上がり付近をピットルグスと呼んでいる。名の詳細については不明。楚洲領域「伊江原、県 52 林班」の北側に位置する。島田図

327 ピドゥムイ [ピドゥムイ] 川名【3C中央】

奥集落の入口、国道 58 号線の東側に「奥ヤンバルの里」がある。そこから奥川に架かる橋を渡った所がピドゥムイ（辺戸森）である。この橋の名前を奥の人たちはピドゥムイ橋（辺戸森橋）と呼ぶが、河川工事を竣工して橋を架けた沖縄県は「奥名橋」と命名している。ピドゥムイはウクガー（奥川）本流とヒクリンガー（3C 中央）が合流し、奥領域では水量が多い所である。かつて、ピドゥムイにピルムイウエーク（辺戸森の堰）をつくり、下流域に広がるサバンナー（3C 中央）を始めとした、奥の田園地帯への灌漑用水を送り込む取水場所であった。1969 年 10 月の豪雨により、奥川沿いの田園帯は土砂に覆われ水田は消えた。その後、1970 年から 2 期 12 年に及ぶ奥川の大改修工事で、奥川は掘り込まれ 2 面コンクリート張の直線の川にかわり、往時の面影と水生動物の多くが失われた。ピドゥムイは、もともと隣の辺戸区の所有地であったが、翁長林八（奥の屋号：翁長小、1892 年生）が買い取ったとの伝承がある。ウエーク（堰）があった頃、ピドゥムイとウンダーマタ（3C 中下）は中学生たちの水浴びの場で、小学校生の水浴び場はウッカー（3C 中央）とイビガナシ（3C 中上）であった。島田図

328 ヒナフシ [ヒナフシ] 山名【5C左中】

奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を約 3.2km 行った所の奥川中流の北側斜面で、「奥山、57 林班」の北端にある日当たりのいい南斜面がヒナフシである。そこから北側にある奥の小字「114 林班、菊連」の南端部に位置するフィジ（5C 左上）に繋がる道がある。奥川下流域は奥湾河口からシブギントー（4C 左下）まで、落差のない緩やかな流れをなし、シブギントーからヒナフシまでの間はウプダーガー（5B 右上）と呼ばれる落差の高い急流域である。ヒナフシを越え五号橋（6C 右上）付近まで落差の小さい緩やかな流れをなしている。かつてウイバル林道ができる 1934 年まで、奥川の上流域から生産された林産物は奥川を利用して流しヒナフシで収集し、牛に運ばせてフィジを越えシブギントー（4C 左下）に集積し、大雨の増水を利用して奥川河口のタムンダー（2C 右下）まで流し収集したと言われる。ヒナフシは楚洲領域である「伊江原、県 53 林班、ユンヌヤマ（5C 右中）」の北西端と接する。ヒナフシの由来は不明。島田図

329 ピヌ [ピヌ] 一般地名【3C中上】

奥集落の北西側斜面で「113 林班、辺野原」の仲程西に位置する。小字名「辺野原」が地名に因む。大正時代の頃まで、尾根から木を滑り落とすパンタあり。また、奥集落発祥の一つの場所と傳承されているが、それを裏付ける資料はない。島田図

330 ピヌガー [ピヌガー] 川名【3C中上】

奥集落の北西側斜面で「113 林班、辺野原」の仲程西に位置する。小字名「辺野原」が地名に因む。そこに西側の窪地から小川が流れている。この小川の名がピヌガーである。この一帯は部落より少々高い所にあるため、アンガー（3B 右上）から送水される簡易水道は利用できないため、ピヌ付近（4 番組や 5 番組）の山手の住民はピヌガーの水を生活用水として利用した。その名残のコンクリート造りの水タンクが残る。島田図

331 ヒヤギマタ [ヒヤギマタ] 川名【6C左上】

奥集落から奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を約 4km 南下した五号橋（6C 右上）手前に東側から注ぐ奥川の支流のウチンヒチガー（6C 左上）と合流する所である。奥の山名「奥山、59 林班」と楚洲の領域である「伊江原、県 53 林班、ユンヌヤマ（5C 右中）」との境界に位置する。1934（昭和 9）年に完成したウイバル林道 1 期工事の終点がヒヤギマタである。南側のミカン畑には三角点（奥川、116.1m、6C 左上）が設置され、林道下には金城秀一（1911 年生）が植栽したといわれるユーカリの巨木がある。島田図

332 苗圃（糸満小アタイ） [イスマングワーアタイ] 一般地名【3C左上】

奥集落の南裾野にある小さなアタイ（菜園）がある。字奥 22 番地である。所有者はイスマングワー（奥の屋号：糸満小）であることからイスマングワーアタイとも呼ばれている。シギ（杉）、ソーシジ（ソウシジュ）、クスヌチ（楠木）、イジュー（イジュ）などの苗床とした畑（奥集落議事録）。島田図

333 ビルガー [ビルガー] 川名【7C中上】

奥領域「奥山、59 林班」内で、奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）とイー I 号林道（5E 左中）が合流地点の西側の谷を流れるナグンペーガー（6C 中央）の支流をビルガーと呼んでいる。名の由来について詳細不明。島田図

334 ビルクンドーマ [ビルクンドーマ] 海名【2D中上】

奥湾の東側「115 林班、加世原」の北に位置するアサチンサチ（2D 中上）の西側のイノー（礁池）の裾礁が沖側の礁嶺に繋がるイノー付近を、ビルクンドーマと呼んでいる。名の由来について不明。イノー公売。島田図

335 ファイジ [ファイジ] 山名【5C左上】

奥集落から奥川沿いの東岸を遡上し約2km地点で護岸道は行き止まりとなる。近くにはウプダーガー(5B右上)下流に造られた砂防ダムがある。かつて対岸はシブギントー(4C左下)と呼ばれ、そこから奥川を渡り、シバシジガー(4C左下)との合流点からファイジを通りヒナフシ(5C左中)への山道が続いていた。河川工事で深く掘られ両面をコンクリートで固められた奥川は渡ることができない。奥の小字名「114 林班、菊連」の最南端で北に向いた斜面をファイジ(越地)と呼ぶ。

奥川は奥湾河口からシブギントーまで、落差のない緩やかな流れをなし、シブギントーからヒナフシまでの間はウプダーガーと呼ばれる落差の高い急流域である。ヒナフシを越え五号橋(6C右上)付近まで落差の小さい緩やかな流れをなしている。

かつてウイバル林道ができる1934年まで、奥川の上流域から生産された林産物は奥川を利用して流しヒナフシで収集し、牛に運ばせてファイジを越えシブギントーに集積し、大雨の増水を利用して奥川河口のタムンダー(2C右下)まで流し再び収集したと言われる。ヒナフシは楚洲領域である「伊江原、県53林班、ユンヌヤマ(5C右中)」の北西端と接する。名前の由来は林産物を山越で運んだ事に因む。奥区が管理したイノシシ垣(東垣第五区と六区)があり、その外側にウンブラグワー(奥の屋号:上之大屋小)とウンニー(奥の屋号:上根)の開墾跡があり、それぞれの外側に個人が構築したイノシシ垣がある。ウンブラグワーのイノシシ垣内には落し穴があり、畑跡にはミカンの木、斜面にはイジュなどの造林跡もある。またウンニーのイノシシ垣内には、戦前まで与論島の人たちを雇い住まわせ畑を維持管理した人々の住居や豚小屋、牛小屋、山羊小屋などの痕跡がある。イノシシ垣と開墾での生活遺構を体験できるポイントとなっている。東大垣第六区の起点でもある。島田図

336 ファイジガー [ファイジガー] 川名【5C左上】

奥集落から奥川沿いの東岸を遡上し約2km地点で護岸道は行き止まりとなる。近くにはウプダーガー(5B右上)下流に造られた砂防ダムがある。かつて対岸はシブギントー(4C左下)と呼ばれ、そこから奥川を渡りシバシジガー(4C左下)との合流点からファイジ(5C左上)やヒナフシ(5C左中)への山道が続いていた。河川工事で深く掘られ両面をコンクリートで固められた奥川は渡ることができない。奥の小字名「114 林班、菊連」の最南端で北に面した斜面をファイジと呼び、そこを流れる小川をファイジガーと呼んでいる。部落が管理していたイノシシ垣の東大垣第五区の終点がファイジガーであった。島田図

337 ファイジミチ [ファイジミチ] 山名【5C左上】

奥集落から奥川沿いの東岸を遡上し約2km地点で護岸道は行き止まりとなる。近くにはウプダーガー(5B右上)下流に造られた砂防ダムがある。かつて対岸はシブギントー(4C左下)と呼ばれ、そこから奥川を渡りシバシジガー(4C左下)との合流点からファイジ(5C左上)を通りヒナフシ(5C左中)への山道が続いていた。ファイジを通ることからファイジミチの名に因む山道の名。島田図

338 フーンクブ [フーンクブ] 山名【2D右下】

奥湾の東側に位置する「115 林班、加世原」の東にあるウトウミジ(2E左下)海岸に、南西側から小川が注ぐ。その河口近くにあるダラギクブ(3D右上)の北東側に位置する小さな窪地をフーンクブと呼ぶ。名の由来は不明。親徳図、島田図

339 フガンチビ [フガンチビ] 川名【3D左上】

奥湾の東側に位置する「114 林班、楚意原」の南側のウガンバー(3C右上)からスイガー(3D左上)の支流が、麓の田圃に注ぐ川尻のこと。小川の川尻が名に因む。島田図

340 プカマシ [プカマシ] 水田名【2D左下】

奥湾の東側に位置する「114 林班、楚意原」に拓けたスイ(2D左下)の東側の湿田のこと。名の由来

は不明であるが、柴門（奥の屋号）の田には底なし（アブ）があった。トーウナジ（タウナギ）が多かった。現在はその面影はない。親徳図

341 フシクビーシジ [フシクビーシジ] 山名【3D左下】

奥集落から県道70号（2D中下、4E左中）を約1.7kmに位置するスイヌチジ（スイ林道と県道70号の合流点、3D中央）で、奥区が管理する東大垣第1区と2区に分岐点となり、林道開設までビービー垣（イノシシ垣から外への出入りに設けられた扉で、開閉時にビービーと音を発したことに因む）が設置されている。その分岐点から南に連なる尾根はウニシ（尾西岳、272.1m、4D左下）へと連なる。その途中の尾根にフシクビーシジの名が残る。親徳図、島田図

342 フシクブ [フシクビー] 山名【3D左中】

奥集落東にあるナンチンムイ（標高173m、3C右中）の南東端は「114林班、楚意原と多和田原」の境界線が、楚洲領域「伊江原、県52林班の北西端と境界をなす。その境界線上には奥区が管理したイノシシ垣（東大垣第二区）が東西に構築されているところである。ナンチンムイからの尾根道はイノシシ垣に交差する付近で窪地を掲載している。スイガー（3D左上）とヒクリンガー（3C中央）の分水嶺でもある。イノシシ垣を横切って尾根道が南に延びて、ウニシ（尾西岳、272.1m、4D左下）に続いている。イノシシ垣と尾根道が交差する付近の窪み一帯をフシクブと呼んでいる。島田図

343 プシマ [プシマ] 水田名【4B・4C境界上方】

奥与那林道（旧ウイバル林道、4B右中）を約1km南下した所で、奥川の支流であるチヌブクガー（4B右上）にハッテン橋（4B右上）が架かる。その手前のウイバル林道沿いに拓いた田圃をプシマと呼んでいる。名の由来については不明。豊かな田圃であったが、1959年から始まった琉球政府道1号線（現国道58号線（3A中央、3C中下））のターマタ（3A中央）経由の工事中に大雨による土砂災害で田圃は失われた。現在は面影もない。親徳図

344 フシクブ [フシクブ] 山名【3D左下】

楚洲領域「伊江原、県52林班」にあるウニシ（尾西岳、272.3m、4D左下）の北側を源流とするスイガー（3D左上）の上流域にある窪地のことをフシクブと呼ぶ。フシクビーシジ（3D左下）の西側の谷である。親徳図、島田図

345 フシンパー [フシンパー] 山名【5B中下】

奥与那林道（旧ウイバル林道、4B右中）を約2.8km行った所の二号橋（5B右中）に流れる奥川に支流がある。その中流付近のカーミーマタ（5B中上）から南に分岐した支流が上流域で再分岐する所から始まる尾根は南に延び、チヌブク林道（4A中下、6A中央）に繋がる。その尾根の中間付近に付いた名がフシンパーである。名の由来は不明。島田図

346 復帰前のスイ林道終点 [一] 史跡名【4D中央】

楚洲領域「伊江原、県52林班」、三角点（尾西岳、272.1m、4D左下）の北東約530m付近で、ワタヌッキガー（4D右中）の支流と交差する所が、復帰前のスイ林道終点である。奥川河口付近に架設されたワナー橋（現奥橋、3C右上）から約3km、現在の県道70号（2D中下、4E左中）からスイ林道を辿ると約3.2kmの地点である。島田図

347 フパダチ [フパダチ] 一般地名【2C左上】

奥集落の西側「112林班、世皮原」にある海岸に沿った兼久地に拓かれた田畑である。田は湿田と干田があり、湿田は一期、二期作とも米を作り、干田は一期作に米、二期作に芋をうえた。湿田にはターイ

ナ（タニシ）が沢山棲息していた。兼久地には、ジーマミ（落花生）、芋、ナンクワン（カボチャ）などが栽培された。往時のこの風景はない。島田図

348 フパダチガー [フパダチガー] 川名【2C左中】

奥集落の西側「112 林班、世皮原」にある海岸に注ぐ川で、名は地名に因む。源流はスイクビ（2C 左中）やターンクビー（2B 右下）とする。フパダチガーには戦前の旧県道工事で暗渠が設置されていたが、復帰後の農道整備のため架けなおされた。島田図

349 フパダチグチ [フパダチグチ] 海名【2C左上】

奥集落の西側「112 林班、世皮原」にある海岸にある礁嶺の割れ目である。フパダチガー（2C 左中）の河口付近の沖に位置する津口名である。島田図

350 フパダチヌタター [フパダチヌ'タター] 海名【2C中上】

奥集落の西側「112 林班、世皮原」に、奥で一番長く、美しい砂浜がフパダチバマである。フパダチバマに注ぐフパダチガー（2C 左中）の河口東側にある大きなクルイシ（黒色の千枚岩）が立岩となっている。その岩に付いた名がフパダチヌタターである。岩質は千枚岩（頁岩）であるが岩相が垂直に立っており、付近の地層と異なる地形である。似た岩にユッピーヌタター（1B 右下）があり、ナハンイノー（フパダチイノー、2C 左上）とウスミチイノー（2C 中上）の境界点となっている。島田図

351 フパダチバマ [フパタチバマ] 海名【2C左上】

奥集落の西側「112 林班、世皮原」にある浜である。奥で一番長く、美しい砂浜がフパダチバマである。この付近は潮の流れも安定していて、子供たちの海遊びや釣りの練習場に適した海岸である。また、ウミガメの産卵場としても知られている。親徳図、島田図

352 フバマ [フバマ] 海名【2C中上】

奥集落の西側「112 林班、世皮原」にある小さな浜の名がフバマである。奥湾の西側にシドゥンサチ（2C 中上）が北に突き出ている。その西側のフパダチバマ（2C 左上）との間にある小さな浜。島田図

353 フバマイノー [フバマイノー] 海名【2C中上】

奥集落の西側「112 林班、世皮原」にあるフバマ（2C 中上）の礁池をフバマイノーと呼ぶ。親徳図、島田図

354 プルガンサ [プルガンサ] 史跡名【3C左上】

奥集落西側にある製茶工場の西の岩下にあったとされる古墓跡。プル（古い）でガンサは墓の古語である。古い墓に因む。かつては岩下に人骨が転がっていた。岩場は尾根方面から切り出した木材などを落とすバンタであった。また、この岩下から遺物が出たことから奥集落発祥の候補地の一つとしてアンガー説の場所として、伝承されているが、それを裏付ける資料になってない。島田図

355 フルギンバル [フルギンバル] 一般地名【6B中央】

奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を約 4.5km 行った所に、五号橋（6C 右上）がある。その南側からマチアラシガー（6B 右上）に降り、中流付近に南から小川が注ぐ、その上流付近の窪地を古堅という人が開墾を拓いたことに、因む名である。開墾跡に、1930（昭和 5）年度に杉、イヌマキ、楠木を造林。島田図

356 フルチクブ [フルチ'クブ] 山名【2B中央】

奥集落の北西側アプトー (2B 中央) の南側に位置する「奥山、54 林班」内を流れるタチガミガー (2B 右上) が東西に分岐した西側支流の上流にある窪地に付いた地名。名の由来は不明。昔、辺戸上原から牛を盗んで殺した所と云われている。島田図

357 辺野喜山荘 [-] 一般地名【7A中上】

辺野喜領域「大山川、38 林班」北端にある私有地に建てられた山荘名。イーⅡ号林道とチヌブク林道の合流点 (7A 中上) のチヌブク林道わきの東にある。島田図

358 ヘンスーウバテ [ヘンスーバテ] 一般地名【3A右下】

国道 58 号 (3A 中央、3C 中下) を辺戸方面に約 2.3km に、国道 58 号線から琉大「奥の山荘」への入口 (3A 右下) がある。そこから山荘へ登りかけた道沿いに拓けたミカン畑がある。この一帯に付いた地名がヘンスーウバテである。ヘンスーは貧乏と訳されるが名の詳細は不明である。島田小 (奥の屋号) の果樹園付近。島田図

359 ホーグ [ホーグ] 史跡名【3C左中】

奥集落南側の斜面の尾根沿いに、ウエーダ (3C 中央) からヤマジー (3B 右中) 付近まで、保安林として松が造林されていた。保安林に因みホークと呼ばれている。かつては枝ぶりのよい大木が茂っていて蔡温松とも呼ばれていた。1955 年頃まで大きな松があった。島田図

360 ホーグ [ホーグ] 史跡名【3C左上】

部落の西端茶工場の西側にあるフルガンサ (3C 左上) のある岩場から南側へと尾根筋伝いにヤマジー (3B 右中) 付近まで、保安林として松が造林されていた。保安林に因みホーグと呼ばれている。かつては枝ぶりのよい大木が茂っていて蔡温松とも呼ばれていた。1955 年頃まで大きな松があった。島田図

361 マシガー [マシガー] 川名【4B左下】

チヌブクガー (4B 右上) の中流域で、ハートウイグムイ (4B 左下) に南東側にあるウチバルカイウン (4B 中下) から注ぐ川の名前をマシガーという。名の由来は不明。「奥山、56 林班」内に位置する。親徳図、島田図

362 マシタダー [マシタダー] 水田名【4C左下】

奥集落から奥与那林道 (旧ウイバル林道、4B 右中) を約 1.8km 付近の奥川の東に、マシタ (奥の屋号：松下) が、開拓した田がマシタダーである。かつてはウイバル林道からシブギントー (4C 左下) への道を通じて奥川を渡り行き来したが、奥川大河川改修工事でほとんど失われた。「113 林班、仲田原」領域、奥川の東側、親徳図

363 マシタダー [マシタダー] 水田名【4C左下】

奥集落から奥与那林道 (旧ウイバル林道、4B 右中) を約 1.8km 付近の奥川の西に、マシタ (奥の屋号：松下) が、開拓した田がマシタダーである。かつてはウイバル林道からシブギントー (4C 左下) への道を通じて行き来した。奥川改修工事で一部失われた。往時の田園風景は消えてしまった。「114 林班、菊連」領域、奥川の西側、親徳図

364 マチアラシガー [マチアラシガー] 川名【6B右上】

奥集落から奥与那林道 (旧ウイバル林道、4B 右中) を約 4.0km に五号橋 (6C 右上) がある。奥川の

支流マチアラシガーである。ニシミ（西銘岳、420.1m、6A 右下）の東裾野で、「奥山、58 林班」の北側に位置する。中流域は落差が小さいことから林産物を運搬する道としても使われた川である。流域には、開墾跡、炭焼窯跡、造林跡など生活の痕跡が多く残る。名の由来については不明。島田図

365 マチカンデーマチ [マチカンデーマチ] 一般地名【5B右上】

奥集落から奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を約 3km 行った所に二号橋（5B 右中）がある。そこからカーミーマタ（5B 中上）、イズーミチ（5B 左上）やウチバルカイクン（4B 中下）へ繋がる古道や農道がある。「奥山、56 林班」内である。林道から登りかけた所に三角点（仲田原、114.6m、5B 右上）があり、ナーカバンタ（5B 右上）を過ぎたシジ（頂）の北側にあった松の名前をマチカンデーマチと呼んでいた。詳細は不明だが、戦後まで松の大木が 3 本あり、山への行き来の待ち合わせ場所であったと伝承されている。島田図

366 マッカ [マッカ] 一般地名【4C左上】

奥集落から奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を約 1km にハッテン橋（4B 右上）がある。その東側を流れる奥川の東側をクニンバテー（4B 右上、4C 左上）に奥区が管理していた旧イノシシ垣が北側に残る。このイノシシ垣の北側斜面がマッカで、段畑を形成し芋畑であった。かつてはガジマナ（4C 左上）から奥川を渡って行き来したが、復帰前後に行われた奥川大河川改修工事（1970 年～ 1999 年、2 期 12 年に及ぶ工事）で堤防沿いの農道が利用できるようになったが、放置され往時の段畑風景は消えた。島田図

367 マッカクワー [マッカクワー] 一般地名【4C左上】

マッカ（4C 左上）の北側にある小さな斜面に拓いた段畑が、名に因んでいる。奥川の改修工事でほとんどが失われた。親徳図

368 マツキチャマ [マツキチャマ] 一般地名【2B右下】

奥集落からシーバーミチ（3C 左上）を登り旧道（現農道、2A 左中、2C 中央、3B 中上）に合流しシーバーヌチジを越えて辺戸側に向かうと、ターウインパナ（3B 右上）を過ぎた所にハーラヤキ（3B 右上）のカーブがある。そこから西側に山道をくだるとタチガミガー（2B 右上）の支流に着く。その付近に宮城松吉が杉を造林したことに因む山名である。「112 林班、世皮原」の南東端に位置する。島田図

369 マンカー [マンカー] 一般地名【3C中上】

奥集落を流れる奥川の東側にあった田畑で、ナンチンムイ（標高 173m、3C 右中）の西斜面でイビガナシ（3C 右中）から北側の領域をマンカーと呼んでいる。平坦地は田圃で斜面は芋畑であった。奥川大河川改修工事（1970 年～ 1999 年、2 期 12 年に及ぶ工事）で田圃の範囲が縮小され、放置されているため往時の面影はない。親徳図

370 ミーダー [ミーダー] 水田名【3C中上】

奥集落の田圃は奥川流域に開けた沖積層に拓かれた乾田と、集落を囲む三方の山麓から奥川に注ぐ支流域に拓かれた湿田の棚田の二つに分類され、年代は不明だが古い時代から開けていたようである。新たに拓かれた田に因みミーダー（新田）と呼ばれる。最後の開拓は、金城基恭（奥の屋号：上ノ根）などが行った。集落北側の奥川の西側はかつてガタ（潟）と呼ばれた湿地帯であった。1900 年に行われた土地整備の際のトラブルについて、字誌「奥のあゆみ」（338-340 頁）に伝説的に記載されている。また、1909 年にはセイネンミチ（青年道、2C 中下）が建設される。1964 年頃までイナトウ（ワナー、2C 右下）の河口付近にはマングローブが自生していた。その面影は消えている。ピドウムイ（3C 中央）からの用水路はミーダーまで引かれ、集落内を流れる所をナガミジバイ（長水張）と呼び、生活用水としても活用された。現

在は排水路として残る。島田図

371 ミヤゲムイ [ミヤゲムイ] 史跡名【3C左中】

奥集落の南端に位置する丘陵を、ミヤゲムイと呼び、神号「マノハ」という女神を祀る祠（ほこら）がある。ミヤゲムイには、1914年に乃木将軍の愛国心を讃えて、乃木将軍の半身像を安置した「乃木神社」が建立された。その後1928年に、昭和天皇の即位を記念して「護国神社」と改称した。ところが辺土名兼久などの収容所から開放され、1945年10月5日に集落に戻った住民は、10月26日の役員会で「従来軍神として奉れる乃木神社は、日本敗戦のため神として奉ることは如何と思ひ廃することとせり」と議事録に記して廃止した。1962年末に、廃止された神社の台座を利用して慰霊塔が建立された。また、隣には「忠魂碑」も残されている。島田図

372 ムサー [ムサー] 海名【3E左上】

奥湾の東側「115林班、加世原」の東端に位置する海岸の危険個所についた名前が、ムサーである。この一帯は岩場で裾礁が発達しているが、この場所は裾礁が切れ岩穴の奥まで沖から波が押し寄せるため、干潮時でも波が湧きあがったり、沖に引いたりするので、割れ目を越えるのに難渋する場所である。奥集落ではピダ（東）海の難所として注意がうながされている。島田図

373 ムサーグチ [ムサーグチ] 海名【3E左上】

奥湾の東側「115林班、加世原」の東端に位置する海岸の危険個所についた名前がムサー（3E左上）である。ムサーの裾礁が切れ沖に繋がる津口をムサーグチと呼ぶ。親徳図、島田図

374 メーガンクブ [メーガンクブ] 一般地名【3A右下】

奥集落から国道58号線を辺戸方向に約2.3kmに、国道58号線から琉大「奥の山荘」への入口（3A右下）がある。そこの北側の窪地の総称がメーガンクブである。名の由来はメーガ（ミョウガ類）が自生していることに因む。付近の川筋にはメーガが群生し、夏になると白い花が咲き誇る。現在はミカン畑となっているが、杉や楠木の植林が確認できるが、かつて上質のチヌブーダヒ（釣竿竹、ホテイチク）があったと伝承されるがその痕跡は確認できない。「奥山、55林班」。島田図

375 メーゾーグワーバル [メードーグワーバル] 一般地名【4D中下】

楚洲の領域「伊江原、県51林班」内を西からタチガーバマ（4E中下）に注ぐタチガー（4E左下）の支流がウニシ（尾西岳、272.1m、4D左下）南東裾野を源流として北東に流れタチガーの上流域に、メーゾーグワー（奥の屋号：前門小）が拓いた開墾名がメーゾーグワーバルである。チルシジ（4D中下）の南側。島田図

376 メーナガニ [メーナガニ] 山名【5B左下】

チヌブク林道と宜名真林道の合流点（5A右下）南東側約250m付近で、奥領域「奥山、57林班」と宇嘉領域「知意花山、県55林班」の字界線と、ニシミ（西銘岳、420.1m、6A右下）から北に伸びる西脊梁山脈の尾根筋とチヌブク林道が重なり合う所がある。その付近をメーナガニと呼んでいる。名の由来については不明。島田図

377 メーバマ [メーバマ] 海名【2C中下】

奥集落の海岸である。かつては奥小学校付近から砂嘴が東に発達してできた砂浜であったが、奥港築港工事が1983年頃行われ、旧護岸（1933年竣工）の外側に、新護岸が造られたため砂浜は消えてしまい、かつての子供たちの海遊びの面影も消えた。部落の「前の浜」が名に因む。島田図

378 メーマダー [メーマダー] 水田名【4B右中】

奥集落から奥与那林道(旧ウイバル林道、4B 右中)を南下し、ハッテン橋(4B 右上)を過ぎた約 1.5km の西斜面に湿田がある。その田の名をメーマダーと称する。由来はメーマ(奥の屋号:前間)が開拓したことに因む。神地で「のろくむい地」の一つである。親徳図

※のろくむい地はノ口に給された土地のこと。

379 メーンパー [メーンパー] 一般地名【3C左中】

奥集落の南斜面で、東側はミヤゲムイ(3C 左中)から茶工場の南斜面の総称である。由来は「前の坂」に因む。昔は段畑で、芋を始めたする農作物が植えられ、アンガー(3B 右上)に面した段畑やヤマジー(3B 右中)の茶畑へと繋がる畑道があった。また、奥集落発祥の一つの場所と伝承されているが、それを裏付ける資料はない。島田図

380 ヤーガラ [ヤーガラ] 山名【3A右上】

奥集落から旧道(辺戸奥線、本稿 139)を西に行くくと辺戸部落との境界であるヤマダヘー(2A 右下)にたどり着く、その手前に三角点(大堂、228.9m、3A 右上)の南側に、トープマミバル(3B 左上)から宜名真領域「吉波山、51 林班」に下る尾根がある。その尾根の東にある平坦地をヤーガラと称している。名の由来は不明。島田図

381 屋久杉植林所 [一] 史跡名【3D右中】

奥集落からスイヌチジ(スイ林道と県道 70 号の合流点、3D 中央)を通り越し約 2km 付近は、かつてウグミチ(3D 右下)が通っていたところである。右まがりのカーブの内側に南東側に開けた奥行約 160m、最大幅約 40m の窪地がある。その窪地に屋久杉が造林されていた。カールメー(奥の屋号:川之前)のスモモ畑一帯である。スモモからミカン畑に転作され放置されているが、今でも杉の木が多く残っている。明治の探検家、笹森義助著「南島探検」(1895 年)を基に、「奥のあゆみ 字誌」P.554 より引用「1893 年 6 月 20 日晴、88 度 6 分、午前 9 時出起、同村ノ内楚江川山ノ杉仕立山ヲ見ル。今ヨリ 60 年前、鹿兒島ヨリ苗木ヲ移植セル者ハ、目通り三四尺廻ナリ、山所ニテ杉立木一本代ノ価ヲ問ヘハ、金一円也・・・」とある。島田図

382 ヤクチ [ヤクチ] 一般地名【3D左上】

奥湾東に位置する「114 林班、楚意原」に位置するスイ(2D 左下)の平地の中央部を流れるスイガー(3D 左上)の東沿いにある畑の名前である。国頭村史(国頭村役場、1967 年 3 月発行、123 ~ 129 頁)によると。

「役地には、地頭地、おえか地、のろくもい地の種類があった。

◎地頭地は按司地頭、総地頭に給するもので、按司時代における按司の領有に始まったものである間切や村の百姓に耕作させて収穫の三分の一をあたえ、残り三分の二から貢租を控除した残部を地頭の作得とした。

◎おえか地は地頭代以下の間切り役人に給する土地。

◎のろくもい地はノ口に給する土地。

おえか人とノ口は元来土地の百姓であったから、おえか地・のろくもい地を自ら耕作したが、のろくもい地の一部はノ口の地割地に当てられた。役地も売買や質入は禁止されていた。」とある。

また、近くにヒクソーチ(百姓地、本稿 329)がある。何故本部落にはないのに小字であるスイ部落あとに、ヤクチとヒクソーチが残るのか興味を注ぐ。親徳図

383 ヤクバエーバテー [ヤクバエーバテー] 一般地名【7B右上】

奥領域の南端「奥山、58 林班」の東側に位置し、南側から北にながれる奥川の支流であるヤナマタガー(6C 左下)の上流域の西窪地にあるエーバテー(リュウキュウアイを植栽した藍畑)ある。なぜヤクバ(役

場)を冠するエーバテーなのか詳細不明。その上流が東側支流にはクランニーグァーエーバテー (奥の屋号: 蔵ン根小が拓いた藍畑、7B 右上) もある。島田図

384 ヤッチェーイシ [ヤッチェーイシ] 一般地名【3C左上】

奥集落から辺戸方面へ向けてシーバーミチ (3C 左上) を登ると、茶工場からアンガー (3B 右上) 沿いの小道と合流する所にある岩をヤッチェーイシと呼んでいる。往時の旅人をシーバーミチ入口である「上の橋」のアジマー (広場) から見送る村人に最後の別れをするのが、この岩の上であった。シーバーミチは放置され往時の面影はない。島田図

385 ヤナギ [ヤナギ] 一般地名【4C左下】

奥集落から奥川の東縁沿いの農道を約 1.9km 行った所の山裾に、南側に開いた窪地にあった湿田付近がヤナギである。かつては西にあるマシタダー (4C 左下) から奥川を渡って行き来したが、湿田は奥川大河川改修工事 (1970年～1999年、2期12年に及ぶ工事) で、東側はほとんどが失われた。現在はミカン畑が営まれている。島田図

386 ヤナマタガー [ヤナマタガー] 川名【6C左下】

奥集落から奥与那林道 (旧ウイバル林道、4B 右中) を約 4.8km 地点にウイバル林道終点 (戦前、6C 左中) がある。その付近で奥川の上流域の支流が分岐する。その一つにヤナマタガーがある。「奥山、58 林班」の東側を南北に流れる川である。名前の由来は川が急流をなし、林産物の搬出には難所であるのに因むとしかがうが、川の状態は未確認である。島田図

387 ヤマグムイ [ヤマグムイ] 海名【2E左下】

奥湾の東にある「115 林班、加世原」の東海岸、ウトウミジ (2E 左下) の裾礁にできたクムイ (窪地の水溜り場) である。ダラギクブ (3D 右上) からの小川が注ぐ付近に位置する。親徳図、島田図

388 ヤマジー [ヤマジー] 一般地名【3B右中】

奥集落の南側「113 林班、桑又原」の北部に位置した付近に茶畑やミカン畑などが拓かれた領域の総称である。部落南の段畑であるメンパー (3C 左中) から山道を歩いて行き来していた。現在は集落から国道 58 号線 (3A 中央、3C 中下) を辺戸方向に約 1.4km 付近に車が通れる農道ができていて、そこを利用して行き来する。奥の伝統行事であるシヌグの初日に行われるフーヨーサレー行事の際、シバヒ (イヌガシ) をとる山の一つがヤマジーシジ (山地頂、3B 右中) 付近の山である。ヤマジーには奥区が管理していたイノシシ垣 (西大垣第三区) が南北に通っている。かつて紡績婦りの女性たちが月夜にハイノー踊を舞い明かしたと伝承されるハイノーマー (3B 右中) などがある。また、ウブドー (3A 右上) やアンガー (3B 右上) へ繋がる山道の中継場ともなっていた。島田図

389 ヤマジーシジ [ヤマジーシジ] 山名【3B右中】

奥集落の南側「113 林班、桑又原」の北部に位置した付近に茶畑やミカン畑などが拓かれた領域の総称がヤマジー (3B 右中) である。ヤマジー付近の中央部に標高約 190m の頂がヤマジーシジである。詳細は不明である。かつてヤマジーへの行き来は、部落南の段畑であるメンパー (3C 左中) から山道を歩いて行き来していた。現在は部落から国道 58 号線 (3A 中央、3C 中下) を辺戸方向に約 1.4km 付近に車が通れる農道ができていて、そこを利用して行き来する。奥の伝統行事であるシヌグの初日に行われるフーヨーサレー行事の際、シバヒ (イヌガシ) をとる山の一つがヤマジーシジ (山地頂、3B 右中) である。採ったシバヒを担ぎホーグ (3C 左中～中央)、ミヤゲムイ (3C 左中) と経由し、ウッカー (3C 中央) で、シバシジ (5C 中上) からのもう一つのシバヒ採り組と合流してから「フーヨーサレー」「ヘイヘイサレー」の掛け声を懸け合いながら部落内の悪霊払いの神事が始まる。親徳図、島田図

390 ヤマダヘー [ヤマダヘー] 史跡名【2A右下】

奥集落の西端で、奥・辺戸・宜名真の字境界をなす地点の呼名である。旧道(辺戸 - 奥線、2A 左中、2C 中央、3B 中上)が字界線を東西に横切る南北の分水嶺である。北側はユッパガー(1B 中央)に流れ、南側はターマタ(3A 中央)を経て宜名真に流れる。東側に三角点(大堂、229.1m、3A 右上)がある。1948年に辺戸から奥への山越県道(旧道)が着工された、その工事の辺戸と奥の工事分担境界が、字境界でもあるヤマダヘーであった。この場所の奥区の工事担当は3番組であった。そして、1951年に全長約4.0kmが開通したが、ヤマダヘーの工事の仕上げはブルドーザーが導入された。奥区民が近代器械を駆使した土木工事の素晴らしさを、初めて体験した場所でもある。島田図

391 ヤマンクビー [ヤマンクビー] 一般地名【2B左下】

奥集落の西端に位置する「奥山、54 林班」に拓けた開墾地である。アブントー(2B 中上)の南側、トープマバル(3B 左上)の北側に位置する標高200m線の周囲約3km、面積約28haの台地である。戦後南洋と大阪からの引き揚げ者が開墾した。現在もナンヨウヤー(南洋屋)と大阪屋の畑跡がミカン畑として残る。島田図

392 ユッパイノー [ユッパイノー] 海名【1B中上】

奥集落の北西海岸で辺戸部落の領域「111 林班、吉波原」の海岸にあるイノー(礁池)の名である。ユッパは辺戸部落の領域であるが、土地や海は奥の人が利活用していた。土地の所有者は奥の人である。イノー公売。ユッパヌイノークワー。島田図

393 ユッパガー [ユッパガー] 川名【1B中央】

奥集落の北西海岸で奥集落領域「112 林班、世皮原」と辺戸部落領域「111 林班、吉波原」の境界線を南からユッパバマ(1B 左上)に流れ込む川の名称である。その源流はヤマダヘー(2A 右下)一帯である。付近には三角点(コヒ崎、113.1m、1B 左下)がある。ユッパでは1960年頃まで奥の人達が、水田を営んでいた。またユッパガーには戦前に竣工された県道の暗渠が残る。島田図

394 ユッパグチ [ユッパグチ] 海名【1B中上】

奥集落の北西海岸で辺戸部落の領域「111 林班、吉波原」の海岸にある礁嶺の割れ目で津口を形成している所の海名である。親徳図、島田図

395 ユッパバマ [ユッパバマ] 海名【1B左上】

奥集落の北西海岸で辺戸部落の領域「111 林班、吉波原」の海岸にある砂浜の名である。ユッパバマには三つの川が注ぎ、東側の二つの河口が合流した付近は三角州をなし、幅の広い砂浜を形成し、西側の川は浜辺で河口を東に向けるため西側から砂嘴(さし)が発達し、高く盛り上がり砂丘を形成している。幅の広い砂浜で景観の良い所である。砂浜の南側にはかつて田や畑があった。戦前に着工された宇座浜 - 奥線の県道に関わる暗渠や火薬貯蔵庫跡などが残る。ユッパバマの西側の県道跡には、トゥールカ(天然の石トンネル)があり、そこから眺める辺戸岬は絶景である。

またユッパ領域には、1967年に琉球大学歴史研究クラブにより、貝塚が発見された。沖縄貝塚時代後期に属し、アカジャンガー式土器の採集報告がある。島田図

396 ユッピイノー [ユッピイノー] 海名【1B右下】

奥集落の北西海岸で、奥領域「112 林班、世皮原」の北西側に位置するユッピ海岸がある。その海岸の東側の礁池のことをユッピイノーと呼んでいる。ユッピイノーの西側に、1921年の夏、鹿児島・奄美大島諸島通いの鉄船かくれい丸(約600ト)が、与論島から台風で流され漂着した。奥集落民総出で救出した礁池の掘削跡が残る。イノー公売。島田図

397 ユッピーグチ [ユッピーグチ] 海名【1B右下】

奥集落の北西海岸で、奥領域「112 林班、世皮原」の北西側に位置するユッピー海岸がある。礁嶺が大きく開けた津口のことをユッピーグチと呼んでいる。親徳図、島田図

398 ユッピーザチ [ユッピーザチ] 海名【1B中上】

奥集落の北西海岸で、奥領域「112 林班、世皮原」の北西側に位置するユッピー海岸がある。海岸の西側の崎をユッピーザチと呼ぶ。ユッピーザチは奥集落が管理したイノシシ垣（西大垣一区）の起点である。北端から標高 50m 線に沿ってイノシシ垣が南に延びるが、アブントー（2B 中上）付近では標高 100m 線に沿って西から東に繋がり、タチガミガー（2B 右上）で、第二区と結合し南へと延びる。島田図

399 ユッピーシジ [ユッピーシジ] 山名【1B中央】

奥集落の北西海岸で、奥領域「112 林班、世皮原」の北西側に位置するユッピー海岸がある。海岸の西側にユッピーザチ（1B 中上）がある。ユッピーザチの頂上をユッピーシジと呼ぶ。1970 年前後に開発された牧場が今も営まれている。島田図

400 ユッピーヌター [ユッピーヌ'ター] 海名【1B右下】

奥集落の北西海岸で、奥領域「112 林班、世皮原」の北西側に位置する海岸をユッピーバマ（1B 右下）と呼び、東側のフパダチバマ（2C 左上）の境界に大きな岩が聳え立つ。タチガミガー（2B 右上）の河口東側にある大きなクルイシ（黒色の千枚岩）が立岩となっている。その岩に付いた名がユッピーヌターである。岩質はクルイシであるが岩相が垂直に立っており、付近の地層と異なる地形である。似た岩にフパダチヌター（2C 中上）がある。東側の礁嶺には「かくれい丸」救出の際にロープをかけたクルイシの立岩がある。島田図

401 ユッピーバマ [ユッピーバマ] 海名【1B右下】

奥集落の北西海岸で、奥領域「112 林班、世皮原」の北西側に位置する海岸がユッピーバマである。1942(昭和 17) に一部開通した旧県道（宇座浜奥線）の終点の地である。現在奥集落から西側の海岸への道が農道として整備されている。海岸はウミガメの産卵場所で、夏はキャンプ場として賑わう。また、南側の斜面にはアブントー（2B 中上）のタチガミ（標高 124m、2B 中上）が聳える。ユッピーバマには東側からタチガミガー（2B 右上）、サナシジガー（1B 右下）、イシビガー（1B 中下）の 3 つの川が注ぎ、それぞれに暗渠が残る。タチガミガーに架かる暗渠は復帰後の農道整備のため架け替えられている。島田図

402 ユッピーバンタ [ユッピーバンタ] 一般地名【1B中下】

奥集落の北西海岸で、奥領域「112 林班、世皮原」の北西側に位置するユッピーの海岸がある。西側にユッピーザチ（1B 中上）から南に延びたユッピーシジ（1B 中央）があり、昔シジ（頂）付近から木材を流し落とす高低差約 50m のバンタが、イノシシ垣を横切り痕跡を残していた。現在は森に覆われ確認できない。島田図

403 ユンヌヤマ [ユンヌヤマ] 史跡名【5C右中】

奥集落から奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を約 3.9km 地点に四号橋（本稿 411）がある。その東側は楚洲領域「伊江原、県 53 林班、ユンヌヤマ」である。この県 53 林班の西側境界は奥川の中流域沿いに北からヒナフシ（5C 左上）、アハマタガー（5C 左中）、アラマタガー（5C 左中）、ヒヤギマタ（6C 右上）までの字境界線、南側境界はヒヤギマタからウチンヒチガー（6C 右上）沿いに東側にある三角点（ゆうぐしく、292.7m、6D 左中）まで、東側境界は三角点（ゆうぐしく）から三角点（尾西岳、272.1m、4D 左下）を結ぶ楚洲領域の東脊梁山脈である林班境界として、北側境界は尾西岳から西に字境界線を下ったヒナフシの間に囲まれた領域である。このように、県 53 林班は東脊梁山脈から奥川中流域まで西に食

い込み、いびつな楚洲領域を形成している。周囲の山名や林班番号からしても不自然な位置付けとなっているのである。奥集落ではこの県 53 林班をユンヌヤマの山名で伝承されている。

また、与論町誌（1988 年発行）に掲載されている大道那太（ウフドウナタ）という民話の中に「ユンヌ山」が記述されている。内容を紹介すると「応永 23 年（1416）・・・琉球近海に異国船が出没し、世の中が大変不安になって国王が那太の武名を聞いて援助を求めた。彼の放った矢の威力に敵は恐れをなし、その礼として王女を妻に娶ったという。しかも山原の奥に山野を貰ったといわれ、今でも『ユンヌ山』というのがある。」（与論町誌 163 頁）と掲載されている。

奥集落におけるユンヌヤマについての証言は、澤岬親八郎（1891 年生）と平安基光（1919 年生、元官山夫としての作業経験者）の 2 人である。島田図

404 四号橋 [ヨンゴバシ] 史跡名【5C左下】

奥集落から奥与那林道（旧ウイバル林道、4B 右中）を約 3.9km 地点付近で、奥川の支流が西側から注ぐ小川に架かる暗渠を四号橋（暗渠）と呼んでいる。東側を南北に奥川が流れ、その対岸はユンヌヤマ（5C 右中）である。西側は「奥山 57 林班」で林道に上（西側）は青年山があった。現在はミカン畑が開拓されている。島田図

405 琉大「奥の山荘」[-] 史跡名【3A右中】

奥集落から西のシーバーミチ（3C 左上）を登り 1951 年に開通した県道（辺戸 - 奥線）を約 2 km 辿ると南方向へ分岐する所に達する。宜名真領域と接する領域名「奥山、55 林班」の中央部に位置する標高 200m の台地があり、ウブドー（3A 右上）と呼ばれている。1950 年 8 月から 1965 年 3 月まで、国頭村立奥中学校があった。1965 年 4 月から部落内の奥小学校に再併置されたが、生徒数が少なくなり奥中学校は 2004 年 3 月を持って閉校となった。1965 年 8 月に中学校跡地は琉球大学に譲渡され、琉球大学「奥の山荘」として現在にいたる。2003 年 3 月の奥中学校の閉校に際し、琉球大学の承諾をえて、同窓生諸氏の計らいで敷地内に「開魂一心」の記念碑を建立する。現在は、南側を通る国道 58 号線から琉大「奥の山荘」への入口（3A 右下）から行き来する。島田図

406 ワザクブ [ワザクブ] 一般地名【5D左下】

楚洲の領域「伊江原、県 53 林班、ユンヌヤマ（5C 右中）（本稿 410）」のアラムタガー（5C 中央）上流で東側の稜線を通るスイ林道と伊江林道の合流点（5D 中央）の西側窪地に付いた地名である。さらに南側にはシタンクブ（6D 左上）がある。名の由来は不明。親徳図、島田図

407 ワタヌッキガー [ワタヌッキガー] 川名【4D中央】

奥集落から県道 70 号（2D 中下、4E 左中）を約 3.7km にチルガー（4E 左上）に架けられたチルガー橋（4E 左中）がある。チルガーまでの海岸線は奥領域であるが、県道 70 号（2D 中下、4E 左中）の西側は楚洲領域「伊江原、県 52 林班」である。そこを流れるチルガーの上流をワタヌッキガーと呼ぶ。源流は「伊江原、県 52 林班」の南西にあるウニシ（尾西岳、272.3m、4D 左下）の東側山麓とする。名の由来は不明。親徳図、島田図

408 ワタヌッキシジ [ワタヌッキシジ] 山名【4D右中】

奥集落から県道 70 号（2D 中下、4E 左中）を約 3.7km にチルガー（4E 左上）に架けられたチルガー橋（4E 左中）がある。チルガーまでの海岸線は奥領域であるが、県道 70 号（2D 中下、4E 左中）の西側は楚洲領域「伊江原、県 52 林班」である。チルガーの上流をワタヌッキガー（4D 中央）と呼び、川の北側を東西に通るスイ林道に沿った北側の尾根の名前がワタヌッキシジである。名の由来は不明。島田図

409 ワタヌッキパー [ワタヌッキパー] 山名【4D右中】

奥集落から県道70号(2D中下、4E左中)を約3.7kmにチルガー(4E左上)に架けられたチルガー橋(4E左中)がある。チルガーまでの海岸線は奥領域であるが、県道70号(2D中下、4E左中)の西側は楚洲領域「伊江原、県52林班」である。そこを流れるチルガーの上流をワタヌッキガーと呼ぶ。その川の南側で県51林班と県52林班が境界をなす所をワタヌッキパーと呼ぶ。林班境界は南西のチルシジ(4D中下)、さらに畑中隊解散の場(4D左下)を通り、スイ林道にと繋がる。名の由来は不明。島田図

410 ワタンナ [ワタンナ] 水田名【3C中下】

奥集落から奥与那林道(旧ウイバル林道、4B右中)を約600m行った付近の奥川付近をワタンナと呼んでいた。南東側には東側から奥川の支流であるワタンナガー(4C中上)が注いでいた。1969年10月7日の豪雨による洪水で肥沃な奥川沿いに田園は砂礫で埋め尽くされた。その後1970(昭和45)年から1999年まで、2期12年にわたる奥川大河川改修工事により、奥川は深く掘られ両面をコンクリートで固められ、河川は直線となった。かつて大きく奥川が蛇行したワタンナグムイは深い淵をつくり上流と下流は浅い瀬となり、南東に広がる田圃や山への道へと繋がっていた。往時の肥沃な田園風景は消えた。名の由来は不明。親徳図

411 ワタンナガー [ワタンナガー] 川名【4C中上】

奥集落から奥与那林道(旧ウイバル林道、4B右中)を約600m行った付近を、かつてワタンナ(3C中下)と呼び、南東側は奥川の支流であるワタンナガーが注ぎ、三角州をなし肥沃な田園地帯を拓いていた。1969年10月7日の豪雨による洪水で肥沃な奥川沿いに田園は砂礫で埋め尽くされた。ワタンナガーは、源流をウニシ(尾西岳、272.3m、4D左下)の北西山麓になし、奥集落が管理したイノシシ垣(東大垣第四区)と交差するところにサールーバンタ(4C中央)がある。また、支流にイノシシ垣のワタンナ中垣境と呼ばれる旧イノシシ垣の分岐点があり、南に延びる区管理のイノシシ垣である東大垣第四区と第五区及び西に延びる旧垣の接点となっている。島田図

412 ワタンナガーグムイ [ワタンナガーグムイ] 川名【3C左下】

奥集落から奥与那林道(旧ウイバル林道、4B右中)を約600m行った付近をワタンナと呼び、大きなカーブをなし、下には大きな深い淵があった。その淵をワタンナガーグムイと呼んでいた。フムイと林道の間には灌がい用の水路が引かれていた。往時は、夏の暑い日などにはフムイに飛び込み泳ぐなど、住民には親しみ深い場所であった。1969年10月7日の豪雨による洪水で肥沃な奥川沿いに田園は砂礫で埋め尽くされた。1970年から行われた奥川大改修工事でフムイは失われ、1996年にボーリングされた国頭村営の簡易水道のポンプ小屋が設置された。島田図

413 ワナー橋 [ワナーバシ] 史跡名【3C右上】

奥川河口付近をワナーと呼ぶ。名の由来は不明である。1972年の復帰まで、沖縄島北部を西海岸沿いに繋がる琉球政府道1号線と東海岸線沿いに繋がる13号線の終点となっていたのがワナー橋である。かつてワナー橋は1952年から始まった楚意林道工事に伴い架設された。1960年には琉球政府道13号線の工事に伴い鉄骨の橋が架設された。1970年鉄骨橋落ちる。その後1972(昭和47)年に竣工したのが現在の「奥橋」へと引き継がれている。

1960年頃までワナー橋からイナト(川尻)は、子供たちの漁場であった。夏場の夕方の満潮時刻に合わせてガーラ(アジの一種)を釣りに行き。干潮時にはガサミやエビを採ったりした場である。また、奥区民総出で行った最後のプレーザサ(1955年8月)の時に、同僚たち数人で迷い込んだサバ(サメ、体長約1m)を追いかけて捕獲したのもワナーでの楽しい思い出である。島田図

414 ワラビバル [ワラビバル] 史跡名【2B中上】

奥の西海岸ユッピバマ(1B右下)の南側の丘陵地にあるアブントー(2B中上)がある。奥の領域「112林班、世皮原」の北西端に位置する。アブントーの平坦地の西側でユッピバマに注ぐイシビガー(1B中下)

の上流付近をワラビバルという。かつて土地が人口割に分配された頃の名残で、宮城サチ（奥の屋号：前六ツ又、1917年生）から「ワラビバルを与えられた」とうかがったことがある。島田図

参照した文献と資料

文 献

国頭村教育委員会（1987）国頭村文化財調査報告書第2集 国頭村の遺跡― 詳細分調査報告 一. 国頭村教育委員会. 84p.

国頭村役場（1967）国頭村史. 国頭村役場. 718p.

球陽研究会（1979）沖縄文化史料集成5 球陽 読み下し編. 角川書店. 793p..

奥のあゆみ刊行委員会（1986）奥のあゆみ 字誌. 国頭村奥区事務所. 585p.

大西正幸・宮城邦昌編（2016）シークワサーの知恵 ―奥・やんばるの「コトバー暮ら―生きもの環」. 京都大学学術出版会. 529p.

笹森儀助（1982）南嶋探検1. 東洋文庫 411. 平凡社（初版第4刷）.

島袋源一郎著・国頭郡教育会編（1967）沖縄県国頭郡志. 沖縄出版会（第三版）. 450p.

与論町誌編集委員会（1988）与論町誌. 与論町教育委員会. 1422p.

資 料

国頭村奥区事務所（1933年4月調整）. 字奥 造林台帳.